

東勝寺跡 (No.246)

小町三丁目 538 番 8 地点(I 地点)

小町三丁目 538 番 3 地点(II 地点)

例 言

1. 本報は「東勝寺跡 (No.246)」内、鎌倉市小町三丁目 538 番 8 (略称TK) と鎌倉市小町三丁目 538 番 3 (略称TT) の 2 地点における個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査期間と調査対象面積は以下の通りである。
小町三丁目 538 番 8 (I 地点) : 平成 16 年 7 月 30 日～同年 9 月 3 日 調査面積 42.84 m²
小町三丁目 538 番 3 (II 地点) : 平成 16 年 8 月 18 日～同年 10 月 25 日 調査面積 64.50 m²
3. 発掘調査体制は以下の通りである。
調査担当者 : 原 廣志
調 査 員 : 須佐直子・根本志保・岩崎卓治・中川建二・須佐仁和・榎岡溪音・宇都洋平
小野夏菜・吉田桂子
調査補助員 : 井上翔太郎・木内伸輔・児玉和彦・沢口和正・高橋江奈・野崎美帆・橋本和之
早川 智・平井里永子・平山千絵・銘苺春也・山口正紀
協力 機関 : 鎌倉考古学研究所
4. 整理作業分担は以下の通りである。
遺構図整理・墨入 : 小野・吉田
遺物実測・墨入 : 根本・岩崎・吉田
挿図・図版作成 : 小野・吉田・原・平山
遺物観察表 : 平山・原
写真撮影 : 全景・個別遺構—須佐 (仁)・原 遺物—須佐 (仁)
空中撮影 : ラジコンヘリコプター (株式会社 朝日航洋)
花粉分析 : 鈴木 茂 (株式会社 パレオ・ラボ)
5. 本調査に係る出土品及び図面・写真など記録資料類については鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 本報の凡例は以下の通りである。
挿図縮尺 遺構全側図 : 1/80 個別遺構 : 1/40、一部 1/60 遺物 : 1/3、銭 1/2
挿図遺構 遺構の標高は海拔高度を示す。
挿図遺物 — — — — は釉薬の範囲を示す。黒塗りは主に墨書または灯明皿などに付着した油煤煙などを表現している。
使用名称 本文中に使用した用語のうち、「土丹」は三浦・葉山層群の泥岩、「鎌倉石」は池子岩層に顕著な凝灰岩質砂岩、「伊豆石」は相模川以西の河川・海浜に産する礎石に利用可能な水摩した扁平円礫のことを指す。
遺物観察表 単位 cm、() 推定値を表している。
7. 現地調査及び資料整理において多くの方々からご助言ならびにご協力を賜わった (敬称略)。
秋山哲雄・伊丹まどか・岡 陽一郎・河野眞知郎・菊川 泉・菊川英政・古田戸俊一・鈴木弘太・鈴木絵美・鈴木庸一郎・佐藤仁彦・汐見一夫・宗臺秀明・宗臺富貴子・田畑衣理・中田 英・松尾宣方・松葉 崇・松吉大樹・馬淵和雄・宮田 真

目 次

本 文 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境	42
a. 遺跡の位置と地形	
b. 遺跡の歴史的環境	
第2章 調査の概要	47
a. 調査の経過	
b. 側量軸の設定	
第3章 検出遺構と出土遺物	49
a. I地点の遺構と遺物	
b. II地点の遺構と遺物	
第4章 まとめ	78

挿 図 目 次

【I地点】

図 1 遺跡位置図	42	図 11 第2 a 面出土遺物	55
図 2 調査地点・周辺遺跡	43	図 12 第2 b 面全測図	56
図 3 国土座標位置・グリッド配置図	48	図 13 第2 b 面礎石列	57
図 4 調査区東・南壁土層堆積	49	図 14 第2 b 面土坑・ピット	58
図 5 第1面全測図	50	図 15 第2 b 面出土遺物	59
図 6 第1面建物 1	51	図 16 第3面全測図	60
図 7 第1面土坑・ピット	52	図 17 第3面土坑状遺構	60
図 8 第1面出土遺物	53	図 18 第3面、落ち込み出土遺物	61
図 9 第2 a 面全測図	54		
図 10 第2 a 面土坑・ピット	55		

【II地点】

図 1 調査区北・西壁土層図	62	図 7 第1面遺構外出土遺物	67
図 2 第1面全測図	63	図 8 第2面全測図	68
図 3 第1面土坑	64	図 9 第2面礎石建物	69
図 4 第1面ピット	65	図 10 第2面土坑・溝	71
図 5 第1面各遺構出土遺物	66	図 11 第2面ピット・玉石列遺構	72
図 6 第1面遺構外出土遺物	66	図 12 第2面各遺構出土遺物	73

図 13 第2面遺構外出土遺物 (1) ……73	図 15 第2面下トレンチ ……76
図 14 第2面遺構外出土遺物 (2) ……74	図 16 I区第2面下出土遺物 ……77

表 目 次

【I地点】

表 1 東勝寺跡調査地点一覧 ……45	表 5 遺物観察表 (2) …… 83
表 2 玉砂利計測表 ……80	表 6 遺物観察表 (3) …… 84
表 3 玉砂利計測表比率表 ……81	表 7 遺物分類別出土数量・比率… 85
表 4 遺物観察表 (1) ……82	

【II地点】

表 1 遺物観察表 (1) …… 86	表 5 遺物観察表 (5) …… 90
表 2 遺物観察表 (2) …… 87	表 6 遺物観察表 (6) …… 91
表 3 遺物観察表 (3) …… 88	表 7 遺物分類別出土数量・比率 …… 92
表 4 遺物観察表 (4) …… 89	

図 版 目 次

【I地点】

図版 1 a. 遺跡遠景(西から) b. 第1面全景(東から) c. 第1面全景(南から) …… 93
図版 2 a. 第2 a面全景(西から) b. 礎石列・砂利面 c. 砂利面検出状況 d. 第2 b面全景(西から) …… 94
図版 3 a. 第2 b面全景(東から) b. 礎石列(西から) c. 礎石 2 d. P 5 e. P 6 f. P 8 …… 95
図版 4 a. 第3面全景(西から) b. 土坑状遺構 c. 調査区南壁土層 d. 調査区東壁土層 …… 96
図版 5 a. 第1面遺構・遺構外 b. 第2 a面玉砂利層 c. 第2 a面遺構外 …… 97
図版 6 a. 第2 a面遺構外 …… 98
図版 7 a. 第2 a面遺構外 b. 第2 b面遺構・遺構外 c. 第3面土坑状遺構 …… 99
図版 8 a. 第3面遺構外 b. 第3面下落ち込み c. 第1面遺構外出土の焼け壁土 d. 第2面遺構外出土の焼け壁土 …… 100

【II地点】

図版 1 a. 遺跡周辺遠景 b. 調査地点遠景 …… 101
図版 2 a. 調査地点近景 b. I区第1面全景 c. II区第1面全景 …… 102
図版 3 a. I区第2面全景(北から) b. II区第2 a面全景(南から) c. II区第2 b面(北から) …… 103
図版 4 a. I区第2 a面 b. I区第2 a面 c. I区第2 b面 d. I区礎石建物 e. 調査区南壁サブトレンチ f. 第2面土坑 1 g. II区礎石建物 1・溝 1 h. 礎石建物 1・玉石列 …… 104

図版5	a. I区第2面下全景(西から) b. I区第2面下全景(北から)	
	c. I区調査区北壁土層 d. II区調査区西壁土層	105
図版6	a. 第1面土坑・ピット b. 第1面遺構外	106
図版7	a. 第2面土坑・溝 b. 第2面かわらけ敷き	107
図版8	a. 第2面ピット b. 玉石列 c. 第2面遺構外1	108
図版9	a. 第2面遺構外2	109
図版10	a. 第2面遺構外2 b. 第2面構築土中	110
図版11	a. 第2面構築土中 b. 第2面下トレンチ	111

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と地形

鎌倉は神奈川県南東部に位置する相模湾に面した海浜地域であり、三浦半島及び丹沢方面から連なる海拔高 100m前後で馬蹄形の丘陵に囲まれた市内を北東から南西に蛇行しながら流れる滑川によって形成された小さな沖積地が武都鎌倉と呼ばれる源頼朝の入部に始まる中世都市鎌倉の地域である。鎌倉市の北東最奥にある朝比奈切通付近、太刀洗川や吉沢川に端を発する滑川は、南西に向けて川谷と流域平地を造りだしながら進み、やがて相模湾の由比ヶ浜の1km手前で流れの向きを南方へ変えて下っており、大きく南へ蛇行するこの地点から下流域へと続き、海に向けて開いた三角形の沖積地が現在最も開発が進み、繁華街となっている。今回の発掘調査を行った遺跡は滑川が南へ向きを変える屈曲地点に近い場所に位置する。治承四年(1180)秋、鎌倉に入った頼朝はまず八幡宮(元八幡)を浜の砂丘帯にあたる由比ヶ浜から現在の沖積地北端の地である小林郷北山に勧請して鶴岡八幡宮とし、また寿永元(1182)に八幡宮の参道として南にまっすぐ伸びる中世都市鎌倉の基軸ともなる若宮大路を築造してから、次第に沖積地帯の開発が始まる。鎌倉に屋敷地を与えられた御家人らの館が建築され、都市整備が進むにつれ急速に人口も増加して都市化の道を歩むことになる。

遺跡はJR 鎌倉駅から北東へ約1kmの鎌倉市街地の中心部で滑川左岸、宝戒寺背後の葛西ヶ谷に位置している。若宮大路二ノ鳥居の鎌倉警察署脇の路地を東進すると小町大路と交差する。そこから八幡宮方面へ100m程進んだ先を右折して滑川に架かる東勝寺橋を渡った山裾一帯が葛西ヶ谷にあたる。谷戸名の由来は、頼朝の家臣の葛西三郎清重(秩父氏一族豊島清光の嫡子)の館跡にちなんだものという。

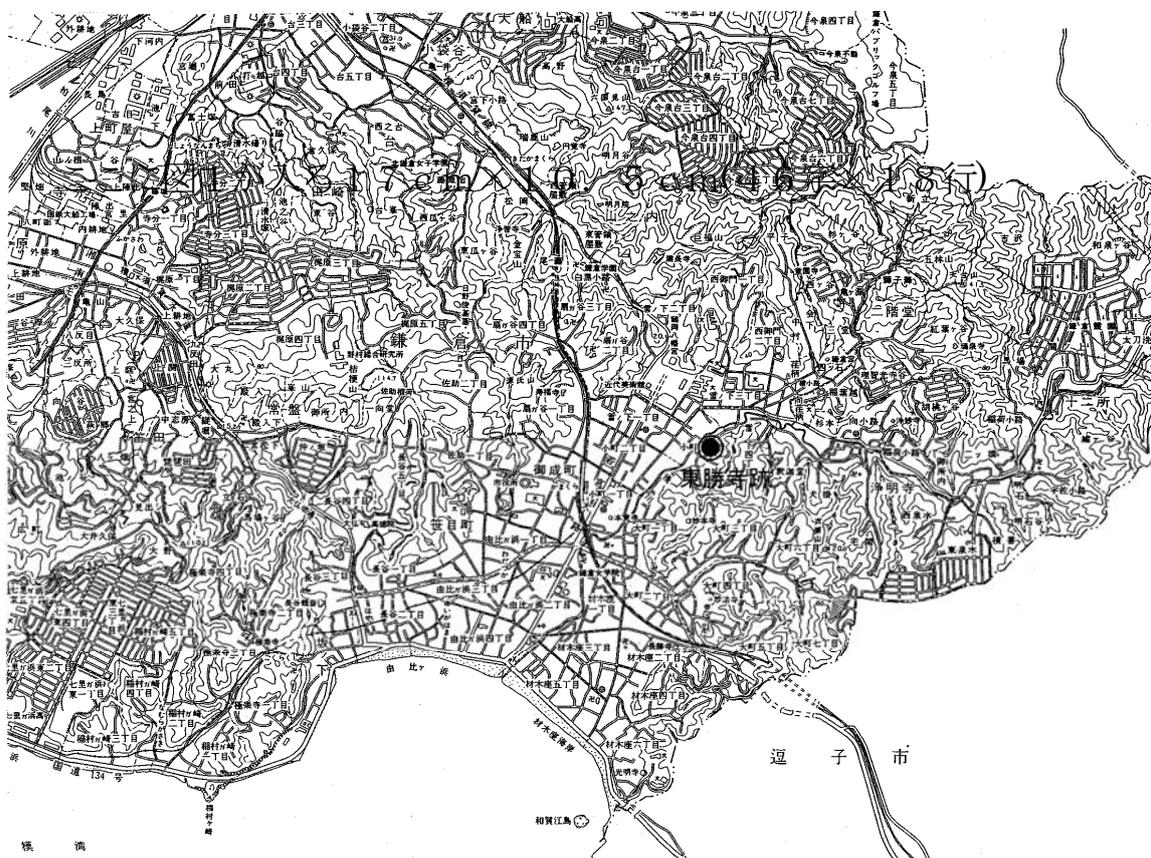


図1 遺跡位置図

谷戸の地形をみると、衣張山から西方へ伸びる尾根の北西端にあたり、樹枝状に展開する尾根は鎌倉の外郭を形成する山稜に連なっており、葛西ヶ谷を取り囲む尾根が海拔高 60m 前後の屏風山で、その傍らに小富士山がある。また馬の背状の狭い稜線が連なり北・西端部は急峻な崖となって滑川に落ち込んでいる。谷戸内の北東域でレデンプトリスチン修道院が建つ裏山稜を挟んだ東側は大御堂ヶ谷と呼ばれ勝長寿院跡と伝えるところである(貫・川副 1980)。勝長寿院は頼朝が父義朝の菩提を弔うために建立された寺院で、源氏の菩提寺の性格が濃く、大倉御所(大倉幕府)に対し正確に南面していたので、「南御堂」あるいは「南大御堂」と俗称されていた。鶴岡八幡宮・永福寺とともに頼朝の御願寺で三大寺院の一つであった。当寺跡の南側には鎌倉草創期の有力御家人比企一族の邸(比企能員)と伝えられ、現在日蓮宗の妙本寺境内となり比企ヶ谷が西向きに開口している。その東方の山王堂ヶ谷からは名越山王堂に比定された基壇礎石建物の堂跡が発見されている(斉木 1990)。滑川対岸の北側には北条高時とその一門の菩提を弔うために邸の跡地に後醍醐天皇が建立したという宝戒寺がある。さらに小町大路の西側域で若宮大路に挟まれた一帯は、嘉禄元年(1225)に大倉御所から移転した四代将軍九条頼経の頃の宇津宮辻子幕府跡、その北側の八幡宮よりには北条小町邸跡(若宮大路御所)と伝えられている。

葛西ヶ谷は西向きに開く扇形の谷戸で、南西・中央・北東の三つの支谷から形成される。南西支谷は宅地開発が進んで住宅が密集した状況であるが、かつては四段程の平場が雛壇状に造成されていたという。中央支谷は最も旧地形が残された緩やかな比高差で上下二段の平場を構成しており、最奥部山裾には鎌倉幕府終焉の地、北条高時の墓と伝える「腹切りやぐら」が開口している。調査地点が存在する北東支谷は中央を南北に走る道路を挟んで東西二つの小谷にわかれ、境界となる尾根先端は修道院の建設

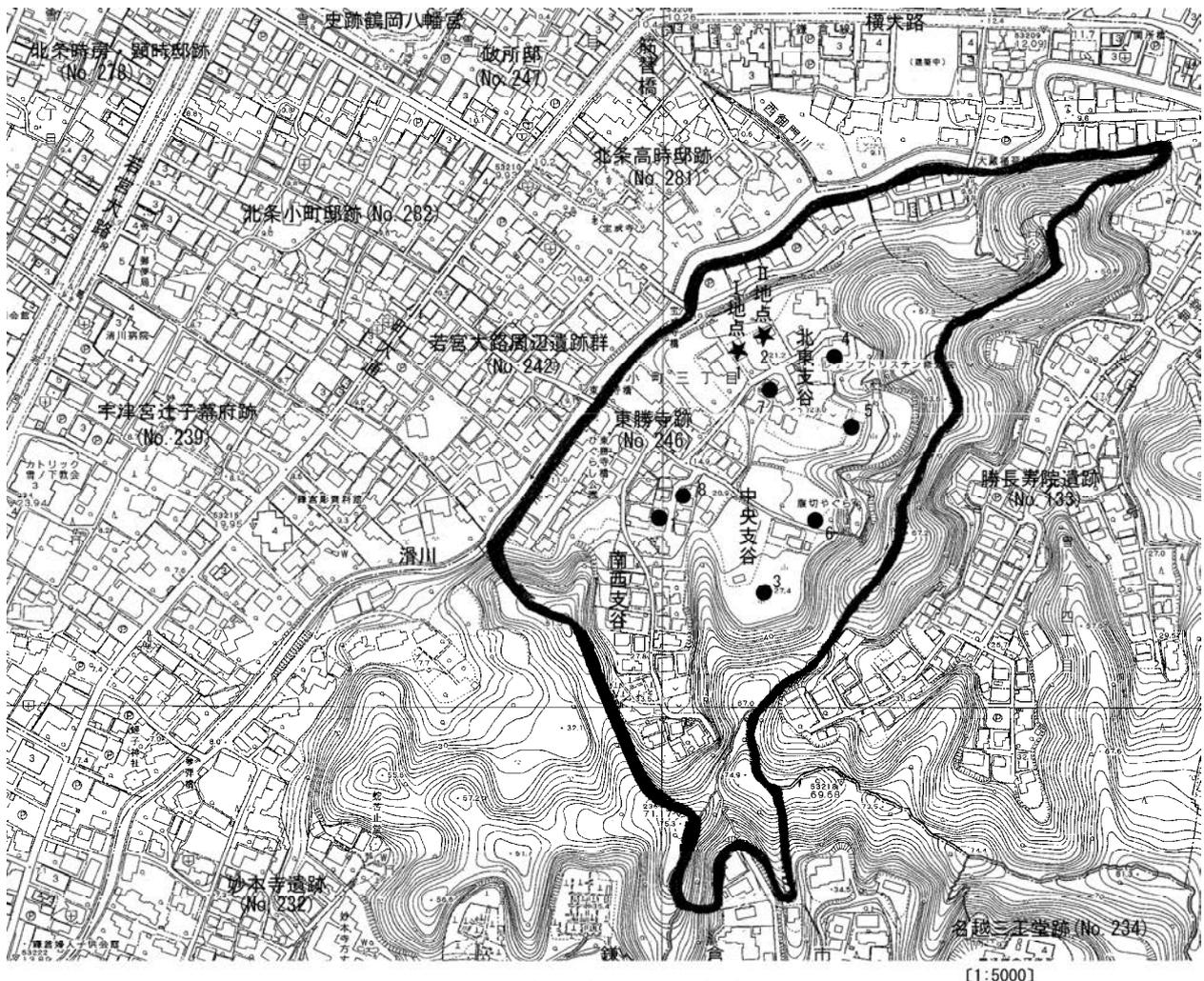


図2 調査地点と周辺遺跡

で掘削されているが、谷内には高低差を有した造成で二～三段の平場が存在する。調査地点は共にこの谷戸内の北東支谷に位置した小町三丁目 538 番 3・8 に所在している。

2. 遺跡の歴史的環境

東勝寺は山号を青竜山と号し、臨済宗の禅密兼修の寺院であった。『本朝高僧伝』によれば、開山は退行行勇（栄西の弟子）、開基は北条泰時である。嘉禎 3 年（1227）に泰時が母の追善供養のために、その墳墓の傍に当寺を建立したといい、行勇は仁治 2 年（1241）東勝寺にて示寂している。鎌倉時代末期に著された「北条貞時十三回忌供養記」（『円覚寺文書』所収）は、元享 3 年（1323）10 月に営まれた貞時の年忌法要を記録したものであるが、法要には北条一門ゆかりの建長寺や円覚寺を始め、禅宗諸寺院 38 ケ寺から二千名を超える多くの僧衆が参加している。東勝寺からは 53 人が参列しており、諸寺の中で十番目に多い人数であることから大規模な寺院であったことが窺える。しかし『太平記』によれば、元弘 3 年（1333）5 月 22 日北条氏滅亡の時、高時以下この地に立て籠もり一族 283 人、殉死者はすべて 870 人余が自害して果てたという。また『梅松論』にも「・・・相模守高時禅門、元弘三年五月二十二日 葛西ヶ谷において自害しける事悲しむべくも余あり 一類も同数百人自害するこそ垂晴れなれ」とほぼ同じ内容のことが記されており、この時に自らが放った火により全山灰燼に帰したであろうことが想像されよう。

その後、間もなく伽藍が再建されて復興したようで暦応 5 年（1342）には関東十刹のうちの第五位に列せられており、至徳 3 年（1386）には第 3 位の寺格となり南北朝時代を通じて寺勢は盛んであったと伝えている。なお、その廃年についての詳細は明らかではないが、いったん文明 18 年（1486）以前に廃絶した後、永正年間に古河公方足利政氏が妙徳を住寺に任命して当寺を再興したようである（川副 1980）。なお廃絶した時期がいつ頃か詳しくは解っていないが、元亀 4 年（1573）以降には廃絶していたようである。それは円覚寺塔頭の仏日庵文書『北条家政氏印判状』（高柳 1967）によれば、東勝寺の寺領が元亀 4 年には建長寺長老の九成僧菊に与えられていたことが知られるので、少なくともこの年以前には廃滅していたと考えられる。

東勝寺跡は、表 1 や図 2 で示したようにこれまで 5 ヶ所の地点で発掘調査が実施されている。特に昭和 50・51 年に行われた中央支谷に位置した地点 3 の第 1・2 次調査では、鎌倉石の石畳参道や石垣、小堂跡の基壇などと共に焦土・炭化物の厚い堆積から大火災を思わす痕跡がみられ、鎌倉幕府終焉地で最後の舞台を憶測させるもので、東勝寺跡の歴史を紐解く先駆的な発掘調査となった（赤星ほか 1977）。この第 1・2 次調査の成果をもとに伽藍遺構の確認調査を目的として平成 8 年に行ったのが地点 4～6 の第 3・4 次調査で北東・中央支谷の調査地点である。調査の結果は、鎌倉時代後期から室町時代にかけての各生活面に伴う掘立柱建物・区画溝・井戸・石組遺構等が発見された。掘立柱建物は外縁に雨落溝を巡らす桁行 7 間以上×梁行 4 間の大規模な総柱式建物、床下一部に塗り籠め施設が確認されことから寝間や納戸の構造で、屋根材に栓皮茸や柿茸を用いた一字と推測される。この建物は火災痕跡や出土遺物の様相から元弘 3 年の鎌倉幕府滅亡の際に火災炎上した方丈のような建物との指摘がなされている。これらの調査成果から中央支谷を中心とした一帯は平成 11 年（1999）7 月 31 日に国史跡指定された。

南西支谷は北向きに開口した谷戸奥から雛壇状に概ね 4 段の平場が造成されており、調査地点は開口部をなす最下段に位置する。平成 11 年度に調査された地点 8（宮田 2000）と、その翌年に調査を実施した地点 9（宮田・滝澤 2002）では 13 世紀後葉～15 世紀頃の遺構・遺物が発見されている。

今回の両調査地点は北東支谷の谷戸奥で宗教法人レデンプトリスチン修道院が移築・改築に伴って付近一帯を宅地造成した一角に位置している。

表1 東勝寺跡調査地点一覧

※Noは図2の調査地点と対応

No	遺跡名	調査地点	調査地点の特徴や文献など
1	北東支谷	小町三丁目 538番8	本調査地点：Ⅰ地点
2	北東支谷	小町三丁目 538番3	本調査地点：Ⅱ地点
3	中央支谷	第1・2次 調査	小堂跡・門跡・石畳道跡・石垣と鎌倉幕府終焉地を伺わず厚い堆積の炭化物層など寺院関連の遺構 13世紀後半～15世紀代 赤星・貫・大三輪・松尾 1977
4	北東支谷	第3・4次 調査	Tr.Ⅰ～Ⅲ 三時期の遺構面、土坑・溝・落ち込み遺構・ピット・岩盤削平面等 14世紀前～中葉 菊川・玉林ほか 1998
5	北東支谷	第3・4次 調査	Tr.Ⅳ～Ⅷ Tr.Ⅳのみ三時期の遺構面、その他は岩盤削平面上で礎石列・土坑・溝・ピット等 14世紀前～中葉と15世紀後半頃 菊川・玉林ほか 1998
6	中央支谷	第3・4次 調査	Tr.Ⅴ・Ⅵ 二時期の遺構面、掘立柱建物・礎石・井戸・集石遺構・石組遺構・土坑・道路と両側溝・石積溝・溝状遺構・岩盤削平面等 14世紀前～中葉と15世紀後葉 菊川・玉林ほか 1998
7	北東支谷	小町三丁目 523番14	二時期の遺構面、礎石建物・石列・土坑・溝・ピット等 13世紀後葉～14世紀中葉頃 汐見・田畑・山上 2000
8	南西支谷	小町三丁目 468番2外	切石列（基壇地覆か）・柱穴列・井戸・溝・方形遺構・かわらけ溜り・木樋・ピット・岩盤削平面等 13世紀後葉～14世紀中葉と15世紀後葉 宮田・滝澤 2000
9	南西支谷	小町三丁目 468番10	六時期の遺構面、礎石建物・柱穴列・土坑等 13世紀後葉～15世紀 宮田 2002

【引用・参考文献】

- 赤星直忠・大三輪竜彦・貫 達人・松尾宣方 1977「東勝寺遺跡発掘調査報告書」東勝寺遺跡発掘調査団編 鎌倉市教育委員会
- 菊川英政・玉林美男・兼行光枝・小林重子 1998「東勝寺跡 — 第3・4次遺構確認調査報告書 — 」鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫・田畑衣里・山上玉恵 2000「東勝寺跡（No.246）小町三丁目523番14」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』17（第2分冊） 鎌倉市教育委員会
- 宮田 眞・滝澤晶子 2000「東勝寺跡発掘調査報告書 鎌倉市小町三丁目468番2外」東勝寺跡発掘調査団
- 宮田 眞 2002「東勝寺跡（No.246）小町三丁目468番10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』18（第1分冊） 鎌倉市教育委員会
- 斉木秀雄 1990「名越・山王堂跡発掘調査報告書 — 電通鎌倉研修所改築に伴う中世寺院跡の発掘調査報告」山王堂跡発掘調査団
- 高柳光壽・川副武胤・貫 達人 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館及び1967『鎌倉市史 史料編 第三第四』史料編三—164号文書 吉川弘文館

- 貫 達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺辞典』 有隣堂
- 大三輪龍彦編 1983『中世鎌倉の発掘』 有隣堂
- 松尾宣方・斉木秀雄 1986「鎌倉の社寺遺跡の態様と事例」『特集 鎌倉の発掘』 仏教芸術 164号 毎日新聞社
- 石井 進・網野善彦編 1989『よみがえる中世』【3】「武士の都 鎌倉」 平凡社
- 白井永二編 1991『鎌倉事典』 東京堂出版
- 河野眞知郎 1995『中世都市鎌倉 遺跡が語る武士の都』 講談社選書メチエ 49
- 五味文彦・馬淵和雄編 2004『中世都市鎌倉の実像と境界』 高志書院
- 永井 晋 2009『北条高時と金沢貞時』 日本史リブレット 35 山川出版
- 秋山哲雄 2010『都市鎌倉の中世史』 吉川弘文館
- 樋口州男・錦 昭江 2010『中世鎌倉年表』 かまくら春秋社

第2章 調査の概要

1. 調査の経過

a. I 地点

本地点は個人専用住宅の建築で、現地地表下 7m に及ぶ鋼管杭の設置埋設による基礎工事を内容とするものであったため、埋蔵文化財への影響が避けられないと判断された。そこで鎌倉市教育委員会により遺構確認の試掘調査が実施された。試掘調査の結果、現地地表下約 80cm までの現代客土（盛土）が確認され、その直下から厚く堆積した中世遺物包含層を挟んで二時期の遺構面が明らかになり、調査面積 42.84 m² を対象として発掘調査を実施する運びとなった。現地調査は平成 16 年 7 月 30 日から表土掘削及び機材搬入により開始され、同年 9 月 3 日までに必要な記録保存を行い無事終了した。その間の調査経過については調査日誌の抜粋を記しておく。

- | | |
|------------|------------------------------------|
| 7月30日(金) 晴 | 現地調査開始、機材搬入及び現地地表下約 80cm まで重機掘削。 |
| 8月2日(月) 晴 | 第1面遺構確認・検出作業、測量用の方眼設定。 |
| 7日(土) 晴 | 第1面全景写真撮影、平面図作成。 |
| 16日(月) 晴 | 第2 a 面(砂利面) 全景写真撮影、礎石列の撮影。平面図作成開始。 |
| 21日(土) 晴 | 第2 b 面全景写真撮影、平面図作成。 |
| 31日(水) 晴 | 第3面全景写真撮影、平面図・調査区壁土層堆積図作成開始。 |
| 9月3日(土) 曇 | 現地調査終了、機材撤収。 |

b. II 地点

I 地点北側に隣接した位置であり、基礎工事に際して地盤の柱状改良工事を実施した個人専用住宅の建設に伴った発掘調査である。調査期間は平成16年8月26日～同年10月25日までの間、調査面積は64.50 m² を対象に現地調査を実施した。残土置き場を確保するため、調査区を東西二区に分割して西側に「I 区」、東側に「II 区」の名称を与えた。表土掘削にあたっては、I 地点の調査結果をもとに地表下80cm まで重機で掘削し、以下を人力によった。II 区最下層については崩落の危険性をもつ掘削深度に達しており、残土置き場の確保が困難であることなどから調査を断念した。以下、主な作業内容については調査日誌の抜粋を記しておく。

- | | |
|------------|-----------------------------------|
| 8月25日(水) 晴 | 調査開始。機材搬入及び I 区現地地表下約80cm まで重機掘削。 |
| 27日(金) 曇 | 第1面遺構確認・検出作業、測量用の方眼設定。 |
| 9月6日(火) 曇 | 第1面全景写真撮影、平面図作成。 |
| 7日(水) 雨 | 台風18号の影響で午後から豪雨。 |
| 14日(月) 晴 | 第2面全景写真撮影、平面図作成。 |
| 16日(木) 晴 | かわらけ敷き写真撮影。 |
| 25日(土) 曇 | 第2面下全景写真撮影、平面図と調査区北・東壁土層堆積図作成。 |
| 29日(水) 晴 | I 区埋め戻しと II 区表土掘削で調査開始。 |
| 10月7日(木) 晴 | 第1面全景写真撮影、平面図作成。 |
| 18日(月) 曇 | 第2面かわらけ溜り写真撮影。 |

22日(金) 晴 第2面全景写真撮影、平面図作成。

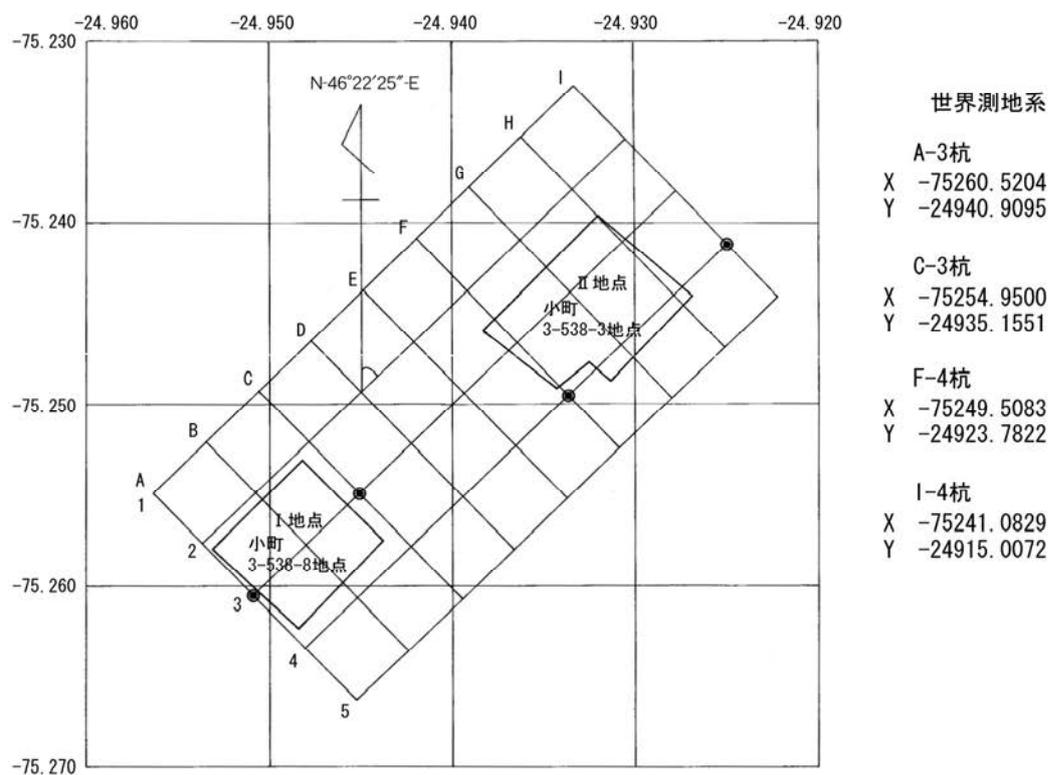
25日(月) 晴 現地調査終了、機材撤収。

2. 測量軸の設定

現地調査時の側量方眼は両地点ともに便宜上、側量の利便性を優先させる形で街区に合わせた任意の方眼を使用したため、国土座標とは一致していない。図3で示したようにI・II地点の調査区を4mグリットに区画し、南北方向に西からA・B・C…のアルファベットを、東西方向に北から1・2・3…の算用数字を付した。各方眼の名称は北西角の交差軸点をグリット名にしており、南北軸線は真北よりN-46° 22' 25" -Eを測る。

座標値に関しては日本測地系 (AREA 9) を用いたが整理作業の段階で国土地理院が公開する座標変換ソフト『web版TKY2 JGD』により世界測地系第IX系の座標数値へ変換したものを図3に記した。両調査地点の座標値はX-75.230~75.270、Y-24.920~24.960の区域内に位置している。

海拔高の原点基準については宝戒寺門前に設置されている鎌倉市都市3級基準点 (No.53210 : L=9.951m) を基にしてI地点A-3杭上 (L=21.740m) と、II地点F-4杭上 (L=22.680m) へそれぞれ仮水準点を移設した。



(S=1/200)

図3 国土座標位置・グリット配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

1. I 地点の遺構と遺物

a. 層徐と生活面

図4は調査区東壁及び調査区南壁の観察から土層堆積を表したものであり、地層は概ね均等に堆積している。現地表の海拔標高は 21.85m前後である。両調査地点とその周辺の現況は本寺跡の第3・4次調査後に宅地造成の削平が実施されたこともあり、旧地形が失われた状況になっていた。

地表下 30~50cm はバラス等を含む1層の現代客土層が覆い、以下に近世以降の耕作土と考えられる厚さ 20~40cm 程の茶褐色土 (2層) が堆積しており、調査ではこれらの表層を含めた堆積層を重機により削除することから開始された。その下は茶褐色弱粘質土の3層で遺構確認の試掘調査の際には、この層上面を中世遺構面 (第1面) としていたの、人力で遺構確認の精査を実施したものの顕著な遺構や、それに伴う遺物など発見が疎らであった。この為、中世前期の遺物包含層の可能性が高いと判断して除去すると、海拔高 20.95m前後でほぼ水平に堆積して小土丹・かわらけ片などを全体に多く内包した締りの強い茶褐色粘質土が表出した。この上面を調査開始面 (第1面) とした。厚さ 10cm 前後の第1面構築土を削除すると、第5層の締りの弱い茶褐色弱粘質土を挟んで第8・9・11層で嵩上げされた地行硬化面と、調査区南半部を中心とした範囲でほぼ平らに堆積する砂利層から構成されるのが第2面である。

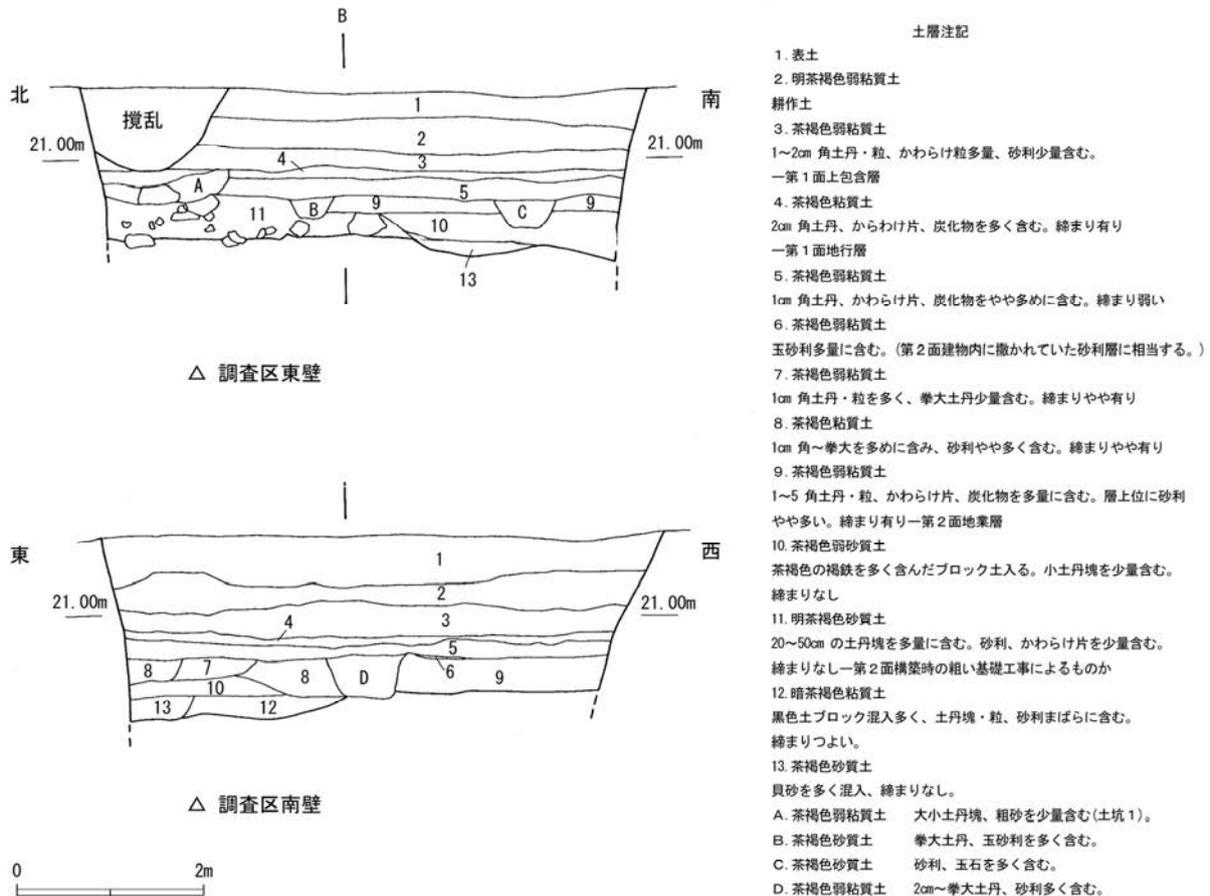


図4 調査区東壁・南壁堆積土層

第8・9層は全体に小土丹角や砂利を混交して締りある平坦な整地土と、第11層は頭・拳大土丹塊を多く混入した凹凸の隙間のある粗い整地層によっている。第2面上には礎石列から南側の範囲に砂利敷きが認められたが、これは建物内床下の湿気防止に係わるような作事を施した可能性が考えられる。この上面を第2 a面、砂利層を除去した生活面を第2 b面として捉え、それぞれ遺構検出を行った。砂利層面上の海拔高20.55m前後である。層厚30～40cmの第2面構築土を除去すると大小土丹塊による造成構築面を確認した第3面としたが、この面は表面の凹凸があり、地行の状況も大型土丹塊を中心とした空隙も認められるような粗なものであった。なお、海拔高は20.10m前後である。この面上では調査区中央に大小土丹塊を多量に伴う土坑状の遺構以外は検出できなかった。

b. 第1面の遺構・遺物

検出した遺構・遺物について、確認された生活面の調査順に従い上層の第1面から述べる事にしたい。前章「層序と生活面」の項でも触れたように、調査開始面にあたる第1面は現地表下110cm(海拔高20.85m)前後で茶褐色粘質土の硬化した遺構面である。小土丹を混ぜて平坦に整地した地行面で、Bラインより北側では小土丹を叩き潰してより堅密、調査区南壁寄りでは地行がやや雑で粗くなり、上面レベルも低いものになる。主な遺構・遺物は次の通りである。

建物1 (図6)： 調査区中央において検出した掘立柱建物跡で四方が調査区へ広がっている可能性があり、全体規模は不明である。現状では総柱建物でその規模が南北2間=4.0m、東西1間=2.05mが確認した。柱間寸法は南北柱穴列の芯々距離が各間200cm(6尺6寸)、東西列が205cm(6尺8寸)程の

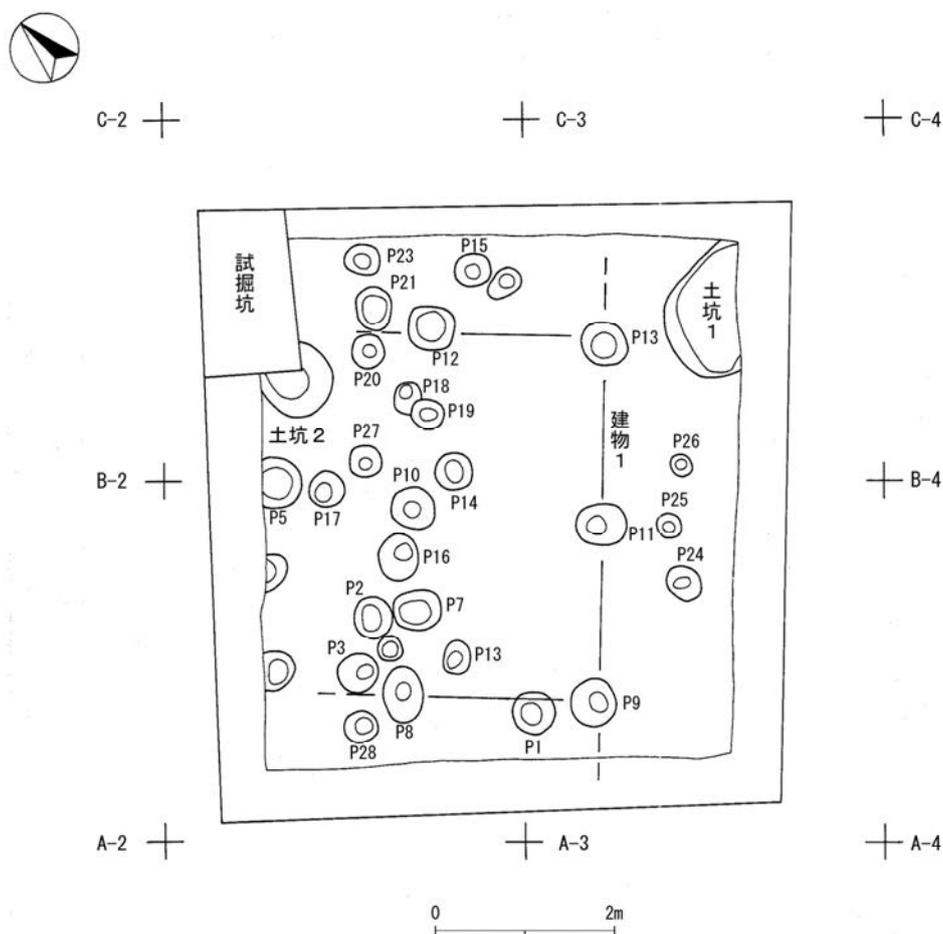


図5 第1面全測図

距離を測る。柱穴掘り方は円形または楕円形の形状を呈し、大きさは径約 40~50cm、掘り込み深さは 40~50cm 程である。P10・13 の底面には礎版と思しき腐食した板状の痕跡が確認されている。掘り方は土丹角と炭化物を多く含む茶褐色粘質土の覆土で構成されており、覆土上部からは柱抑えの栗石を思わす拳大の土丹塊や鎌倉石塊がみられた。建物の南北柱穴列の軸方位は、N-46° 50' -E である。

この建物に伴う図示可能な遺物の出土はない。

土坑 1 (図 7・8)： 調査区北東隅で検出した土坑で東側は調査区外に拡がり、全容は不明である。

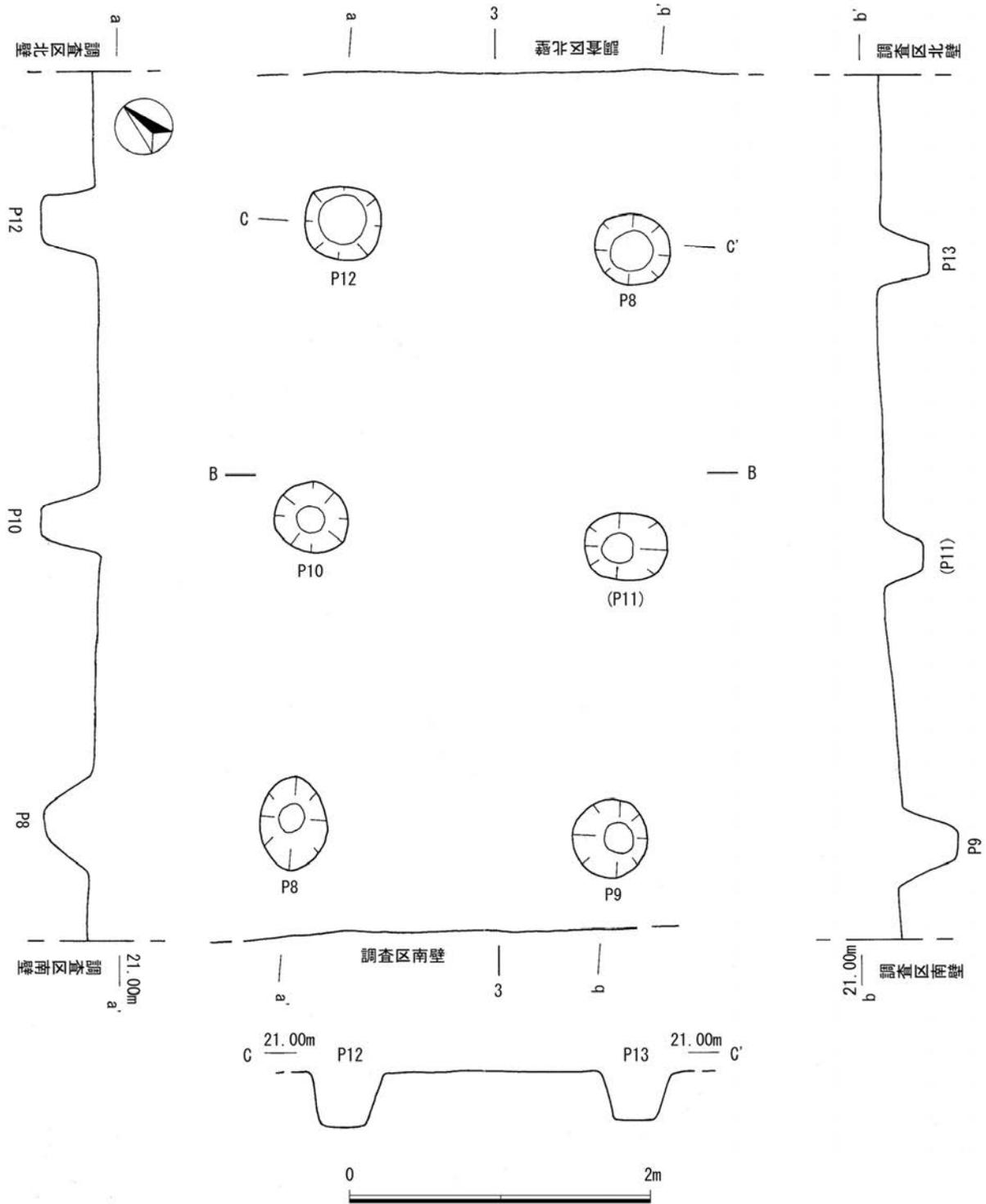


図6 建物1

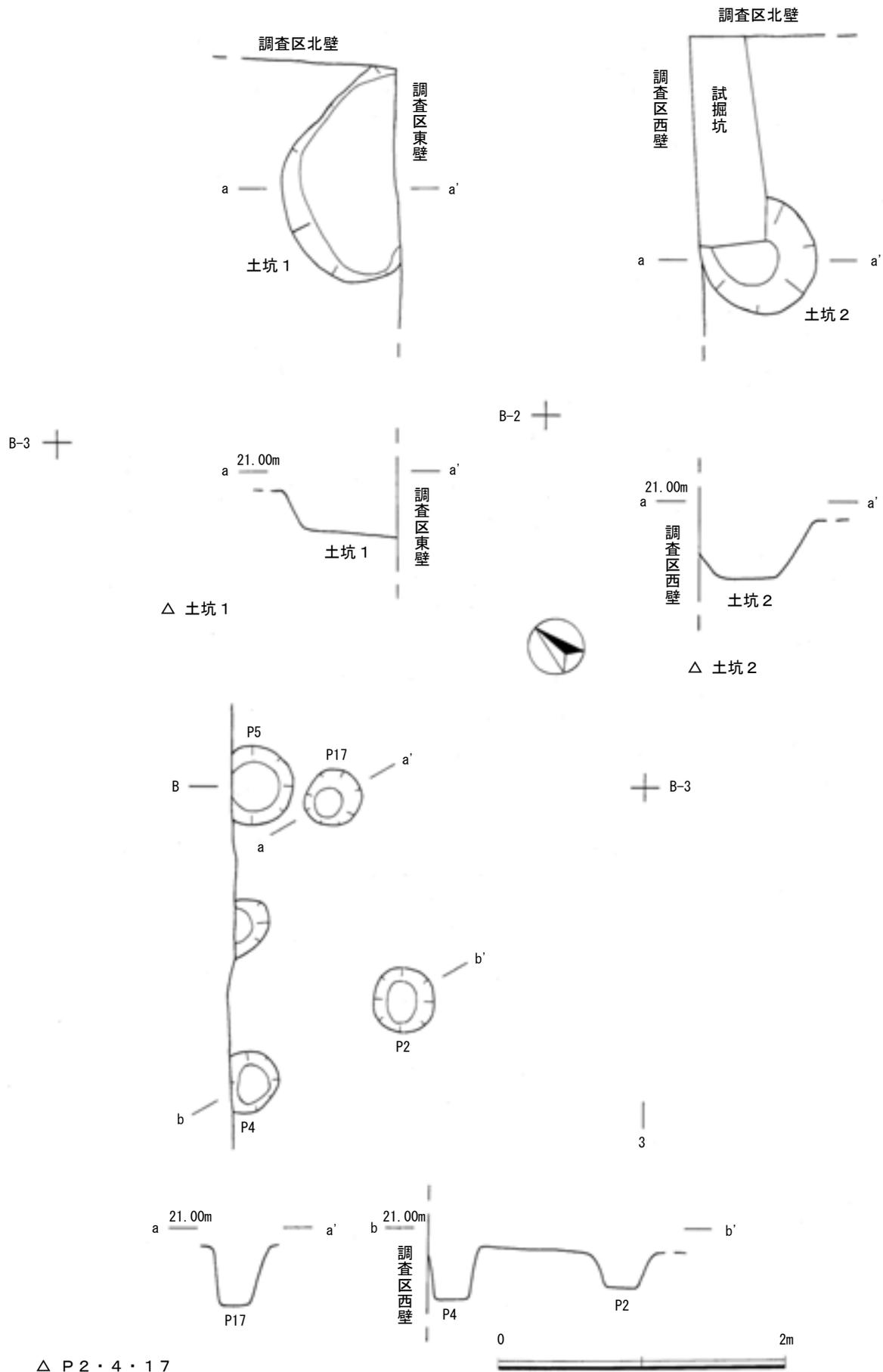


図7 土坑・ピット

東西位の不整形土坑と思われ、確認規模は東西径 153cm、南北径 115cm 以上、確認面からの深さ 35cm である。掘り方断面は浅めの逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で、海拔高 20.55m を測る。覆土は 2 層に分かれ、上層は小土丹角・炭化物粒を交じえた茶褐色弱砂質土、下層は土丹塊・粗砂粒を少量含む茶褐色の締りのない土である。遺物は図 8-1 が青白磁小皿で内底面に櫛描文ある。2 が瀬戸窯小皿で灰釉を口縁部のみ施釉。3 は須恵器甕の胴部片で外面格子目、内面同心円文叩きを施す。

土坑 2 (図 7・8)： 調査区北西で試掘坑に掛る形で検出され、西壁調査区外へ延びている。平面形状は楕円形と思われ、確認できた南北残存径が 80cm、東西径 75cm、深さ 43cm の規模をもち、断面が逆台形状の掘り方で、覆土は小土丹・鎌倉石を破碎した粗砂を多めに交えた締りのない茶褐色砂質土である。底面海拔高 20.45m を測る。出土遺物は図 8-4 の常滑窯壺の口縁部片で中野編年 7 形式の資料と考えられる。

ピット (図 7・8)： 掘立柱建物に伴う柱穴以外に第 1 面からは 33 穴のピット及びピット状の掘り込みを検出した。このうち出土遺物を伴うものを中心に述べる。

P 2： 平面隅丸方形を呈し、一辺 45cm、深さ 25cm と浅い掘り方をもち、覆土は小土丹・かわらけ小片を多く含む茶褐色弱粘質土である。遺物は図 8-5 の瀬戸窯折縁皿の口縁片が出土した。

P 4： 掘り方の一部が調査区壁にかかるピットである。平面形状は楕円形と思われ、大きさは残存径 45cm、確認面からの深さ 40cm 程であり、底面に礎板が腐食した縦・横方向の木目の痕跡が認められた。覆土は小土丹塊・かわらけ小片を多めに交えた茶褐色砂質土で遺物は図 8-6 の常滑窯甕の叩き目をもつ破片が出土した。

P 5： 調査区壁にかかるピットで長径 56cm、深さ 46cm を測り、楕円形の掘り方と思われる。覆土は粗砂・かわらけ小片を多く交えた茶褐色砂質土で中から図示可能な遺物は出土していない。

P 17： 径約 40cm、確認面からの深さ 45cm で平面円形の掘り方をもつピットである。覆土は締りのない茶褐色弱粘質土、遺物は図 8-7 のロクロ成形かわらけの大皿 1 点が出土した。

第 1 面遺構外出土遺物 (図 8)： 9 は口径 5.0cm でロクロ成形の極小かわらけである。10・12 は竜泉窯系青磁の無文碗と酒会壺の蓋小片とおもわれるもの、11 は白磁口兀皿の口縁部小片である。13~15 は瀬戸窯所産の天目茶碗・灰釉瓶子・灰釉仏華瓶の小破片であり、このうち瓶子は図 8-7 の資料と同一個体の可能性がある。16 は瓦器質の蓋物、17 は鉄釘である。

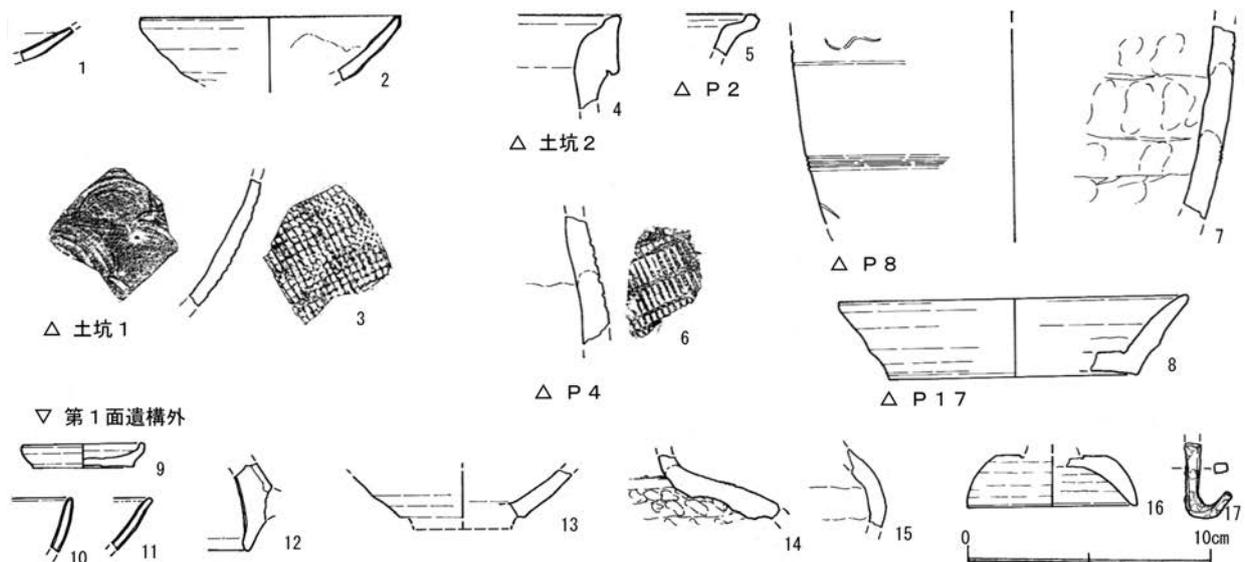


図 8 第 1 面出土遺物

c. 第2面の遺構・遺物

第2面は海拔高 20.55m前後で主に玉砂利敷きの面上を第2 a面、それを除去した生活面を第2 b面としてそれぞれ遺構検出を行った。

第2 a面

土坑1 (図10)：調査区北西、玉砂利敷きの外で検出した。平面形は楕円形、断面は逆台形を呈した底面が平坦な掘り方をもち、長径98cm、短径63cm、深さ27cmの大きさである。覆土は締りのない炭化物を多く含む暗茶褐色土で埋め戻されており、良好な出土遺物はない。底面海拔高は20.35mを測る。

ピット・その他 (図9・10)：ピット4穴と、玉砂利敷きから顔の覗かせていた礎石について簡単に述べる。

P1：径45cm程の円形を呈し、確認面からの深さ20cmの浅い掘り方のピットである。覆土は小土丹・炭化物粒を多く交えた茶褐色土で、底面の近くからはかわらけ小皿1点が出土した(図11-2)。

P2：調査区西壁の3ライン上で検出され、調査区外に広がる。確認できた大きさは東西径70cm、深さ38cmを測る。覆土は締りがなく玉砂利を多めに含む暗茶褐色土で、図化できる出土遺物はない。

P3：P1東隣に位置する。楕円形の平面形状で長径55cm、短径45cm、深さ35cmを測り、締りのない茶褐色砂質土が覆土である。出土遺物はない。

P4：P2東隣で検出した。確認されたむ規模は東西径48cm、深さ30cm、良好な出土遺物はない。

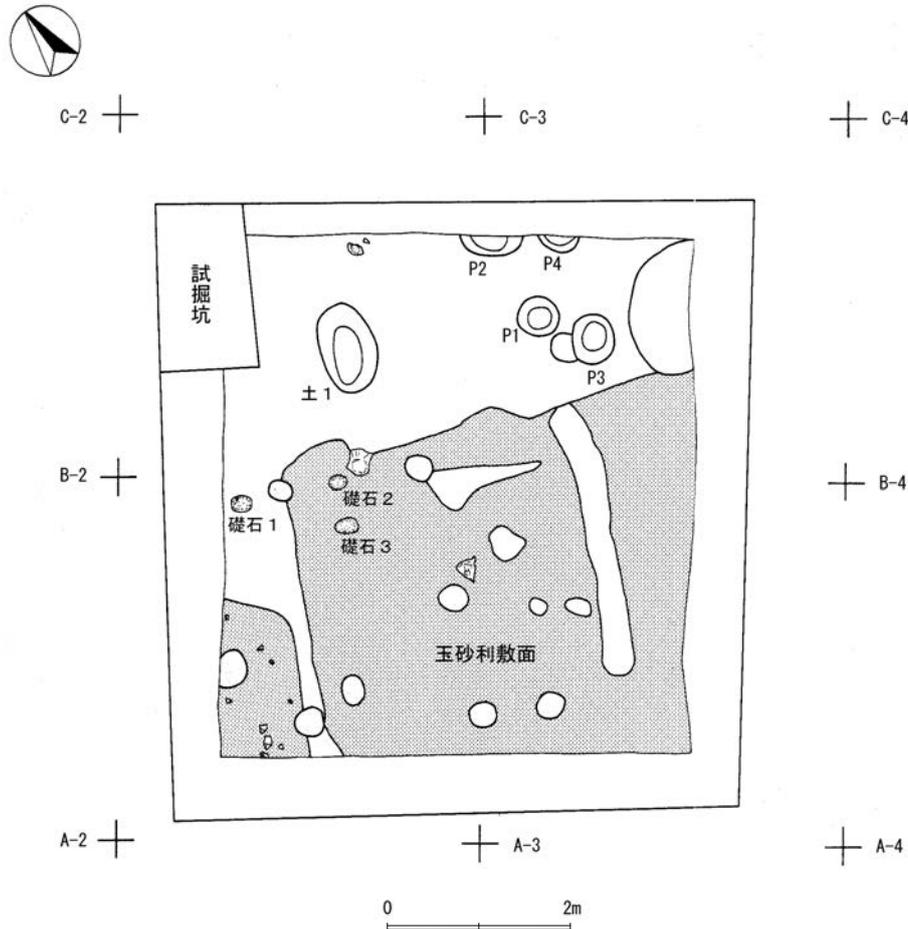


図9 第2 a面全測図

礎石列 (図9) : 玉砂利敷面の北西部で礎石3個がL字型に配列されていた。

礎石列は礎石1～礎石2東西位の芯々距離が110cm、礎石2～礎石3が52cm間隔で南北方向に配置されている。礎石に使用されていた石は楕円形を呈した厚さ15～25cm程の扁平な安山岩製の河原石である。各礎石の規模は1が長径23cm・短径18cmで、2は長径22cm・短径18cmで、礎石3は長径26cm・短径18cmで小形のものである。

第2 a 面遺構外出土遺物

図11-1・3～23の出土遺物で1は水摩した自然石に小穿孔をもつ。3～5は

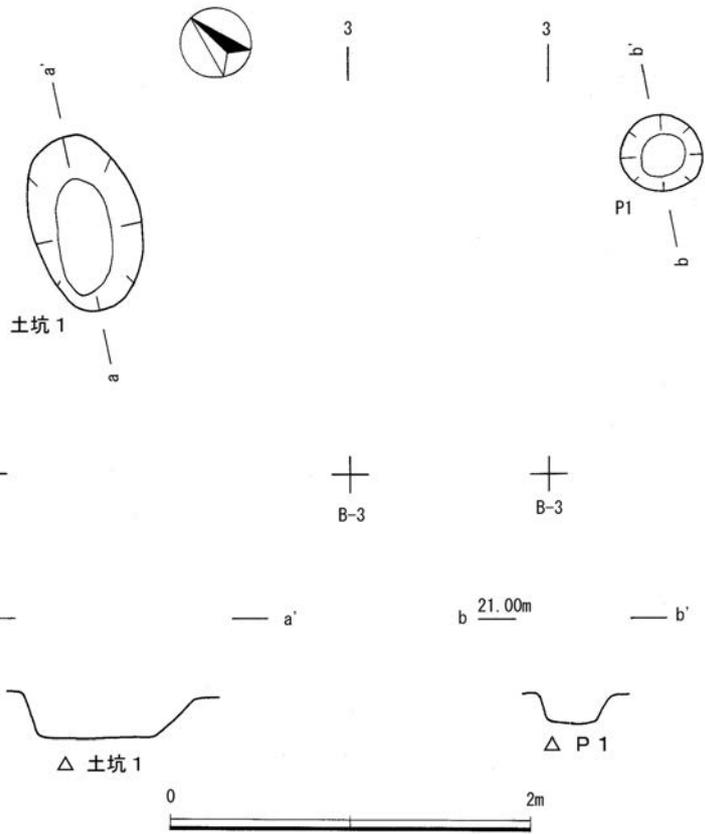


図10 第2 a 面土坑・ピット

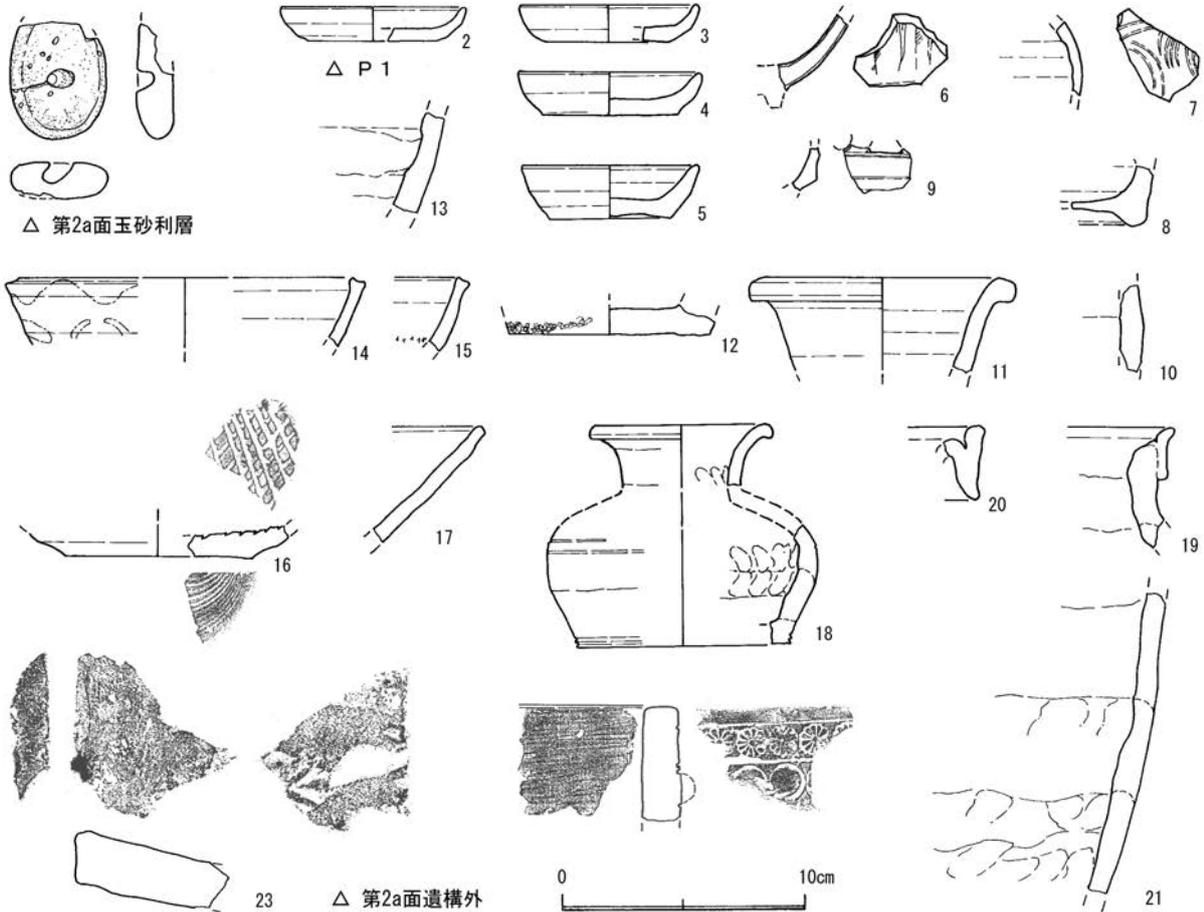


図11 第2 a 面出土遺物

ロクロ成形のかわらけ小皿である。6は竜泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗、7・8は青白磁梅瓶の胴部と底部片、9は透かし風に仕上げた香炉、10は褐釉壺の胴部片である。11～17は瀬戸窯製品で11が四耳壺、12・13が灰釉瓶子、14～16が卸皿、17が直縁大皿と思われる。常滑窯所産には18の玉縁状口縁の鳶口壺、19～21の甕がある。22は外面に菊花文スタンプと貼付け連珠文を施す瓦質火鉢、23は平瓦で凸面に花菱文叩き目をもつ13世紀後半のものである。

第2 b 面

礎石列 (図12・13) : 第2 a 面で検出した礎石3個 (Pア・イ・オ) と、玉砂利敷きを剥がして確認された礎石 (Pカ) と、礎石が抜き取られたと思われる掘り方 (Pウ・エ・キ) である。またP5・7・13も柱通りに位置する浅い掘り方を持っており、礎石が抜き取られた掘り方と考えられる。柱間寸法をみると、東西列はPア～Pイの距離105cm (3.5尺)、Pオ～Pカの距離210cm (7尺)、Pカ～Pキの距離180cm (6尺) であり、南北列はPイ～Pオの距離52cm (1.7尺)、Pオ～P13及びPカ～P5の距離210cm (7尺) を測り、西側に半間分で縁または庇が取り付け付く礎石建物の可能性が考えられる。

なお、東西列の掘り方を構成するPキの確認は調査区東壁にサブトレンチを入れて検出した。各掘り方からの良好な遺物の出土はない。

土坑5 (図14・15) : 調査区南側中央で検出された。平面形状は不整形を呈し、大きさは南北径100cm、東西径90cm、底面は北から南へ傾斜した掘り方で深さ20～60cm程になる。覆土は上層が玉砂利を多量

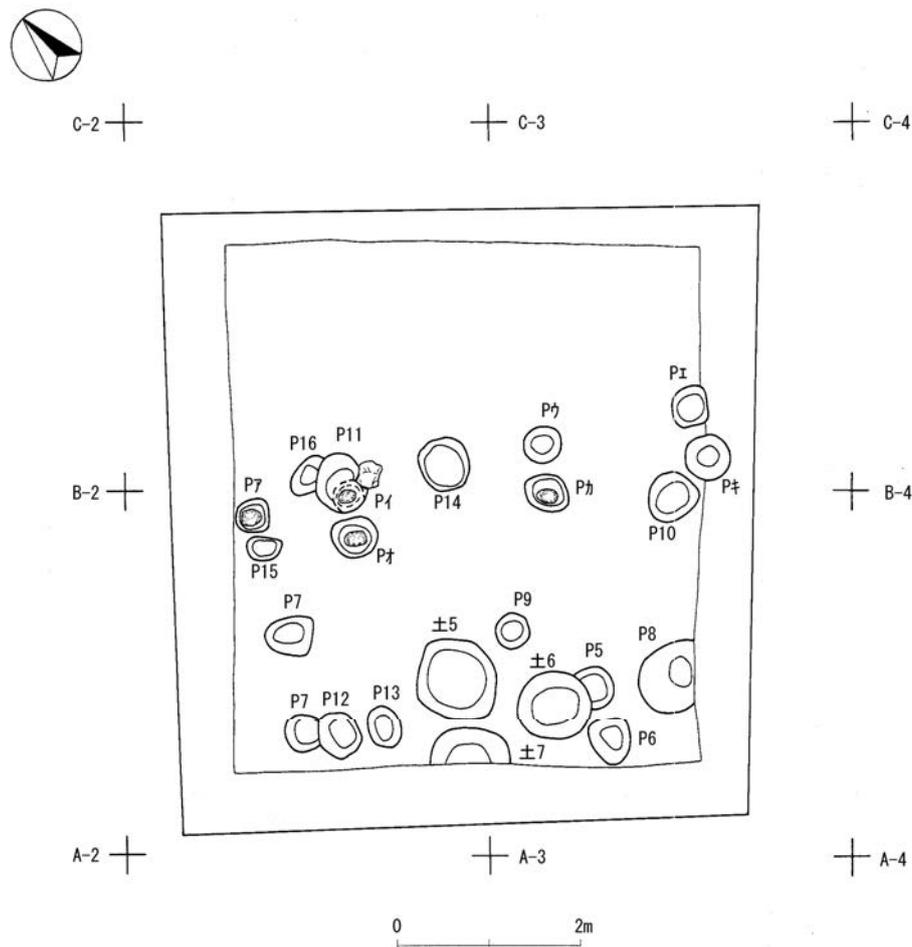


図12 第2 b 面全測図

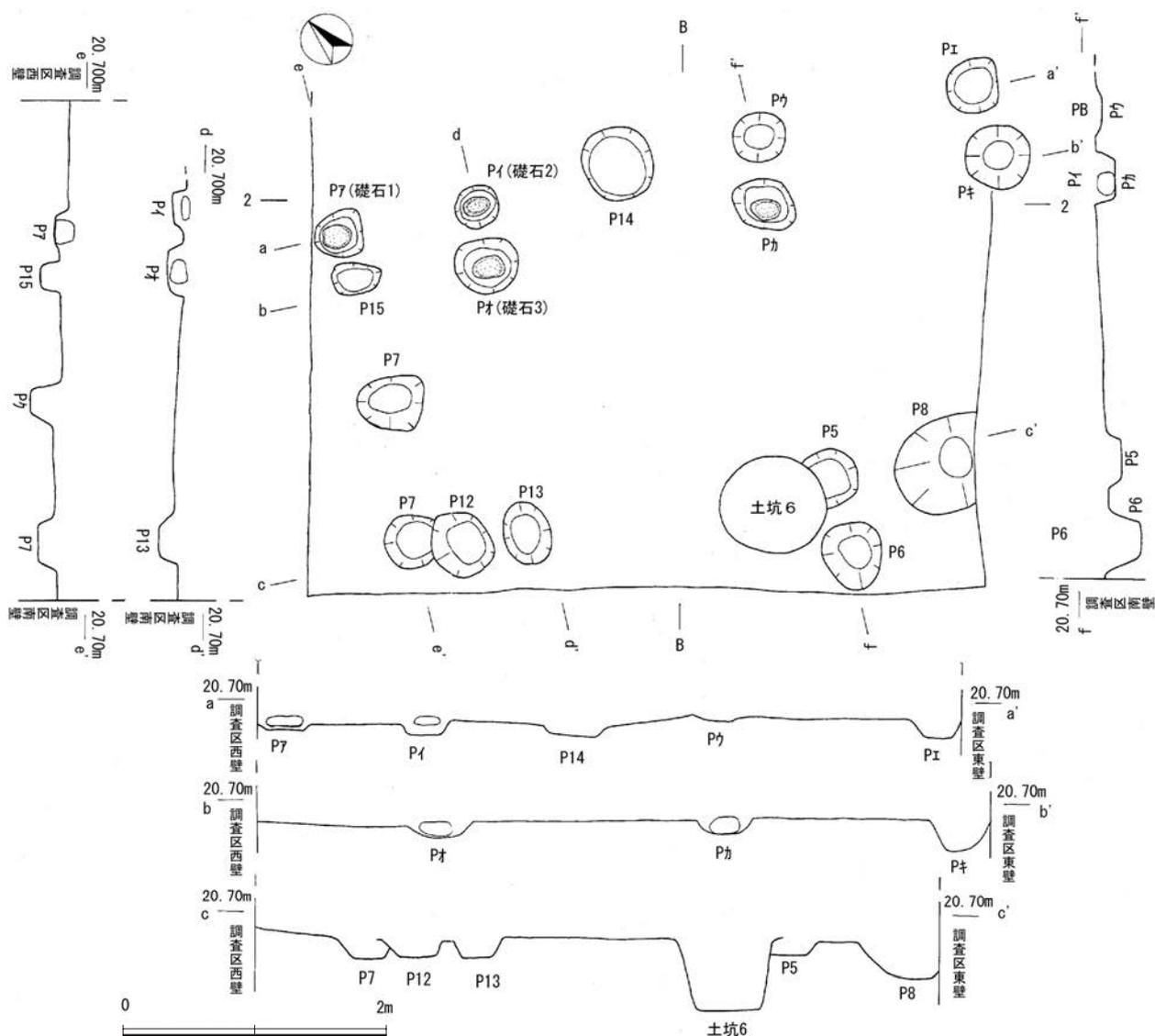


図13 第2 b面礎石列

に含み、下層が小土丹塊を多めに交えた締りのない茶褐色査質土である。底面海拔高は19.95mを測る。出土遺物は図15-5の常滑窯甕の胴部片だけである。

土坑6 (図14・15) : 土坑5東隣の位置でピットのP5を壊して掘り込んだ土坑である。平面形状はほぼ円形を呈し、径80cm前後、深さ58cmの規模をもち、断面が逆台形状の平坦な底面の掘り方である。覆土は上下二層からなり、上層(2層)が玉砂利を多く交えた茶褐色砂質土、下層(3層)が小土丹塊をやや多めに含む締りのない茶褐色弱粘質土である。底面海拔高19.95mを測る。出土遺物は図15-6~8がロクロ成形のかわらけ小皿で、9が白磁皿で口禿印花文皿の底部小片と思われる。

土坑7 (図12) : 調査区南壁に架かる位置で検出され、調査区外へ広がる。確認された大きさは東西径90cm、南北径40cm以上、底面はやや中窪みの掘り方で深さ45cm程である。覆土は玉砂利・小土丹角を多めに交えた締りのない茶褐色砂質土である。出土遺物はかわらけ小片だけである。

ピット (図12・14・15) : この面では礎石列掘り方以外に12穴のピットが確認されている。

P6 : 不整形円形を呈し、南北径52cm、東西径45cm、深さ50cmを測り、締りのない茶褐色土が覆土

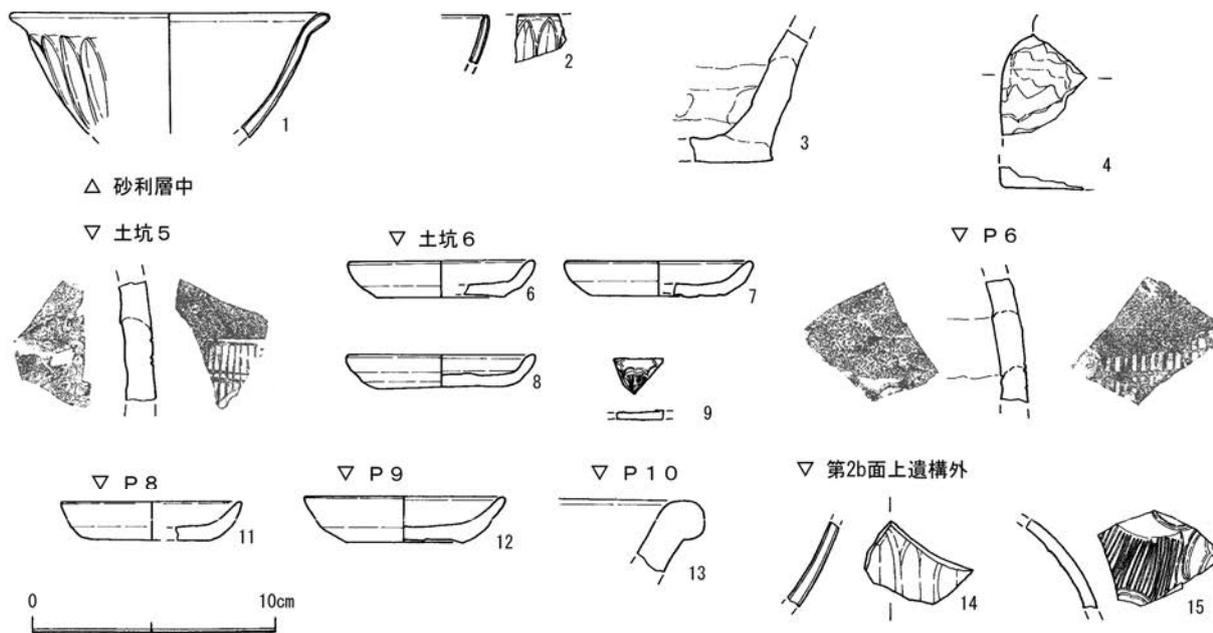


図15 第2b面出土遺物

第2b面上玉砂利層中出土遺物 (図15) : 1・2は竜泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗である。ともに外面に短弁蓮華文を片切彫りし、口縁部は1が外反、2が直行する。3は常滑窯甕の底部片で外邸砂目底になる。4は石硯で周縁整形の様子から四葉硯になる可能性がある。

第2b面遺構外出土遺物 (図15) : 14は竜泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗で外面に複弁文を施文する。15は景德鎮窯系青白磁の梅瓶で外面に牡丹唐草文である。

d. 第3面の遺構・遺物

第3面は海拔高20.0m前後で人頭大～拳大土丹塊を多量に交えた粗い凹凸をもった地行面である。この面では良好な遺構は検出されず、土丹塊の詰まった土坑状遺構1基だけを確認した。また土坑を完掘したところ土坑東側へ落ち込んだ様子がみられたので一部トレンチで確認を行っている。

土坑状遺構 (図17・18) : 調査区ほぼ中央に位置した集石を伴うもので、第3面確認中の掘り下げで検出した大型土坑である。平面形状は長円形の小半型を呈し、大きさは長径3.45m、短径2.1mの範囲、確認面からの深さ50cm程であり、海拔高をみると集石頂部は20.15m、底面は19.65mを測る。集石部は70cm近い大型の土丹塊から拳大の小土丹までの様々な大きさに構成されており、中央部がマウンド状に盛り上がるように密に据えられた状態であった。集石間の堆積土は、上層(1層)が暗黄褐色土で土丹粒多く、かわらけ片・炭化物少ないもの。下層(2層)は黄褐色粘質土で土丹粒が多めの暗黄褐色粘質土ブロックが混ざる覆土である。図17の遺構完掘状況で示したように底面からは浅い貧弱なピット4穴が確認されており、また常滑窯甕片が底面に貼り付くような状態で出土している。

出土遺物は図18-1の常滑窯甕の口縁～頸部片である。中野編年6b型式(赤羽・中野1994)で13世紀後葉頃の所産と思われる。この集石した土坑状遺構の用途については不明である。

第3面12層中出土遺物 (図4・18) : 第3面は調査区西端から東端へ向かって緩やかに傾斜していく地形が確認された。東端付近ではこの傾斜した地行面上に黒色土ブロックを多く混入した締りある暗茶褐色粘質土の薄い堆積があり、中から2・3のロクロ成形のかわらけ小皿と、4・5の竜泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗・折腰皿が出土した。

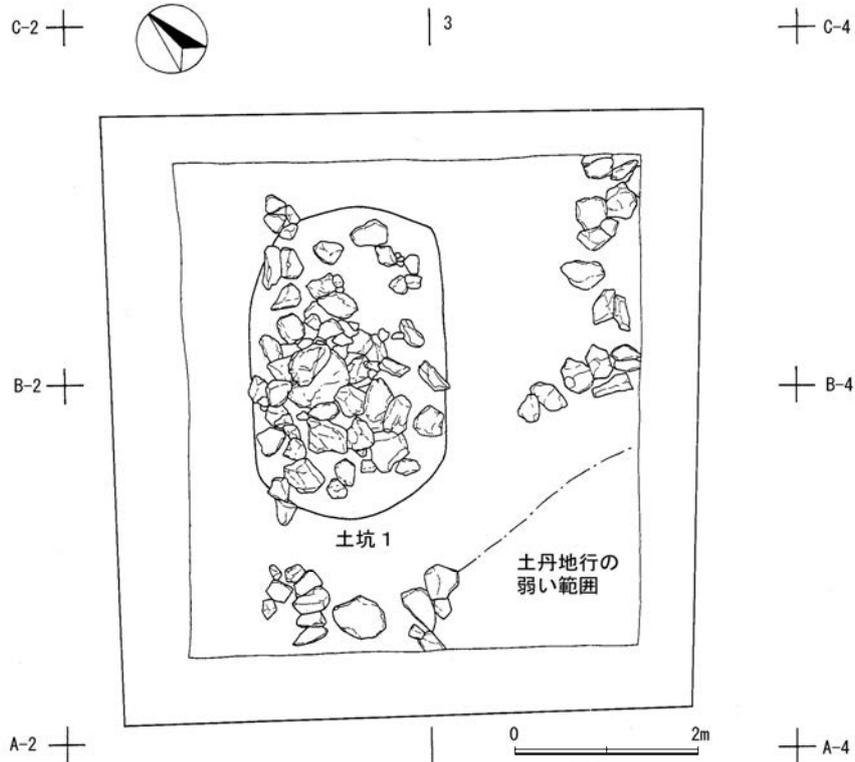


図16 第3面全測図

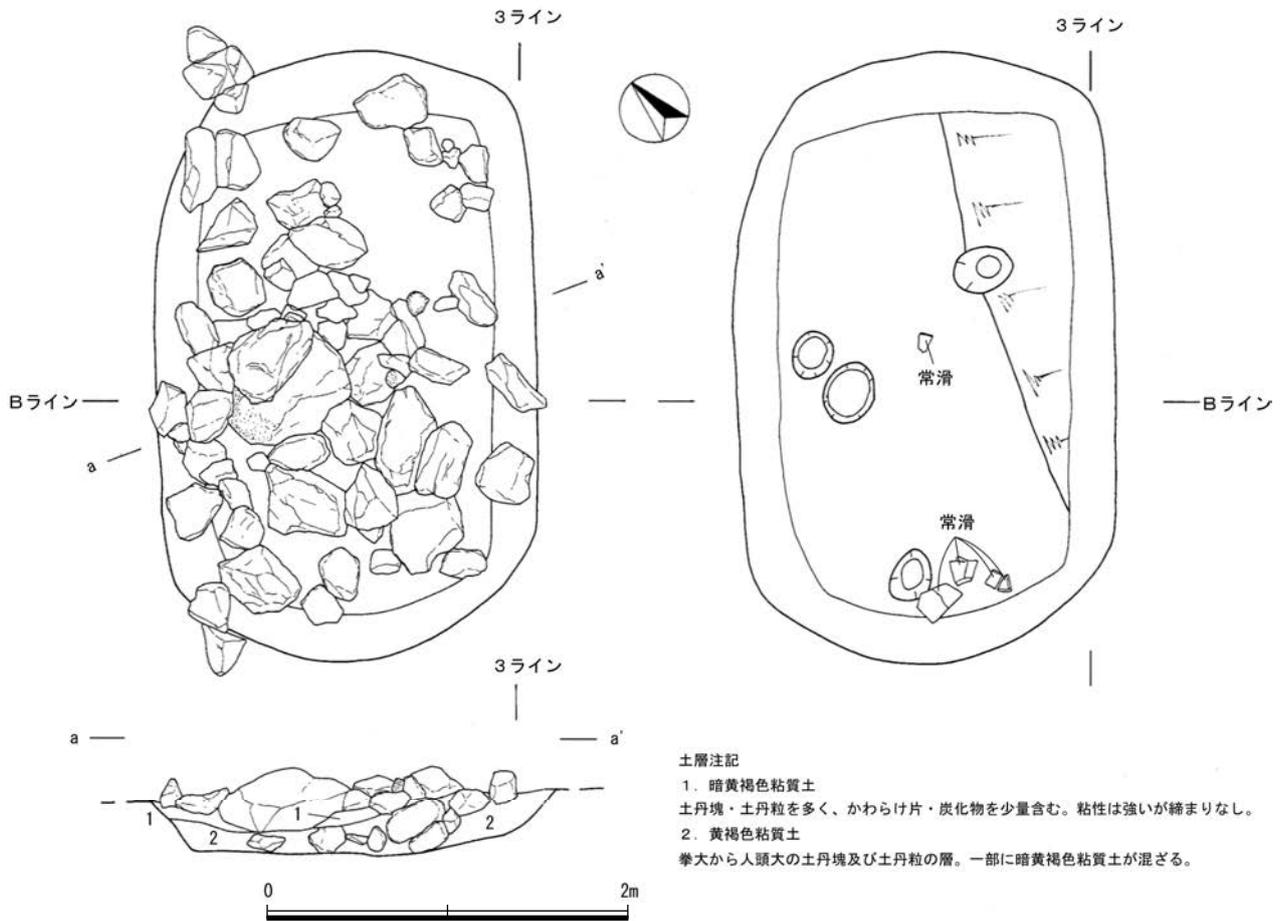


図17 第3面土坑1

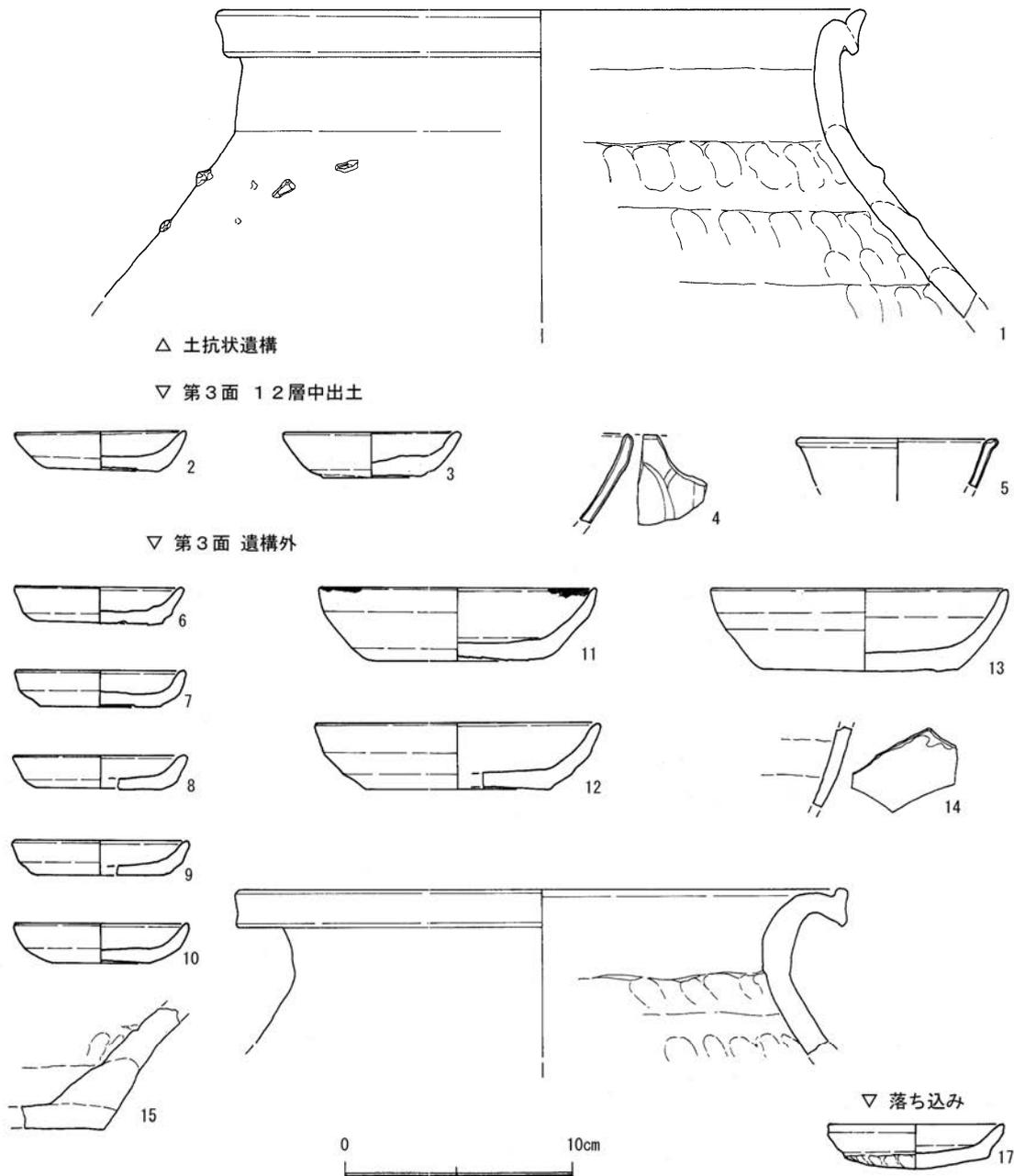


図18 第3面、落ち込み出土遺物

第3面遺構外出土遺物 (図18) : 6~13はロクロ成形のかわらけ大小皿。14は褐釉壺の胴部小片、15・16は常滑窯の甕である。16の口縁形態から常滑窯の中野編年6a型式に相当するものと思われる。

第3面下落ち込み出土遺物 (図18) : 17は土坑状遺構底面の北東側で確認された落ち込み遺構から出土したもので、今回の調査で出土した唯一の手づくね成形かわらけである。

中野晴久 1994 「赤羽一郎・中野晴久『生産地における編年について』『中世常滑焼をおって』シンポジウム資料 日本福祉大学知多半島総合研究所

藤沢良祐 1995 「京・鎌倉における古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

宗臺富貴子 1996 「鎌倉・今小路(御成り小学校内)の瀬戸用製品について」『(財) 瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第4輯

山本信夫 2000 「大宰府条坊跡XV-陶磁器分類表-」『大宰府の文化財』第49集 大宰府教育委員会

2. II地点の遺構と遺物

a. 層徐と生活面

調査区中央のI・II区分割の境及びII区西壁の観察から土層堆積を表したものを図1に示したものであり、地層は概ね均等に堆積している。現地表の海拔標高は21.85m前後でI地点でも述べたが、周辺の現況は本寺跡の第3・4次調査後に削平整地の宅地造成が実施されたこともあり、旧地形が失われた状況になっていた。

地表下40~110cmはバラス等を含む1層の近・現代の客土層が覆い、調査区西壁一部では近世以降の耕作土と考えられる厚さ20~60cm程の茶灰色土(2層)が堆積しており、調査ではこれらの表層を含めた堆積層を重機により削除することから開始された。その下は暗茶灰色弱粘質土の3層で試掘調査の際には、中世遺構面(第1面)としたものであったが、人力で遺構確認の精査を実施したところ顕著な遺構や、それに伴う遺物など発見が疎らであった。この為、I地点と同様に中世前期の遺物包含層の可能性が高いと判断して除去すると、海拔高21.20m前後でほぼ水平に堆積して小土丹・かわらけ片などを全体に多く内包した締りのある茶褐色粘質土の地行層を第1面とした。第1面構築土(4層)を削除すると、その下からかわらけ片・炭化物粒を多く含む厚さ25cm程の遺物包含層(5層)が認められた。さらに5層を挟んで茶褐色粘質土と土丹粒を混交した(6・7層)薄い版築の硬化面を調査区中央

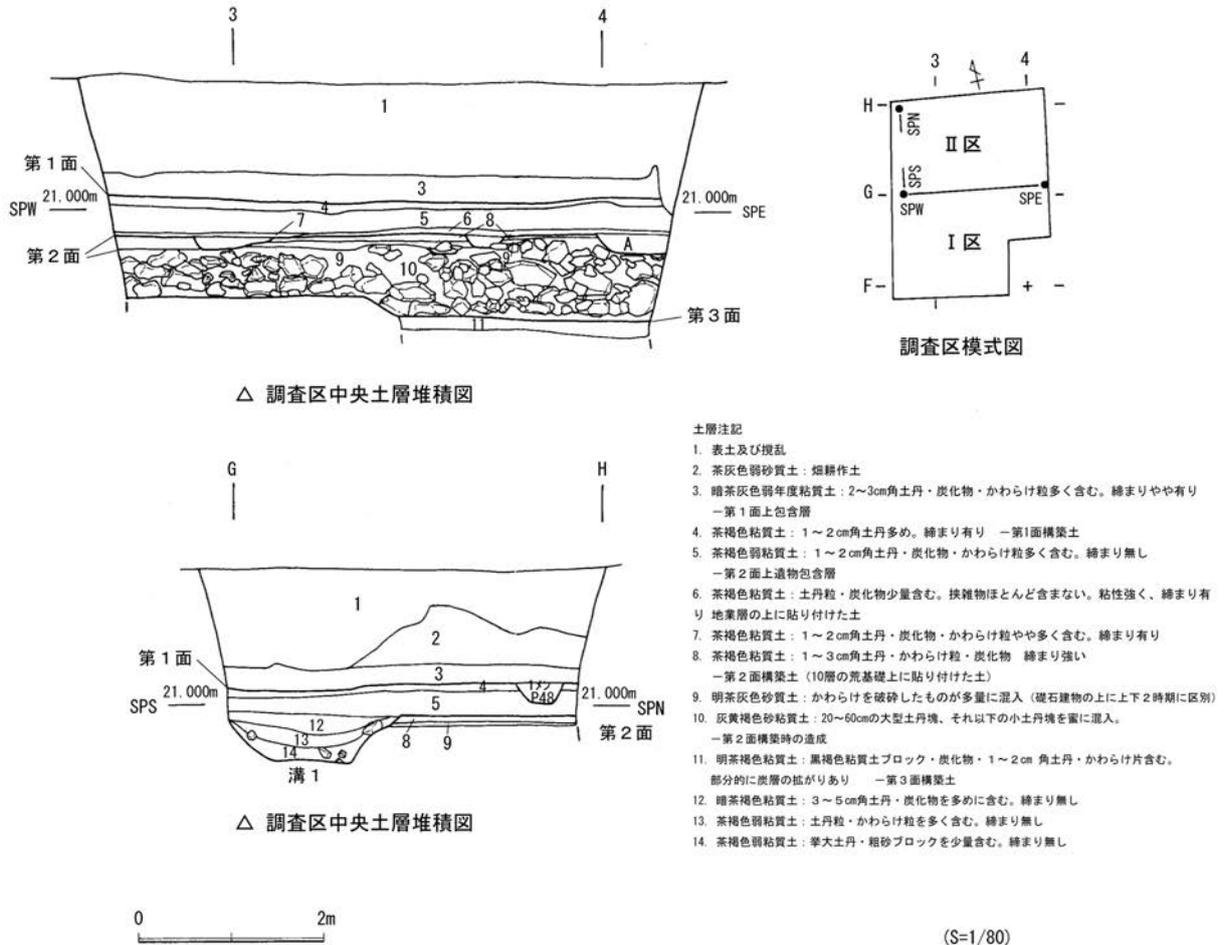


図1 調査区中央・西壁土層堆積図

部だけの限られた範囲に認められた。その直下（8層）には土丹塊を突き固めた堅牢な地行面が調査区全体に表出したので、これを第2面として調査を実施した。この面の上下層（6～9層）ではほとんど間層を挟まず繰り返し連続した版築地行が施されており、短期間のうちに貼り増して細かな整地で生活面を更新が行われていたと考えられる。この面の海拔高は20.8m前後である。9層は破碎したかわらけを敷き詰めた地行が行われ、礎石建物が確認されている。連続した整地を繰り返す第2面の地行を除去すると、大型土丹塊を密に交えて大造成した暗黄褐色土の厚い整地層（10層）の堆積が認められ、土地利用の大きな変革がこの場にあったことを窺わせる。しかし調査区の掘削深度は現地表下2m近くで崩落する危険を伴う深度に達していたので、北壁際にトレンチを入れて第2面以下の堆積土層の確認を実施した。第2面構築土（粗い基礎的な造成土）は層厚80cm以上の厚い堆積を示し、その下から黒褐色粘土ブロックと土丹粒を混交した締りある地行を成した第3面（11層）を確認することができた。確認した海拔高は19.8m程である。

b. 第1面の遺構・遺物

前章「層序と生活面」の項でも述べたように調査開始にあたる第1面は、現地表下約170cmの8層上面を遺構確認面としたが、上層からの遺構も含まれている。この面で検出した遺構は、土坑3基、掘立柱建物を構成しないピット52口などがある。

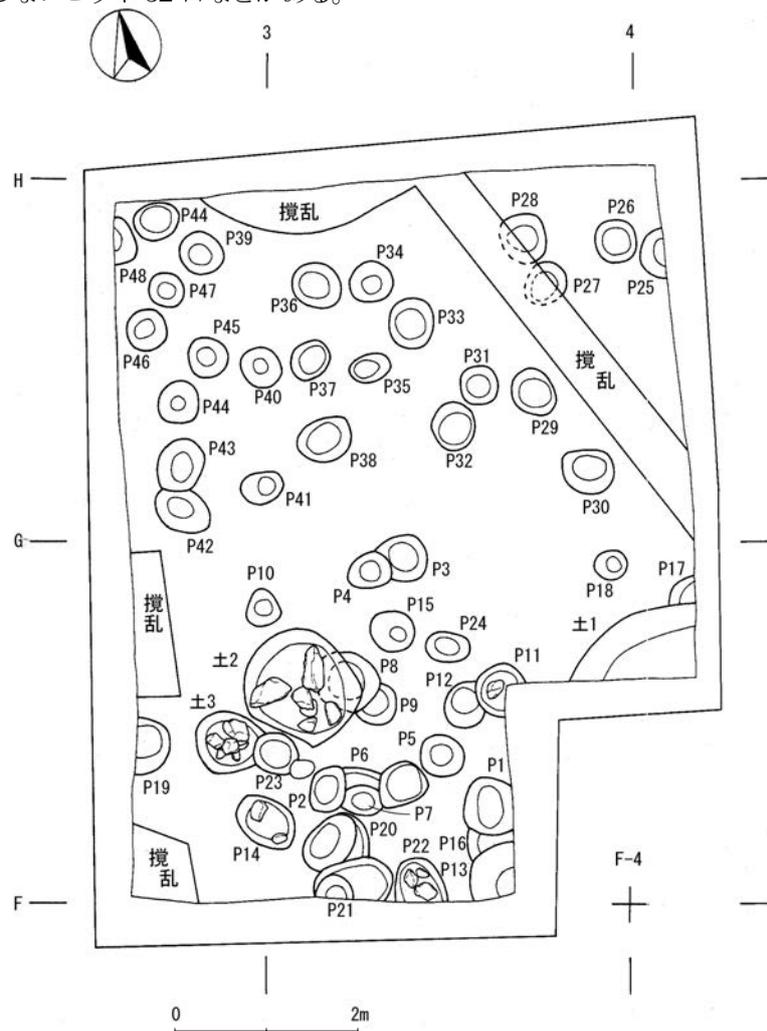


図2 第1面全測図

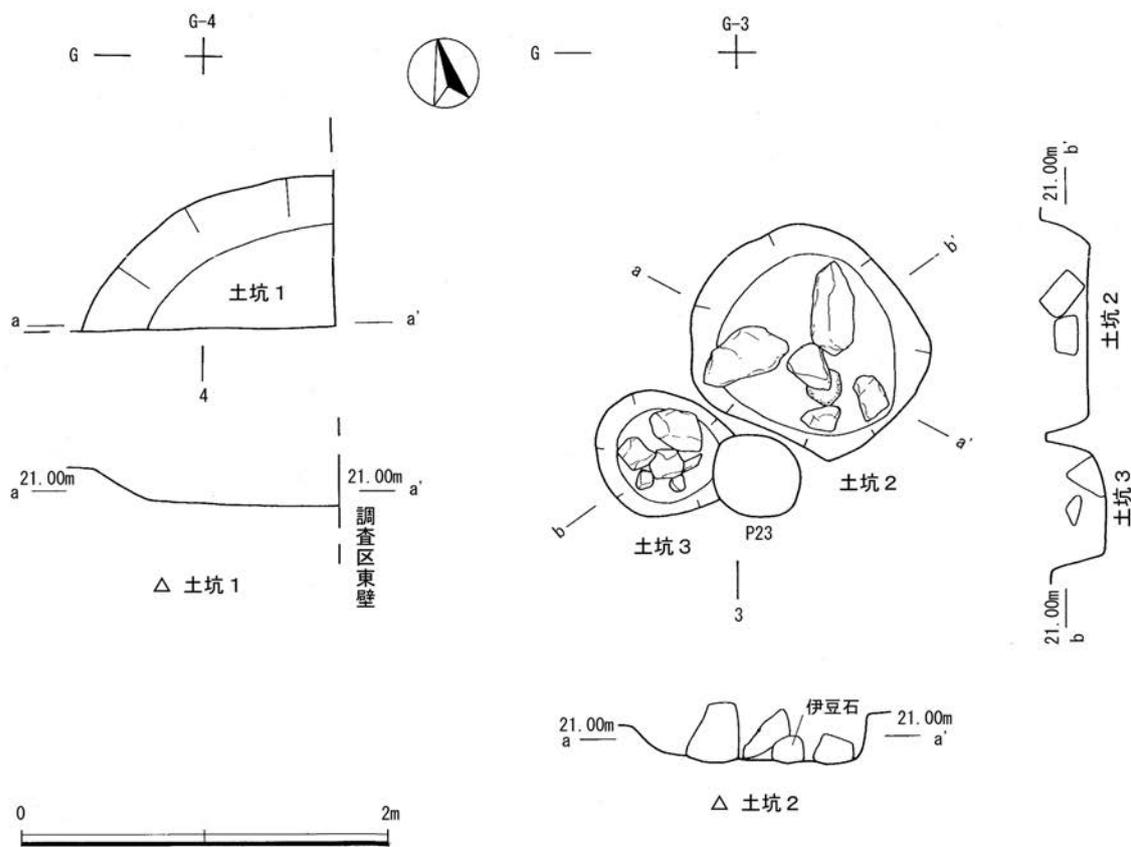


図3 第1面土坑

土坑1 (図3・5)：調査区の南東、G-4杭南側の位置で検出した。土坑の大半は調査区外に延びている。確認できた大きさ140cm以上、深さ20cmと浅い掘り方である。茶褐色の覆土は2層に分かれ、上層は小土丹を多く含む砂質土、下層は土丹粒が少なく、炭化物粒がやや多い弱粘質土である。出土遺物は1・2の底部回転糸切痕のあるかわらけ大小皿で、背高気味で薄手器壁をもつ器形である。

土坑2 (図3・5)：調査区南側のG-3杭付近でP8を壊す形で検出した。平面形状は不整形円形を呈し、長径125cm、短径110cm、確認面からの深さ30cmの規模をもち、断面は逆台形で底面が平坦な作り、底面海拔高は20.9mを測る。土坑内には約20~50cmの大小形土丹塊が5個と、伊豆石1個が置かれていた。覆土は一層からなり、土丹粒・炭化物粒を多めに含む茶灰褐色粘質土で、出土遺物は3のロクロ成形かわらけ小皿が背高で薄い器壁のもの、4は外面に格子目叩きをもつ亀山窯甕の底部片である。

土坑3 (図3)：土坑2に隣接した位置でP23に一部を壊されている。平面形状は楕円形で、断面が逆台形を呈し、確認した大きさは長径80cm、短径70cm、深さ35cmである。土坑内からは径10~30cm程の大きさの土丹塊が投げ込まれていた。覆土は土丹粒・炭化物粒をやや多めに含む茶褐色砂質土、残りの良好な遺物の出土はない。

ピット (図4・5)：調査区のほぼ全域にわたり、ピット53穴を検出した。柱並びの確かなものではなく、掘立柱建物を復元するには至っていない。ここでは出土遺物を伴うピットを中心に述べる。

P1・13・16：調査区南東隅において重複して検出、新旧関係はP13が古い。P1は楕円形で長径65cm、短径55cm以上、深さ35cmで底面海拔高20.8mを測る。遺物は図5-5のロクロ成形かわらけと、6の均質手による北部系山茶碗が出土した。P16は大半が調査区外へ拡がり、確認できた径60cm、深さ40cmである。

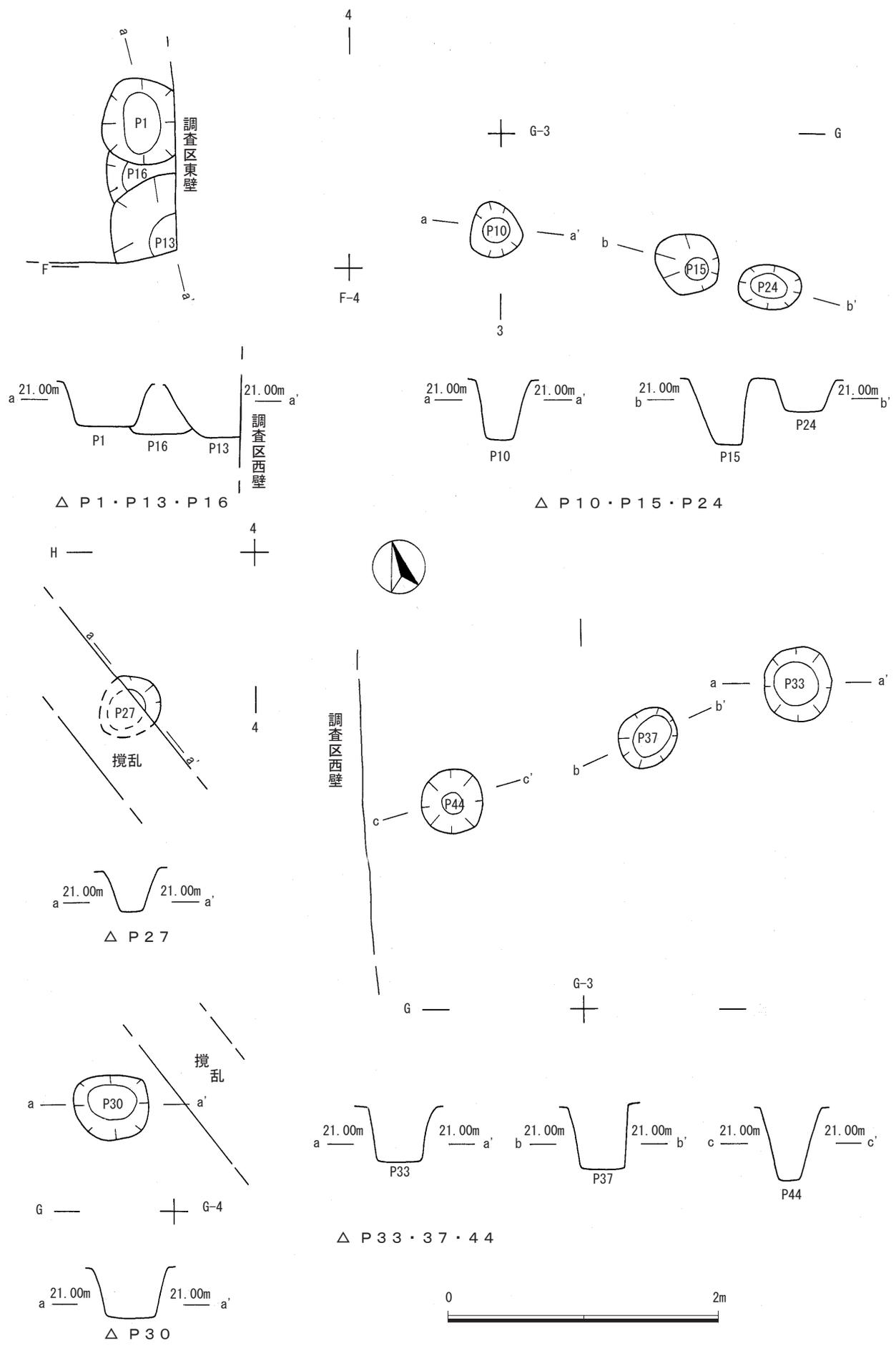


図4 第1面ピット

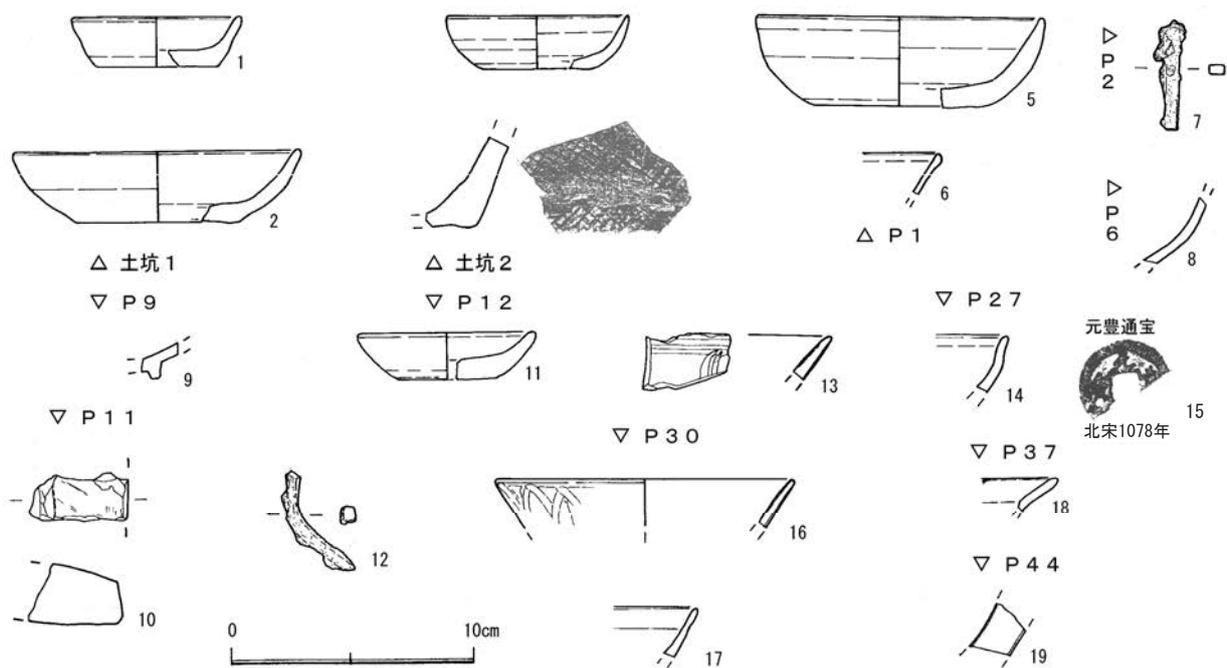


图5 第1面各遺構出土遺物

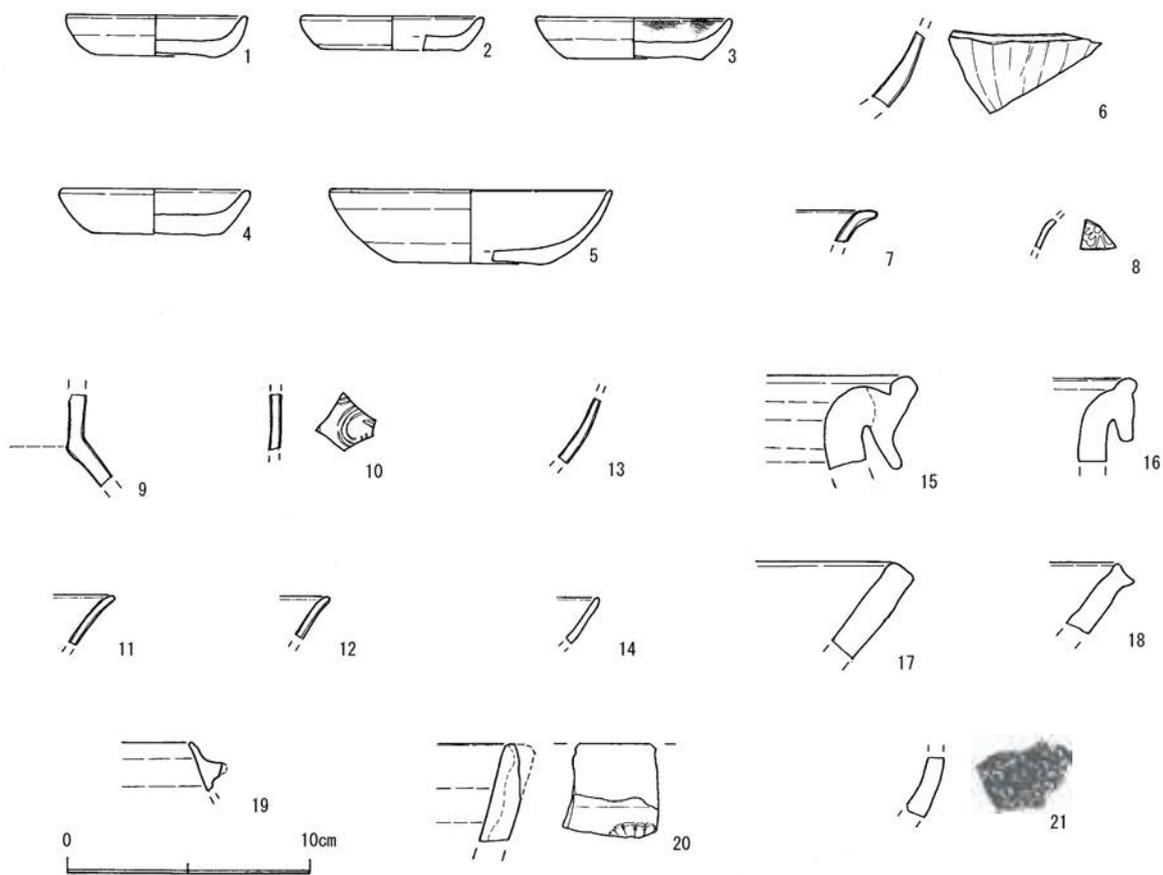


图6 第1面遺構外出土遺物

P13は両ピットに削平され、底部付近を残すのみであった。

P10・15・24：G-3杭付近で検出した。P10は楕円形で径30cm、深さ45cmで平らな底面に木質が腐食した礎版の痕跡がみられた。P15は長径53cm、短径46cm、深さ52cmで底面径の小さな深めの掘り方である。ともに図示可能な遺物の出土はない。P24は平面形状が楕円形を呈し、長径46cm、短径33cm、深さ25cmの浅い掘り方で、覆土中からは13の再火を浴びた竜泉窯系青磁劃花文碗の遺物が1点出土した。

P11・12：調査区南東部の位置で重複して検出、P11か新しい。P11は円形を呈し、規模は径約60cm、深さ35cmで底面に鎌倉石片が据えられて根石と思われる。10の遺物は砥石で石材から上野産中砥である。P12は長径50cm程の楕円形を呈し、深さ42cmで底面海拔高20.7mを測る。覆土中からは11のロクロ成形かわらけ小皿、12は鉄釘片である。

P27・28：調査区北東の位置で下水溝管の埋設に伴う攪乱で大半を破壊されて検出された。P27からの遺物は14が瀬戸窯の鉄釉天目茶碗、15が北宋銭の元豊口(通)寶(初鑄1078年)である。

P30：G-4杭の北隣に位置する。平面は隅丸方形を呈し、長さ56cm前後、深さ38cmを測る。遺物は16の竜泉窯系青磁鎬蓮弁文碗である。

P33・37・44：調査区北西域に位置する。P33は径55cm、深さ42cmを測り、炭化物粒の多い茶褐色砂質土の覆土中から17の瀬戸窯入子の口縁小片が出土した。P37は平面が楕円形を呈し、大きさは長径48cm、短径38cm、深さ52cmを測る。遺物は18の白磁口元皿が出土。P44は円形で径45cm、深さ55cmで底面海拔高20.68mを測る。下幅径の小さな深い掘り方のピットである。19の竜泉窯系青磁の酒会壺胴部小片である。

第1面遺構外出土遺物(図6)：

1～5はロクロ成形のかわらけ大小小皿である。小皿は口径7.5～8.2cm、底径5.8cm前後、器高1.4～1.8cmを測り、背低の内底面が広く開く立ち上がりの器壁をもった器形である。大皿は粉質良好な胎土のもので薄手丸深の器形である。舶載品には6・7が竜泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗(青磁碗I 5類)・折縁皿、8・10は青白磁の印花文皿・梅瓶、9・11・12は四耳壺・口元皿である。国産陶器は13・14が瀬戸窯の鉄釉天目茶碗と入子、常滑窯は15～18が甕の口縁部(中野常滑編年6b型式)と片口鉢II類になる口縁部片、19が南伊勢系の土師器羽釜、20・21は瓦質製品で外面にスタンプ文様をもつ火鉢と香炉である。

c. 第2面の遺構・遺物

この面で発見された遺構は、礎石建物1棟・玉石列2条・土坑6基・

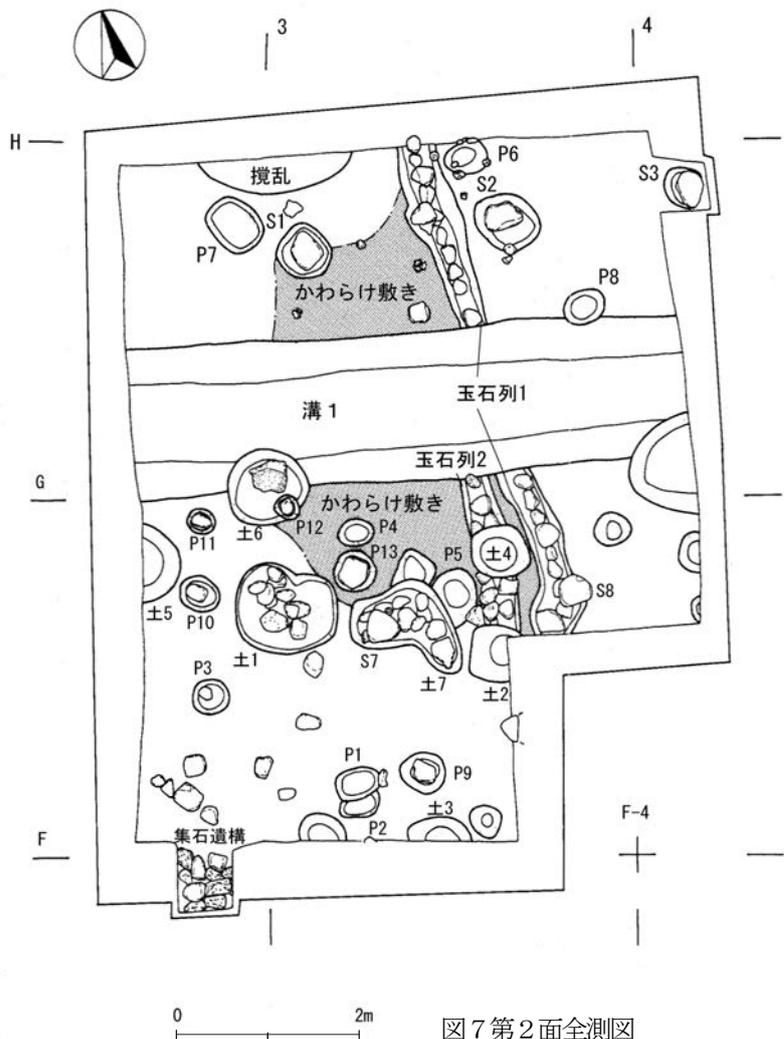


図7 第2面全測図

溝1条の他に、ピットや伊豆石などが多数発見されている。遺構確認した生活面は溝1を挟でグリット3ライン付近までの範囲に破碎したかわらけ敷き面(a面)と、その下から土丹版築地行面(b面)が認められた。

礎石建物 (図8)： 調査区のほぼ中央で検出され、東西2間×南北2間以上の礎石建物で、中央列は本跡より新しい溝1の掘削で除去され、さらに調査区の北・東外へ広がっているために全体の規模は不明である。なお礎石S3については、東西列柱通りの調査区東壁をボーリング棒で探査したところ石の当たりが確認されたので、サブトレンチを入れて礎石の確認を行ったところ、壁面から約30cmの位置で長径42cm、短径28cm、厚さ18cmの南北に長辺をもつ扁平な伊豆石が発見された。柱間寸法は東西列・南北列ともに210cm(約7尺)の柱間距離を測る。礎石に使用された石材はすべて安山岩製の伊豆石、径30~40cmの不整形円形の扁平な河原石を用いている。掘り方は径45~60cm程の楕円形もしくは隅丸方形を呈した浅いものである。礎石建物1の

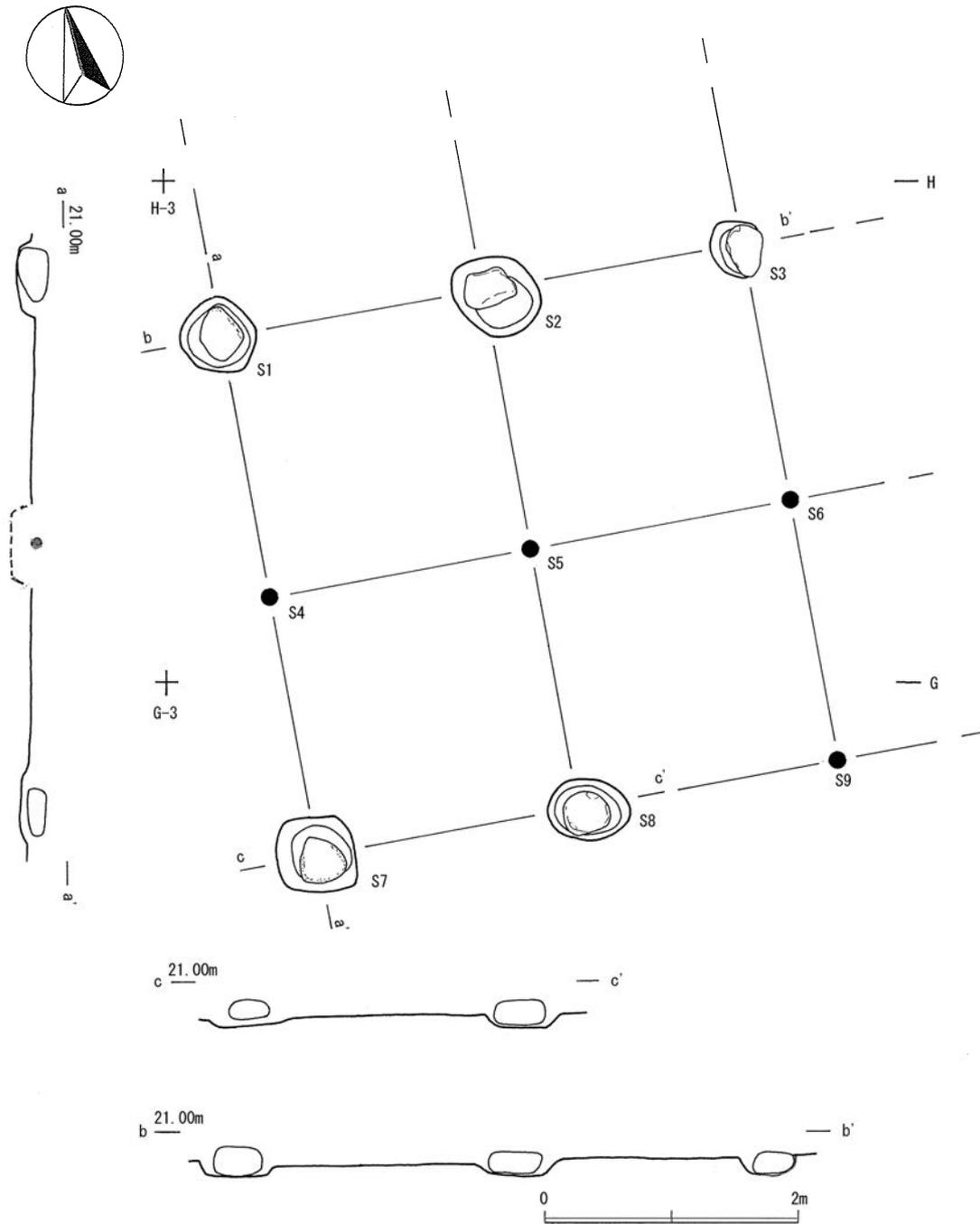


図8 第2面礎石建物1

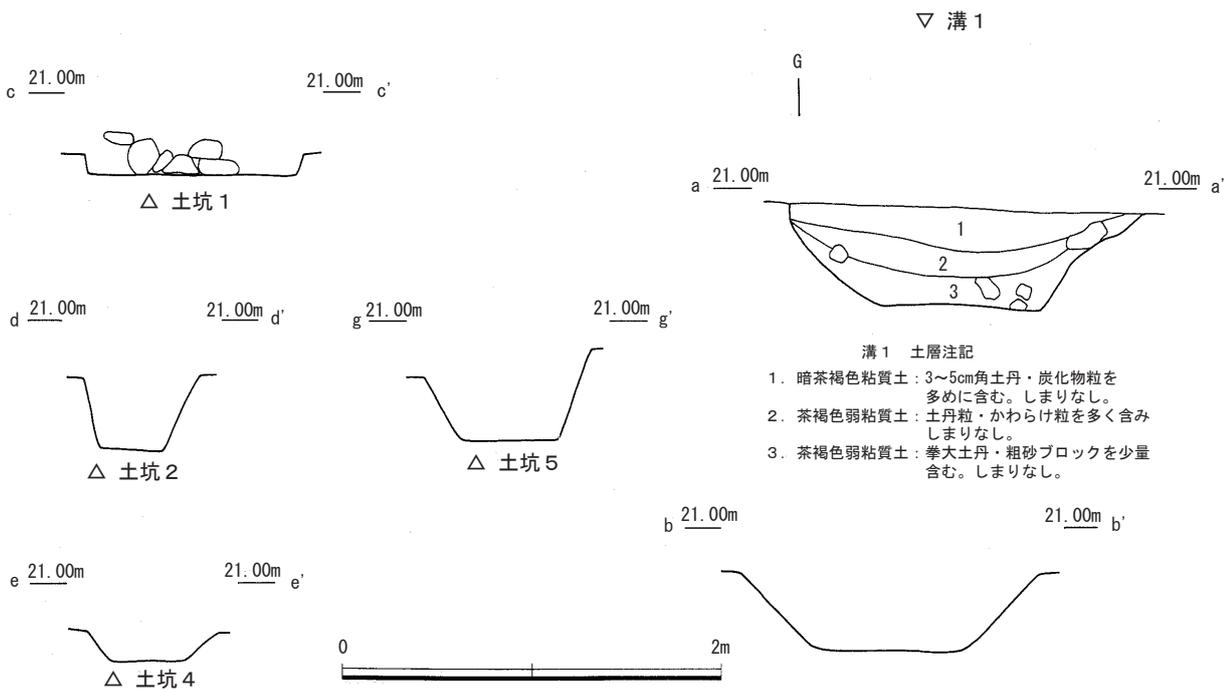
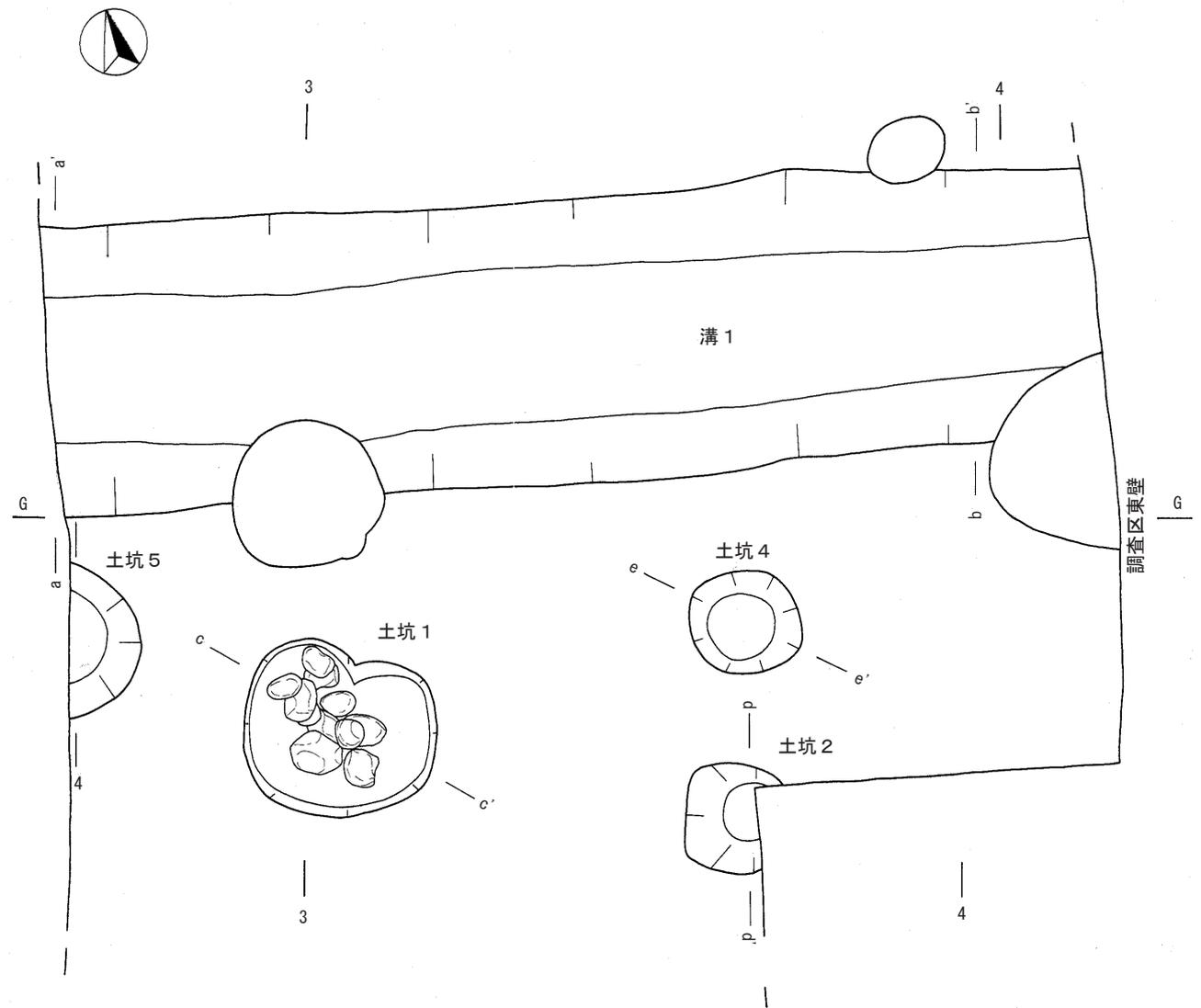


図9 第2面土坑・溝

各礎石海拔高は20.90m前後を測るが、礎石S7・S8は土坑6と玉石列1上に据えられた礎石である。礎石S7の南方170cm程のほぼ一致した柱通り上に小型の礎石が確認されており、建物に係わる可能性も考えられる。

土坑1 (図9・10) : G-3杭の南で伊豆石の集石を伴う土坑を検出した。平面形状は楕円形を呈し、長径110cm、短径98cm、確認面からの深さ20cm程の規模をもち、底面海拔高約20.6mである。集石は径20~30cmとやや小型の扁平な河原石(伊豆石)10個で構成されている。河原石は掘り方中央の底面から面を接して据えられた様子で確認されているが、その用途については不明である。覆土中からは1のロクロ成形かわらけの小皿が出土した。

土坑2 (図9・10) : 調査区南東の位置で玉石列南端を掘削した形の土坑を検出した。東側は調査区壁にかかるため全形は不明、長辺70cmの隅丸方形に近い形状と思われる。確認面からの深さ40cm、断面は逆台形状を呈し、底面が平坦な掘り方である。覆土は概ね2層に分けられ、上層は土丹を砕いたような茶灰色土の薄い堆積がみられ、下層は径1~3cm土丹粒と炭化物を多く含む暗茶褐色土で構成される。出土遺物は2が小口径のロクロ成形かわらけ小皿、3が瀬戸窯灰釉碗の口縁部片で端反気味の器形である。

土坑3 (図7) : 調査区西壁中央に位置し、南外に拡がり全体規模は不明である。長径72cmの楕円に近い形状と思われる。底面は平坦だが西側の下幅がやや深くなり、海拔高20.60mになる。覆土はかわらけ粒・炭化物を多く交えた茶褐色土の単一層である。図示できる出土遺物はない。

土坑4 (図9・10) : 土坑2の北隣に位置し、玉石列2中央を壊して掘り込んだ土坑である。平面形状はほぼ円形を呈し、直径68cm程、深さ20cmの浅い皿型断面の掘り方である。出土遺物は4・5の回転糸切底をもつかわらけ大小皿である。

土坑5 (図9・10) : 調査区西壁中央に位置するが壁外へ拡がり全形は不明、東西径90cmの楕円形に近い形状と思われる。掘り方の断面は逆台形状を呈し、深さ52cmで平坦な底面である。覆土は主に5cm角土丹と炭化物をやや多く含む茶褐色粘質土で、底面近くに締りのない暗茶灰色粗砂層の薄い堆積が認められた。粗砂層中から6のロクロ成形かわらけの灯明皿が1点出土した。

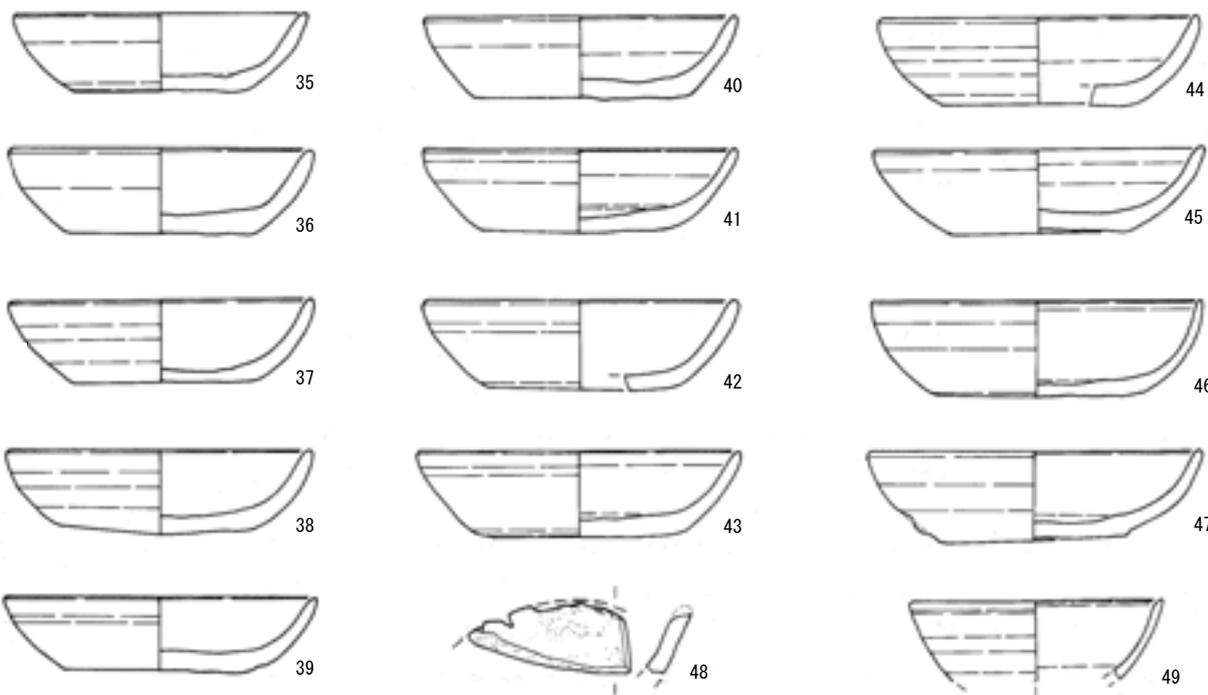
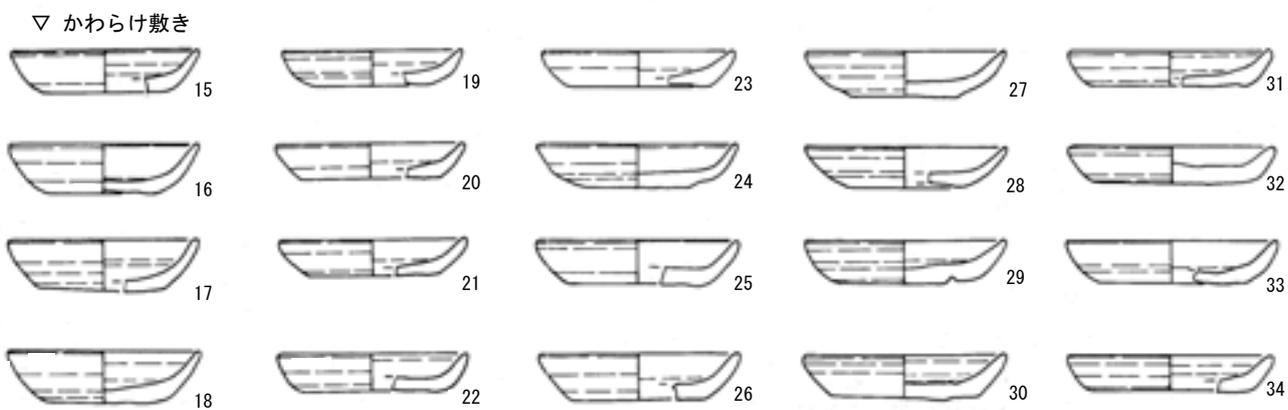
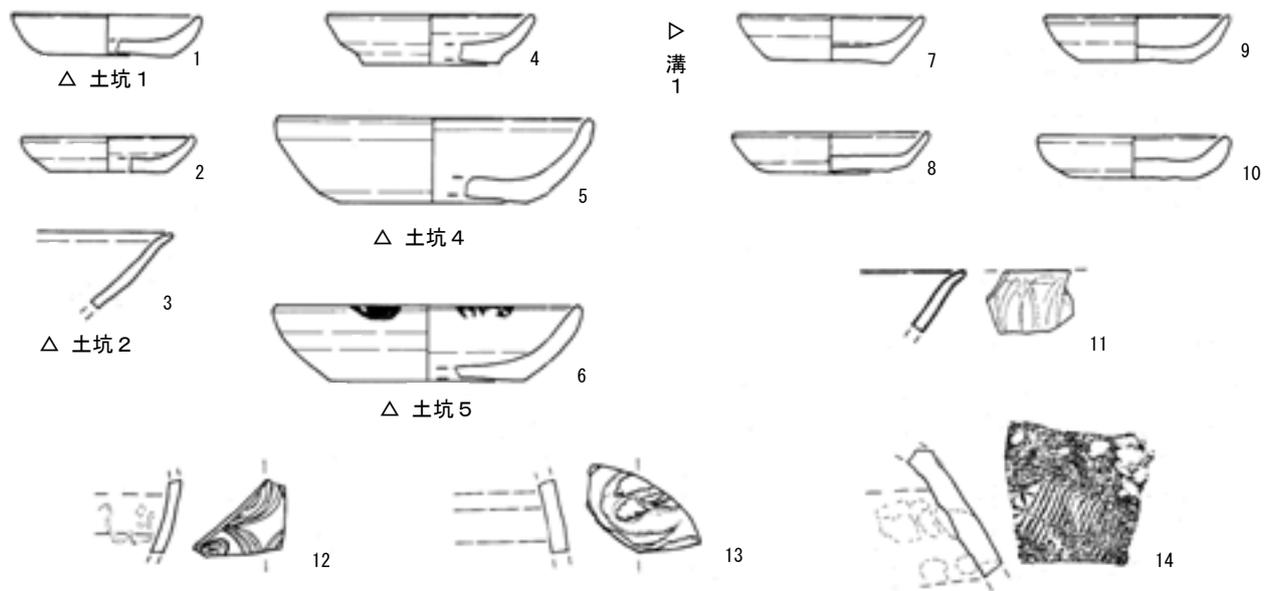
土坑6 (図7) : G-3杭に位置し、溝1・P12と重複する形で掘り込まれている。平面形はほぼ円形を呈し、径90cm、深さ33cmの大きさをもち、底面海拔高は20.60mである。覆土は小土丹と灰褐色粗砂ブロックを含む暗茶灰色土であり、底面近くから礎石転用と思われる大型河原石の破片が見られた。出土遺物はない。

玉石列1 (図11・12) : かわらけ破砕片を敷いた範囲の東辺に沿って浅い溝状の掘り方をもつ一列の玉石列を検出した。玉石列は南北方向のほぼ真北の主軸方位で直線的に配列されているが、中程を溝1によって削平されている。確認した規模は長さ5.8mで北端が調査区外へ延びており、石列主軸方位はほぼ真北を示している。玉石列は溝状で浅い逆台形の断面をもち、底面が平らな掘り方内に一列で20個の安山岩製河原石が使用されている。玉石は15~25cm大、厚さ5~10cmの楕円形を呈しもので、長辺が南北方向になるように据えられていた。南端の玉石は一回り大型で主軸が西に振れている。玉石列の上面の海拔高は20.65~70mである。なお南端玉石上に据えられた礎石(S8)は礎石建物1を構成するものである。

出土遺物は図12-6~9はロクロ成形のかわらけである。小皿の6・7は背低気味で薄手器壁の内彎した器形、大皿は厚手器壁で内彎気味の8と、背高気味でやや薄手器壁になる9の資料がある。10は手づくね成形による白かわらけである。

玉石列2 (図7・12) : 玉石列1の西隣に並行した位置方向で、南北両端を土坑2と溝1南肩に、中央部を土坑4で壊された形で検出された。確認できた規模は長さ1.85m、幅30~40cm程の浅い溝状を呈した掘り方中には玉石が4石と3石の二列に並び、さらに溝肩まで間に2石が遺存していた。玉石は径15~20cm、厚さ7cm前後の楕円形で扁平な河原石である。玉石列の上面海拔高は20.65mを測る。

出土遺物は図12-11のロクロ成形のかわらけ小皿が1点出土した。



第10 第2面各遺構出土遺物(1)

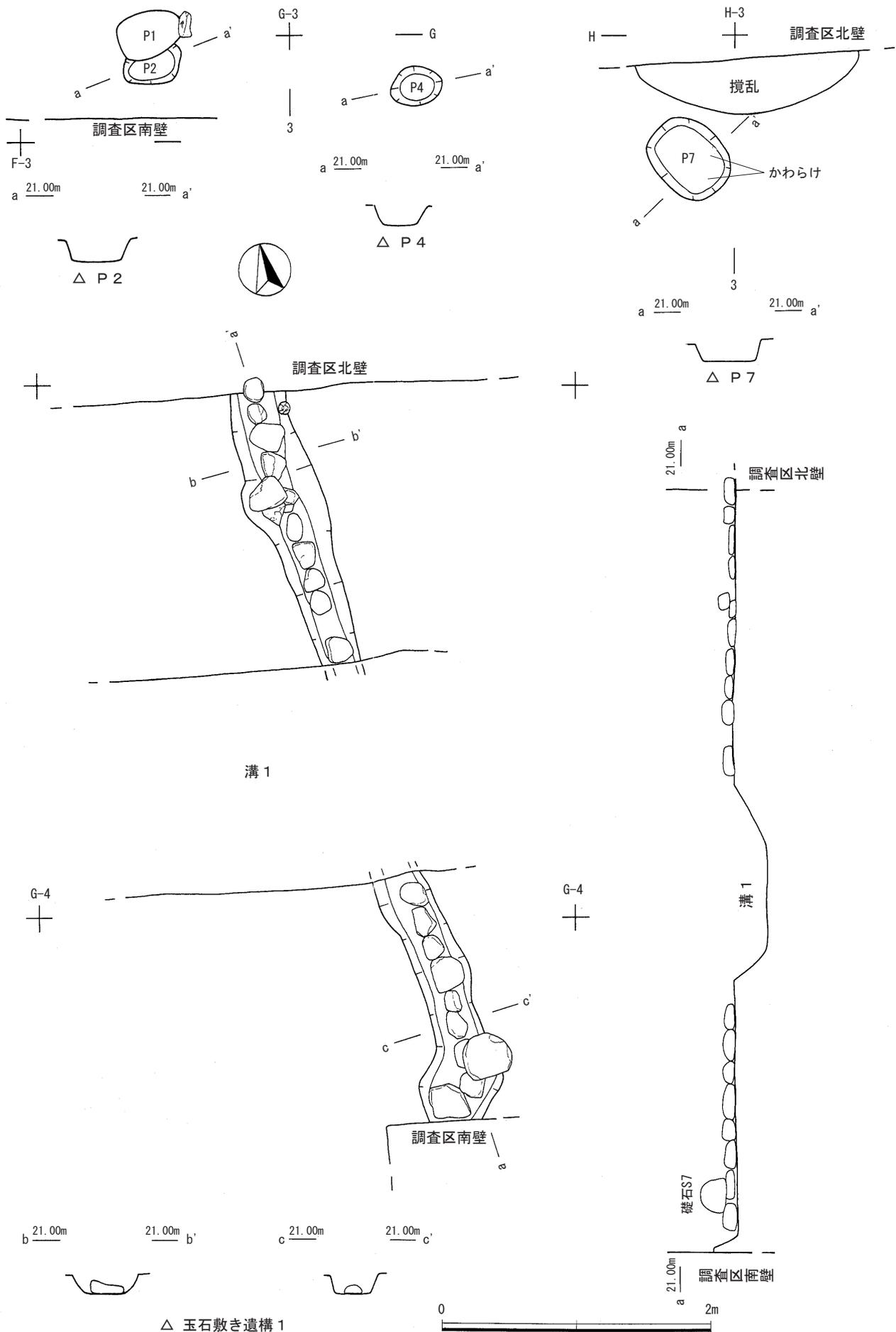


図11 第2面 ピット・玉砂利

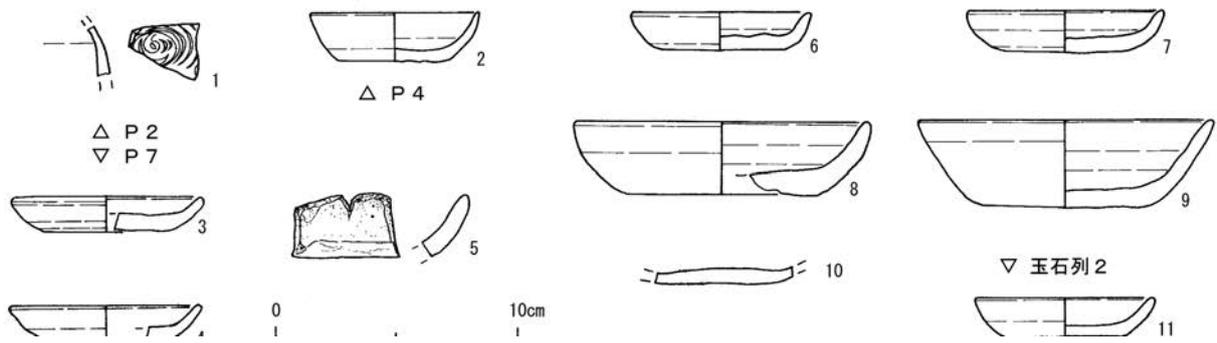


図12 各遺構出土遺物(2)

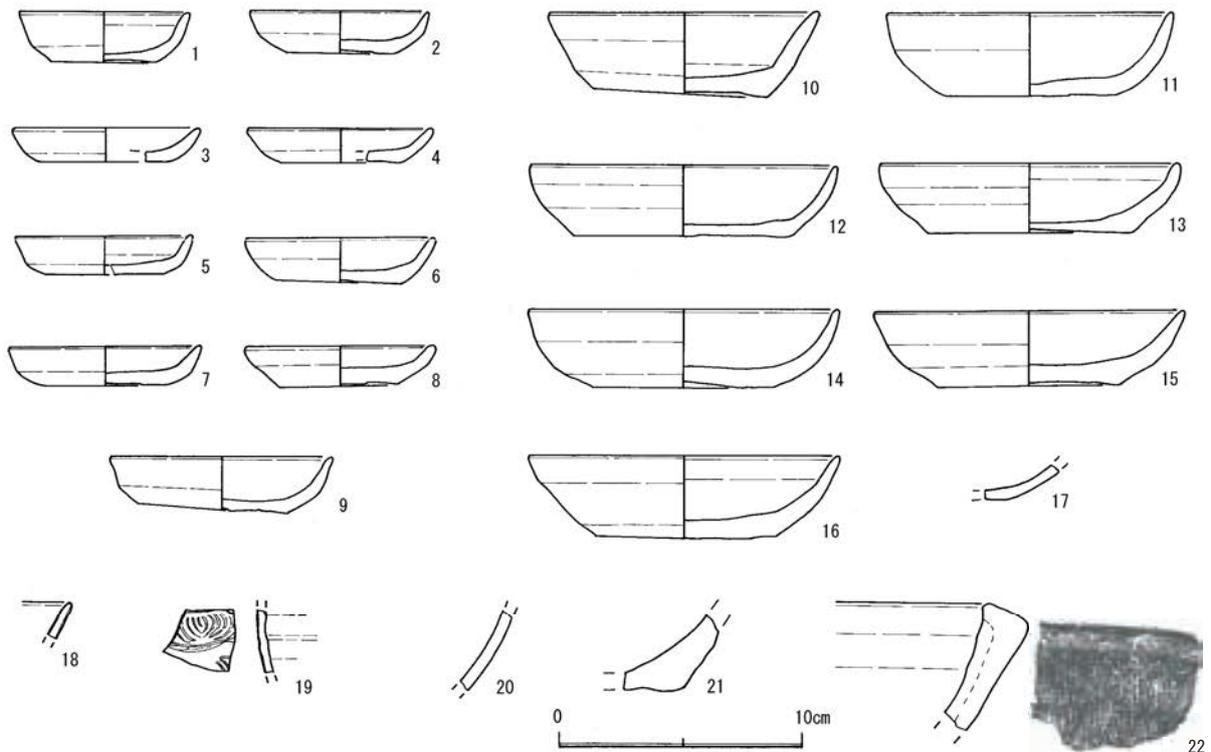


図13 第2面遺構外出土遺物(1)

溝1(図9・10)：調査区中央でグリットGライン北沿いの位置で東西方向に走る素掘り溝であり、東西両端は調査区外に延びている。本溝は礎石建物1や玉石列1、かわらけ敷き面などを壊し掘り込んでいる。確認した規模は調査区内での長さ6.1m以上、上面幅160～170cm、底面幅74～86cm、深さ45cm前後を測る。掘り方断面は整った逆台形を呈し、溝底面の海拔高は20.35m前後である。覆土は三層で、1層は3～5cm角土丹、炭化物粒を多めに含んだ締りのない暗茶褐色粘質土、2層が茶褐色弱粘質土で土丹粒・かわらけ粒を多く含むもの、3層からは土丹小塊(拳大)・粗砂ブロックを少量交えた締りのない茶褐色弱粘質土が認められた。

出土遺物は図10-7～14である。7～10はロクロ成形のかわらけ小皿で、7・9が背高気味の薄い器壁、8が背低で薄い器壁のもの、10が背低で厚い器壁は内彎しながら立ち上がる。11は竜泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗で口縁部が外反気味、12・13は青白磁梅瓶で外面に牡丹唐草文を刻り込む。14は常滑窯の甕片で外面に叩き目痕をもつ。

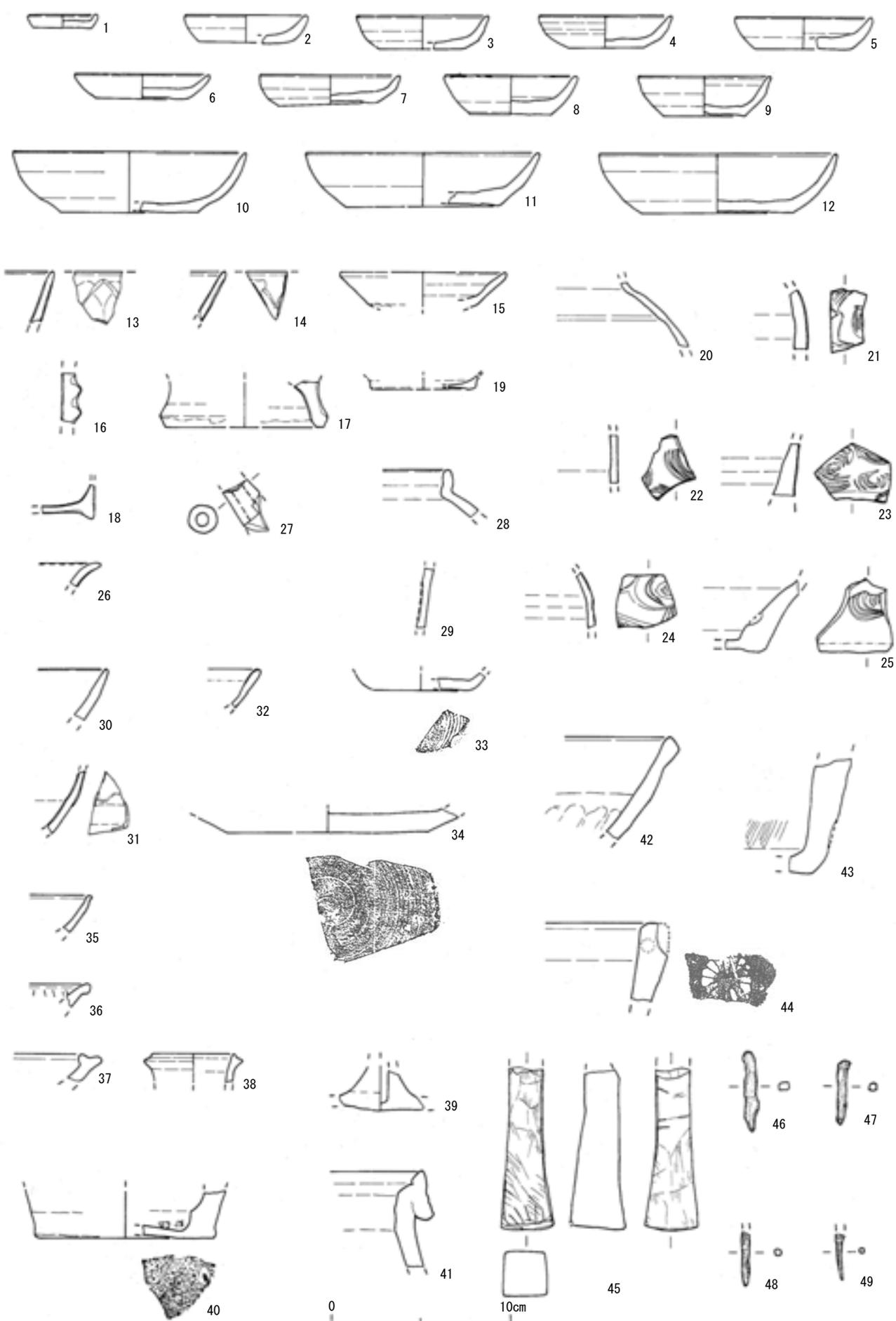


图 1 4 第 2 面遺構外出土遺物(2)

ピット・その他(図7・11・12) : この面からは礎石建物に伴う礎石掘り方以外に建物を構成しない礎石・ピットと、集石遺構・かわらけ敷き面などが確認されている。

P2 : 調査区南端の土坑3西隣に位置し、P1に一部を壊されている。楕円形状で長径47cm、短径27cm以上、深さ18cmと浅い掘り方である。覆土は炭化物粒混じりの茶褐色土で、遺物は1の外面に渦巻文を刻む青白磁梅瓶小片が出土した。

P4 : G-3グリット近くでかわらけ敷き面を掘り抜いたピットである。平面形は楕円形を呈し、長径40cm、短径28cm、確認面からの深さ18cmを測り、覆土は粗砂混じりの暗褐色砂質土である。出土遺物は2の糸切底かわらけ小皿、背高気味の薄い器壁をもち、内彎した器形である。

P7 : 調査区北西隅に位置する。形状は楕円形を呈し、長径65cm、短径50cm、確認面からの深さ17cmと浅い掘り方のピットである。暗褐色砂質土の覆土から3・4のロクロ成形かわらけ小皿と、5のロクロ成形かわらけを転用した埴塙が出土している。

P9 : 調査区南東隅でみられ、円形の掘り方底面に礎石を据えている。掘り方は径47cm前後、深さ20cmの底面が平らな浅いもの、礎石は長径30cm程の上面平坦であるが、下面は欠けた伊豆石を使用している。礎石上海拔高20.70mである。

P10 : G-3杭の南側に位置する。掘り方は長径50cm、短径37cm、深さ15cmで平面楕円形を呈し、礎石は長径25cm程の伊豆石を東寄りに据えている。礎石上の海拔高20.78m。

P11 : P10の北側で見られた。径約30cmのほぼ円形の浅い掘り方内には扁平な小型の伊豆石を据えている。礎石上の海拔高20.75m。

P13 : 土坑1の北隣に位置し、かわらけ敷き面を掘り込んでい。掘り方は径45cm程の平面円形を呈し、長径約35cmで一部周囲が欠失した礎石を据えている。

集石遺構 : 調査区南西隅で壁面から伊豆石・土丹塊の一部が顔を覗かせていたので範囲を確認する目的で拡張トレンチを設定して検出を行った。その結果、トレンチ内には第2面の堅牢な土丹版築地行面上に大型土丹塊と伊豆石の集中する範囲が確認され、東側は調査区外へと拡がるため全体範囲は不明である。集石の様相から必ずしも目的・用途をもった遺構とは判断できないが、簡単に触れておく。第2面を構築する数回に及ぶ堅牢な土丹版築地行面上に径25~35cm程の扁平な土丹塊が置かれ、その上に長径30cm程の伊豆石3個が乗せられた状況を検出したが、何か目的をもって意識的に配置されたかは疑問が残る。

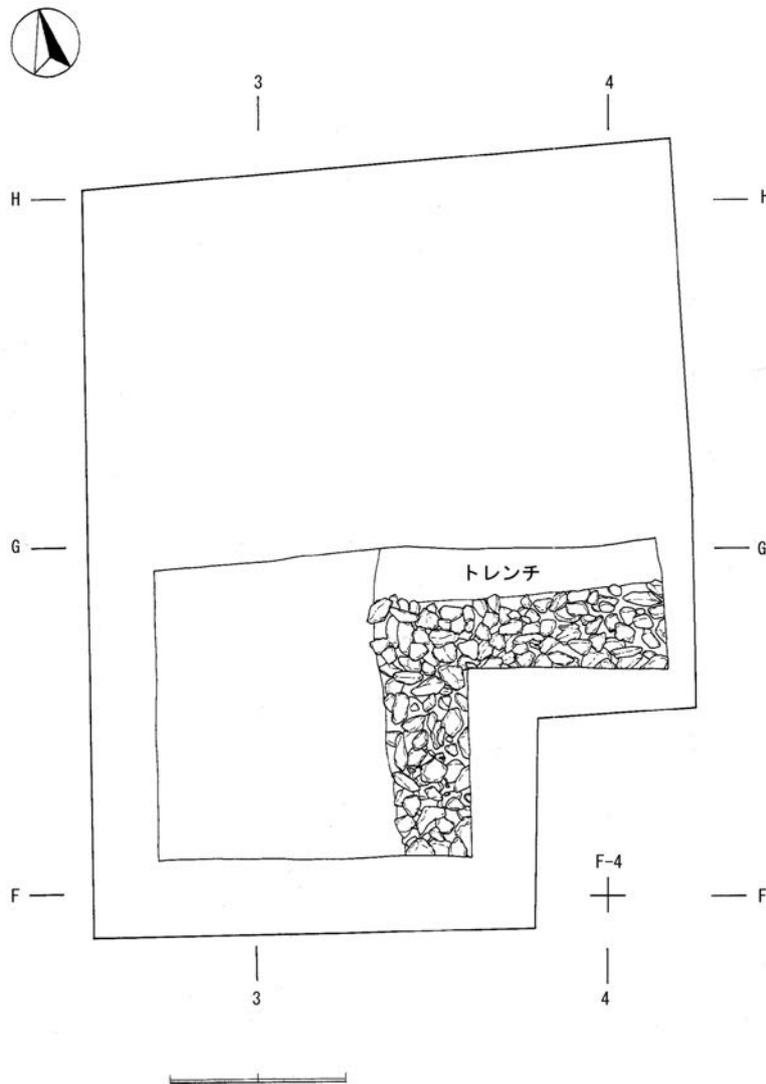
かわらけ敷き面(図7・10) : 調査区中央~北側、溝1を挟んでだ玉石列東側には最大幅(東西)2.5m、長さ(南北)5.1mの範囲でかわらけを破碎して突き固めた地行が確認された。なお、第2面の調査ではかわらけ敷き面上をa面、かわらけ敷きを除去して表出した地行面をb面としている。この面は破碎土丹を突き固めた土丹版築地行と同じように、かわらけを粉々に砕いて厚さ5~15cmの整地層にしている。図10に示したかわらけ資料の大半は、かわらけ敷き整地層の下部からのもので潰され細片になった状態を接合して掲載している。

出土遺物は15~47がロクロ成形糸切底のかわらけ大小皿である。小皿は主に背低気味で内彎した器形の資料であるが、15~18・24・27の背高気味で薄手の器壁の資料も認められる。大皿には口径12~13cm程、器高3.3cm以上の薄手器壁で内彎した器形の資料が主体を占めている。48はかわらけを転用した埴塙である。49は東播磨系の土器碗である。

第2面遺構外出土遺物(図13・14) : 遺構外出土遺物のうち、図13に示したのは第2面直上からの資料で、図14は第1面下~第2面までに出土した資料であり、それぞれ分けて掲載している。図13-1~16はロクロ成形による糸切底かわらけである。小皿をみると、1は小口径で背高の薄手器壁、2~8は口径7.7cm前後、器高1.6cm前後で背低の内彎した器形の皿タイプが主体をなしている。中皿は9が口径9.3cm、器高2.4cmで内彎気味の薄手器壁、10は口径11.2cm、器高3.5cmの背高で厚手の器壁は直線気味に立ち上がる器形であ

る。11～16の大皿タイプは口径12.3～12.9cm程の主に内彎気味に立ち上がる器形である。11は小さめの口径で背高気味、12・13は背低気味の薄手器壁、14～16は底部が厚手器壁で底径が小さめになるのが特徴である。17は白かわらけ、18～20は舶載陶磁器で、18は龍泉窯系青磁の無文碗、19は青白磁梅瓶で外面に蓮華唐草文を施文、20は泉州窯系の緑釉盤である。21は外面に格子目叩きを施した亀山窯甕、22は浅鉢型火鉢である。

図14-1～12はすべてロクロ成形のかわらけである。1は極小かわらけ、小皿タイプの器高をみると2・6は背低で内底がやや広め、3～5・7は背高気味で薄手の器壁、8・9は背高で薄手の器壁が内彎気味に立ち上がる。大皿タイプの10～12は背高気味で薄めの器壁をもち、内彎した立ち上がりの器形である。13～29は舶載陶磁器である。13・14は龍泉窯系青磁碗で外面に鎬蓮弁文を片切彫り施文、17・18は龍泉窯系青磁花瓶と思われ、16も外面に凹凸文様があり瓶か。15は同安窯の櫛描文皿である。19～25は青白磁で19の小壺以外はすべて梅瓶小片、26・27は白磁の口元皿と水注である。28・29は褐釉の長胴壺である。30～42は国産陶器である。瀬戸窯には30が鉄釉碗、31が天目茶碗体部片で内外面に黒褐色の釉薬を施す。32・33は灰釉皿、34は折縁深皿の底部片、35は碗型入子、36・37は灰釉卸皿で36が鎌倉前半期の所産であろう。38は灰釉瓶子で口縁片、39は灰釉仏花瓶である。40は外底砂目底の渥美壺、41・42は常滑窯の甕口縁部（中野編年第7型式）と片口鉢I類である。43・44は瓦質火鉢である。45は上野産の砥石、46～49は鍛造の鉄釘である。



図I5 第2面下トレンチ

d. 第2面下の調査

第2面より下層の調査については、I区第2面の調査終了時において地表からの掘削深度は2m近くに達していた。この面を掘り下げていくと、拳～頭大の土丹塊を多量に混入した粗い造成土(図1-10層)の厚い堆積層で隙間からは豊富な湧水がみられ、調査区壁の崩落する危険性を予想させるものと判断された。さらに調査で発生する廃土を敷地内で処理することができなくなったなどの条件から、I区全体の平面的な調査を実施することが困難と判断した。それ以下の調査は、II区との境になるI区北壁際にトレンチを設定し下層の生活面や遺構・遺物の確認作業を行った。しかし、第3面はトレンチ壁で土層断面の堆積層により生活面を確認しただけであり、II区を含めて平面的な調査は実施していない。第2面を構築する粗い造成土は層厚80cm以上もあった。それを除去して表出した第3面は、地表下2.8m前後で黒褐色粘土ブロックと土丹小塊による地行(同図11層)であった。面上の海拔高は約19.80mである。

第2面構築土中出土遺物(図16-1~24) : I区東半部の第2面構築土(8~10層)から出土した資料である。1~12のかわらけはすべて糸切底のロクロ成形である。1~3・6~9の小皿は、口径7.5~7.9cc、底径5.3~5.8cm、器高1.6~1.9cmを計り、背低気味の薄手器壁は内彎した立ち上がり、体部中位よりわずかに開く器

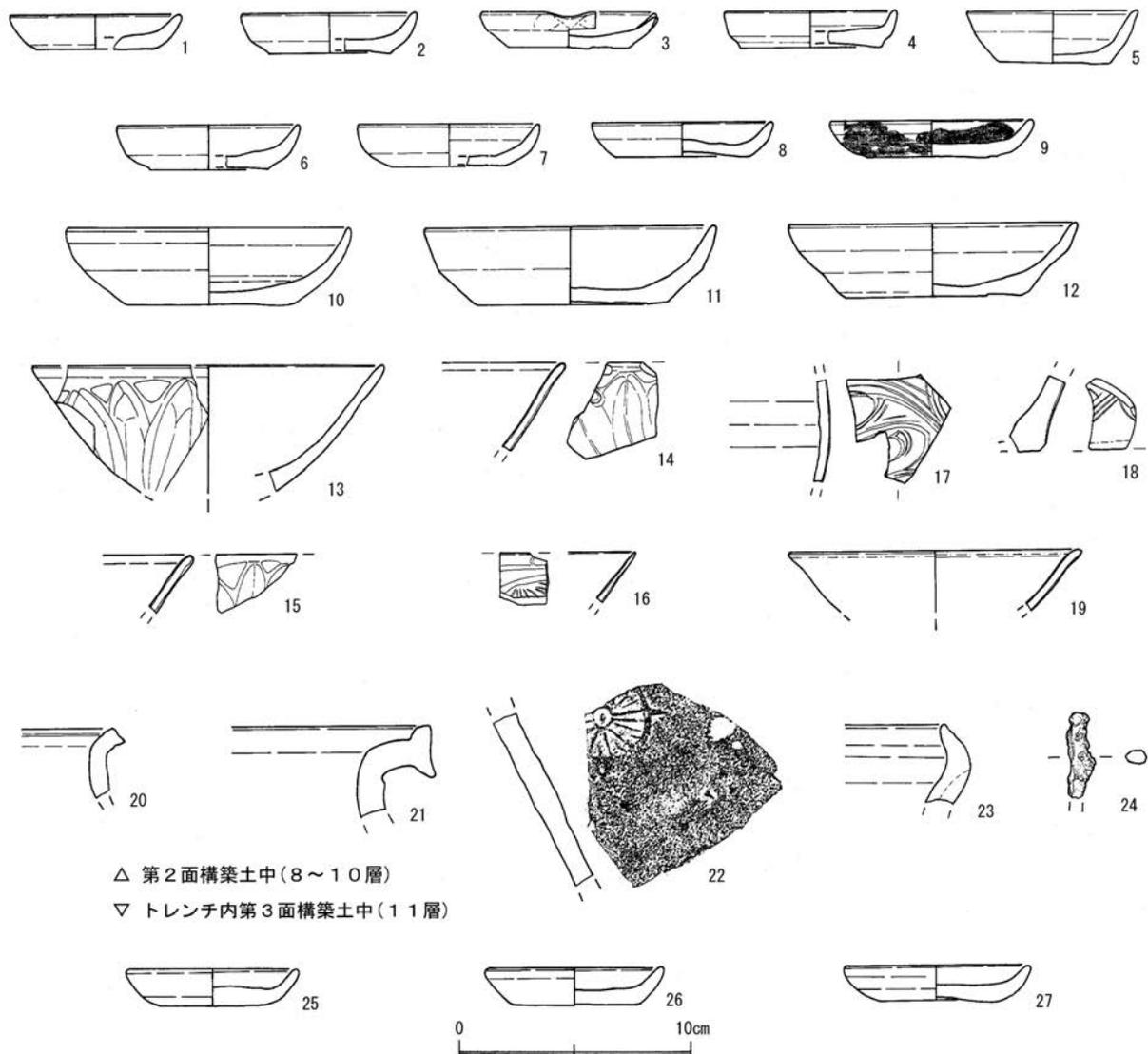


図16 I区第2面下出土遺物

形、4は背低で底部より外反した器壁が中程から直立気味になる器形、5は底径・口径比が大きく、背高の薄い器壁で、内彎して立ち上がり側面観碗型を呈する。3は口縁部に指押し片口状がみられ、9は内外面に煤が付着した灯明皿である。10は背高気味の薄手器壁で側面観碗型を呈し、11・12は薄手器壁が開きながら立ち上がり、体部上位で外反気味になる。13～16は龍泉窯系青磁碗、16は内面に劃花文を施文、13～15は外面に鎬蓮弁文を片切彫りする。17・18は青白磁梅瓶で外面に牡丹唐草文を施文する。19は白磁口元皿で口唇部釉葉搔取りで露臺である。20は黒褐釉壺、21～23は常滑窯壺・甕（中野編年6a型式含む）である。24は鉄釘である。

第3面構築土中（図16-25～27）：3点のかわらけ小皿はトレンチ内で第3面の地行層中(11層)から出土した資料である。ロクロ成形で口径7.8～8.3cm、底径5.3cm、器高1.6cm程の背低で内底面が広め、器壁が開き気味の立ち上がりである。

第4章 まとめ

今回の調査では出土遺物や土層観察からみると、文献による歴史的な様相を示した画期とは異なり、両地点からは15世紀代へ降る遺物は第1面の面上包含層や遺構からも出土していない。この区域の様相については近代以降の削平や整地作業に伴う造成などがあり明らかではないが、東勝寺旧境内の主要地域にあたる図1に示した中央支谷の3・6地点、南西支谷の8・9地点、両地点と同じ北東支谷の5地点などを概観してみると、14世紀後葉から15世紀代にかけての遺構とそれに伴う遺物の出土が認められるようである。従って、I・II地点はともに13世紀後葉から14世紀中頃ぐらいの年代が与えられそうである。

《I地点》

第1面は14世紀中頃、第2面は13世紀末葉～14世紀前半、第2面下は概ね13世紀後葉頃の年代に位置付けたいところである。

次に遺物の出土傾向について簡単に触れることにしたい。I地点の調査ではテンバコにして8箱分の遺物が出土しており、その内訳については表8で各生活面に伴う遺物を種類毎に分類したものを破片点数で記載している。また全体の遺物組成については棒グラフによる比率表を提示している。

遺物は破片点数にして1078点(100%)が出土している。この中で各面に伴う遺物の出土数量・比率をみると、最も多く確認したのは第2面の519点(48.2%)で5割近い出土量を示し、次に342点(31.7%)の第3面に伴う資料が3割強とそれに続く、さらに第1面が217点(20.1%)で約2割の出土比率であった。遺物の種類別の内訳を見てみると、最も多く出土したのはかわらけで835点(77.5%)を数え、このうち832点(77.2%)が回転糸切底によるロクロ成形の資料で、手づくね成形の資料は第2・3面を併せて僅か3点(0.3%)に留まる特徴的な出土傾向を示している。国産陶器は153点(14.3%)が出土したが、最も多いのは常滑窯の資料で115点(10.7%)を数え、次いで瀬戸窯34点(3.2%)、亀山窯の製品で甕片4点(0.4%)が出土しただけである。舶載陶磁器は青磁(36点)を主体に49点(4.6%)出土し、白磁・青白磁が4点づつ(各0.4%)認められ、緑釉・褐釉陶器の盤・壺類の製品は5点(0.5%)である。瓦・土器質製品の火鉢が第1・2面を中心に14点(1.3%)出土しており、このほか石製品7点、金属製品が鉄釘・銭の8点などの資料がみられた。

《II地点》

次に遺物の出土傾向について簡単に触れることにしたい。本地点からはテンバコで14箱分の遺物が出土しており、その内訳については破片点数を基にした数値を表7の遺物分類別の出土数量と比率表(下

段の棒グラフ) に示したとおりである。

Ⅱ地点の調査では、破片点数で7038点(100%)の遺物が出土している。

各面に伴う遺物の出土数量の傾向をみると、最も多く認められてのがかわらけ溜りやかかわらけ敷き面を構築していた第2面に伴う資料で、6359点(90.3%)を数え、9割強にも及ぶ極めて高い出土比率を示していた。それに比べて第1面は総数の1割にも満たない402点(5.7%)、調査面積を狭小とした第2面・3面構築土中に伴う資料では併せても277点(4%)に留まった低い出土比率を示していた。以上のようにⅡ地点も第2面を中心にした遺物が高い出土比率を占めており、Ⅱ地点もⅠ地点と同様、類似した様相の出土傾向が窺われ、さらに生活面の時期も概ね14世紀前半が主要な年代と推定された。

【引用・参考文献】

※第3章の引用文献も含む。

川副武胤・貫 達人 1980『鎌倉廃寺事典』 有隣堂

中野晴久 1994 「知多半島(常滑)窯の編年」『鎌倉における生産年代と消費状況』 シンポジウム資料
中世都市研究同人会

藤澤良祐 1995 「京・鎌倉の古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター

宗臺富貴子 1996 「鎌倉・今小路西遺跡(御成小学校内)の瀬戸窯製品について— 瀬戸前期から後期
までの出土様相 —」『 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』 第4輯

馬淵和雄 1997 「中世食文化の諸相 — 食器からみた中世鎌倉の都市空間 —」『国立歴史民俗博物館
研究報告』 第71集

2004 「中世史学としての土器研究 — モノ・空間認識・文化伝播 —」『中近世土器の基礎
的研究』 XVIII 日本中世土器研究会

大宰府教育委員会編 2000 「大宰府条坊跡XV — 陶磁器分類編 —」『大宰府市の文化財』 第49集

鎌倉市教育委員会編 2008『史跡東勝寺跡保存管理計画書』

表2 玉砂利計測表

No.	a	b	c	b/a	c/b	g
1	7.4	5	2.7	0.68	0.54	160.5
2	7.1	5.8	2.9	0.82	0.5	193.6
3	7.3	4.2	3.9	0.58	0.93	156.3
4	6.9	4.4	2.3	0.64	0.52	114.5
5	6.7	4.7	2.8	0.7	0.6	127
6	6.7	4.5	2.9	0.67	0.64	146.2
7	6.9	4.9	1.8	0.71	0.37	86.9
8	6.5	4	2.6	0.62	0.65	87
9	6.2	4.1	3.1	0.66	0.76	121.4
10	6.5	3.9	2.6	0.6	0.67	104.3
11	7.5	3.6	2.3	0.48	0.64	98.5
12	6.6	3.5	2.5	0.53	0.71	98.9
13	6.2	4.2	3.6	0.68	0.86	95.1
14	5.7	4.3	2.5	0.75	0.58	91.8
15	6.7	3.6	2.4	0.54	0.67	80
16	6	4.5	2.7	0.75	0.6	108.2
17	5.8	4.5	2.3	0.78	0.51	88.3
18	5.4	4.7	2.5	0.87	0.53	90.9
19	6.5	4.7	2	0.72	0.43	80.9
20	6.1	3.8	1.9	0.62	0.5	68.4
21	6	5.1	1.5	0.85	0.29	78.8
22	5.2	4.7	2.6	0.9	0.55	94.4
23	6.5	3.5	2.3	0.54	0.66	81
24	6.3	4	2.6	0.63	0.65	105
25	6.6	4.1	2.3	0.47	0.74	78.2
26	5	4.4	1.7	0.88	0.39	60.5
27	5.2	5	1	0.96	0.2	41.3
28	5.6	4.6	2.3	0.82	0.5	66.9
29	6.5	3.4	1.7	0.52	0.5	56.8
30	5.3	4.2	2	0.79	0.48	61.1
31	6.6	3.8	1.6	0.58	0.42	69.9
32	6.5	3.6	2.3	0.55	0.64	81
33	6.2	3.6	1.7	0.58	0.47	58.7
34	5.1	4	2.6	0.78	0.65	76.3
35	5.4	4	2.1	0.74	0.53	67
36	5.4	4	2.3	0.74	0.58	79.4
37	5.5	4.5	2.7	0.82	0.6	81.5
38	5.5	3.8	2.6	0.69	0.68	68.8
39	4.9	3.6	2.4	0.73	0.67	54.9
40	4.6	3.7	2.1	0.8	0.57	58.7
41	7	2.9	1.8	0.41	0.62	52.7
42	6.1	2.8	2	0.46	0.71	58.2
43	5.7	3.5	1.3	0.61	0.37	40.8
44	6.5	2.7	1.6	0.42	0.59	39.7
45	5.5	3.6	2.8	0.65	0.78	69.4
46	4.5	3.8	2	0.84	0.53	52.3
47	5.1	4.2	3.1	0.82	0.74	85.9
48	4.7	2.5	2.5	0.96	0.56	72
49	5.9	2.9	2.3	0.49	0.79	63.8
50	5.3	4.1	1.9	0.77	0.46	62.7
51	5.3	3.4	2.4	0.64	0.71	65.2

No.	a	b	c	b/a	c/b	g
51	5.3	3.4	2.4	0.64	0.71	65.2
52	5	3.8	2.4	0.76	0.63	58.9
53	5.1	3.3	1.9	0.65	0.58	59.9
54	5.1	3.8	1.8	0.75	0.47	50.3
55	5.8	3.3	1.5	0.57	0.45	46.5
56	4.7	3.8	2.1	0.81	0.55	54.7
57	5	3.3	2.2	0.66	0.67	57.2
58	5.2	3.8	1.4	0.73	0.37	43.9
59	5.7	3	1.9	0.53	0.63	53.3
60	5.6	2.7	2.3	0.48	0.85	61.6
61	5.4	3.1	2.6	0.57	0.84	63.1
62	4.8	3.9	1.6	0.81	0.41	42.2
63	5.6	3.3	1.4	0.59	0.42	40.8
64	4.7	3.9	1.8	0.83	0.46	51.3
65	5.2	3.8	1.6	0.73	0.42	50.7
66	5.6	2.9	2	0.52	0.69	52.8
67	4.8	3.9	1.9	0.81	0.49	54
68	4.8	3.6	1.9	0.75	0.53	46
69	4.8	3.8	2.1	0.79	0.55	57.3
70	5.5	2.8	2.1	0.51	0.75	55.9
71	5.6	2.9	1.8	0.52	0.62	38.7
72	5.1	3.6	1.6	0.71	0.44	46.9
73	4.3	4.1	1.3	0.95	0.32	40.1
74	4.3	3.6	2.3	0.84	0.64	44.3
75	5.9	3.1	1.5	0.53	0.48	43.7
76	4.4	3.1	1.9	0.7	0.61	39.5
77	4.4	3.7	2.4	0.84	0.65	51.3
78	4.6	3	2	0.65	0.67	43.6
79	4.7	3	1.9	0.64	0.63	40.1
80	4.2	3.4	2.4	0.81	0.71	57.7
81	5.1	3.3	1.6	0.65	0.48	47.9
82	5	3.4	1.3	0.68	0.38	35.4
83	5	3.6	2	0.72	0.56	51.6
84	5.1	3.1	2.2	0.61	0.71	47.7
85	4.6	3.2	2	0.7	0.63	37.3
86	4.7	3.2	1.7	0.68	0.53	34.2
87	4.7	3.1	1.7	0.66	0.55	33.2
88	5.1	2.8	1.5	0.55	0.54	35.6
89	4.2	3.5	2.1	0.83	0.6	39.2
90	4.5	2.5	2.3	0.56	0.92	44.7
91	4.3	3.3	1.6	0.77	0.48	33.8
92	5	3.2	1.4	0.64	0.44	34.1
93	4.9	2.6	1.5	0.53	0.58	31.1
94	4.7	2.9	1.7	0.62	0.59	38.9
95	4	3.8	1.5	0.95	0.39	35.2
96	4.4	3.4	1.8	0.77	0.53	41
97	4	3.3	1.7	0.83	0.52	37.6
98	3.8	3.5	2	0.92	0.57	35.6
99	4.4	3	1.8	0.68	0.6	33.7
100	3.7	3.5	2.1	0.95	0.6	38.9
101	4.9	4.1	1.7	0.84	0.41	44.9

a:長径(mm) b:中径(mm) c:短径(mm) g:重さ(グラム)

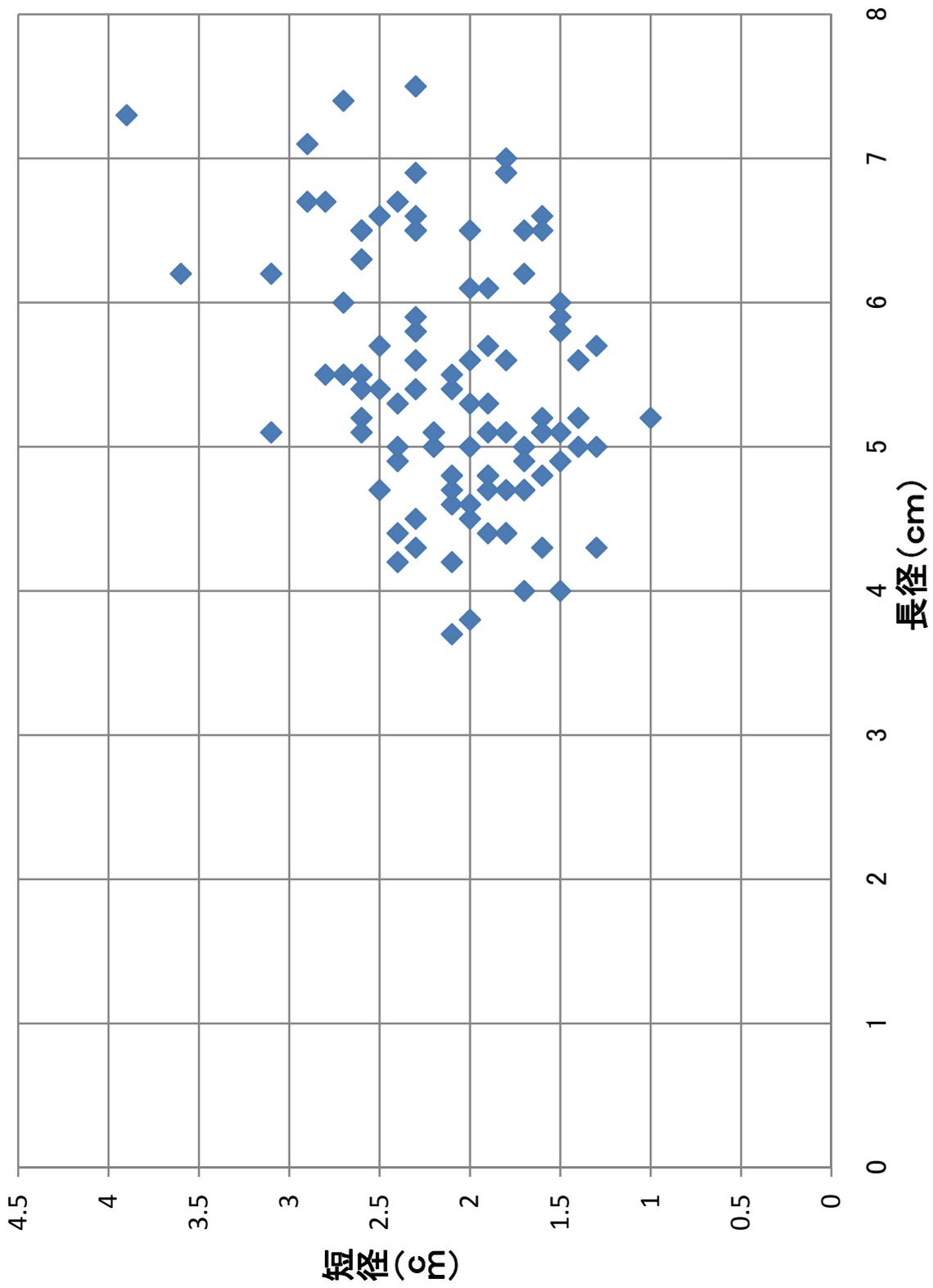


表3 玉砂利散布図

表4 遺物観察表(1)

I地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
8-1	第1面 土坑1	青白磁 皿	体部下位片			a.ロクロ 内底外周に凸帯状線あり b.白色 精良堅緻 d.水青色透明 外面下位露胎 f.内底面に櫛描文を有する一群と思われる
8-2	"	瀬戸 緑釉小皿	(10.9)	/	/	a.ロクロ b.灰色 きめ細かな良胎 d.淡灰緑色不透明 貫入多い 口縁部のみ施釉 e.堅緻
8-3	"	須恵器 甕	胴部片			a.外面格子目叩き 内面同心円叩きを横位ナデですり消す b.海綿骨芯 良土 c.灰色 e.堅緻
8-4	第1面 土坑2	常滑 壺	口縁部片			a.輪積技法 b.茶褐色 長石・礫を多量に含む c.茶褐色 e.良好
8-5	第1面 P2	瀬戸 折縁皿	口縁部片			a.口縁外反折返し b.灰色 微砂粒を含む良土 e.堅緻 d.灰釉灰緑色 f.再火で表面荒れる
8-6	第1面 P4	常滑 甕	胴部片			a.輪積技法 外面格子目叩き b.灰色 細かな白色粒 やや粘質土 c.茶褐色 e.堅緻
8-7	第1面 P8	瀬戸 灰釉瓶子	胴部径(18.6)			a.輪積技法 横位ナデ b.灰白色 微砂粒を含む良土 d.灰釉淡灰緑色を外面に薄く施釉 e.堅緻 f.再火で釉薬表面が気泡状に荒れている
8-8	第1面 P17	かわらけ	(14.6)	(10.4)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.雲母少量 微砂 海綿骨芯 粉質良土 c.橙色 e.良好
8-9	第1面 遺構外	極小かわらけ	(5.0)	4.2	1.0	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂・雲母・赤色粒が少ない粉質土 c.淡橙色 e.良好
8-10	"	竜泉窯系 青磁 無文碗	口縁部片			a.ロクロ b.灰白色 黒色微砂 精良堅緻 d.淡青灰色不透明 貫入多い
8-11	"	白磁 口元皿	口縁～体部片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.灰白色不透明 口唇部釉剥ぎ取りで露胎
8-12	"	竜泉窯系 青磁 酒会壺蓋	底部片			a.ロクロ b.灰色 黒色微砂 精良堅緻 d.青緑色不透明 厚手施釉 蓋の受部は露胎 f.外面鑄蓮弁文を施文
8-13	"	瀬戸 天目茶碗	高台径(4.1)			a.ロクロ 外面体部下位をヘラ削り b.微砂 粉質土 d.黄味灰白色 内面薄く施釉 外面露胎
8-14	"	瀬戸 灰釉瓶子	肩部片			a.輪積技法 横位ナデ b.灰白色 微砂粒を含む良土 d.灰釉淡灰緑色を外面に薄く施釉 e.堅緻 f.再火で表面荒れる 図8-7と同一個体と推定される
8-15	"	瀬戸 仏華瓶	胴部片			b.灰白色 良土 e.堅緻 d.灰釉灰緑色透明を外面に薄く施釉 内面露胎
8-16	"	瓦器質 蓋物	(7.2)	/	/	a.天頂部中央に円形のつまみ状の剥離痕 b.灰色 黒色微砂粒を含む良土 c.黒灰色の燻べ焼き風表面銀化し光沢をもつ e.良好
8-17	"	鉄製品 釘	残存長6.2 幅0.5 厚0.4			鍛造 断面四角形
11-1	第2a面 玉砂利層中	用途不明 石製品	長4.8以上 幅4.1 厚1.5 孔径1.0 深さ0.8			楕円形(長円形) 上面中央部に斜方向へ楕円形の穿孔をもつ
11-2	第2a面 P1	かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.4	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.海綿骨芯 微砂・雲母・赤色粒少なめ 良土 c.淡橙色 e.良好
11-3	第2a面 遺構外	かわらけ	(7.5)	(5.1)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.淡橙色 e.良好
11-4	"	かわらけ	(7.6)	5.7	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
11-5	"	かわらけ	(7.3)	(5.1)	2.2	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.海綿骨芯 雲母 赤色粒 やや粉質土 c.橙色 e.良好
11-6	"	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗	体部下位片			a.ロクロ b.灰色 黒色微砂 精良堅緻 d.暗緑色半透明 厚手の施釉 表面傷多し f.鑄蓮弁文を片切り彫り
11-7	"	景德鎮窯系 青白磁 梅瓶	胴部片			a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.水青色不透明 薄手の施釉 内面露胎 再火で白濁する f.白濁不鮮明だが外面に線彫り文様あり
11-8	"	景德鎮窯系 青白磁 香炉	底部片			a.ロクロ 削り出し高台 b.灰白色 精良堅緻 d.緑味水青色不透明 高台脇～高台内露胎
11-9	"	景德鎮窯系 青白磁 香炉	体部上位片			a.連環状の透かし彫風 三足の筒型香炉 b.白色 精良堅緻 d.水青色不透明 再火か白濁と多数の気泡で失透(今小路西遺跡 御成小学校用地 南谷4面出土と類似:444p, 図481-14)
11-10	"	褐釉 壺	胴部片			a.ロクロ目良明瞭 b.砂粒 石粒子 流紋状を呈す d.茶褐色不透明 外面薄く施釉 内面露胎 e.堅緻
11-11	第2a面 遺構外	瀬戸 四耳壺	(10.1)	/	/	a.玉縁状の口縁 b.灰白色 精良土 e.堅緻 d.灰釉 灰白色不透明 内外面再火の為に白濁し釉肌が発泡
11-12	"	瀬戸 灰釉瓶子	/	(8.6)	/	a.底部円板に輪積技法を用いる b.灰白色 白色粒を含む良土 d.灰釉灰緑色を外底に施釉 e.堅緻
11-13	"	瀬戸 灰釉瓶子	胴部片			a.輪積技法 横位ナデ b.灰白色 黒色粒 白色粒 e.堅緻 d.灰釉灰緑色を外面に施釉 再火で小気泡多く荒れている

表5 遺物観察表(2)

I地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
11-14	第2a面 遺構外	瀬戸 卸皿	(14.2)	/	/	a.口縁肥厚気味 b.淡黄灰色 精良土 d.灰釉刷毛塗り 淡灰緑色半透明 外面まだらに施釉
11-15	"	瀬戸 卸皿	口縁部片			a.ロクロ成形 外反気味口縁で断面方形の口唇部 b.灰色 白色粒 d.灰釉 灰緑色を外面に施釉 e.堅緻
11-16	"	瀬戸 卸皿	/	(7.8)	/	a.ロクロ成形 外底糸切痕 b.黄灰色 黒色粒 e.堅緻 f.内底面にヘラ描き 卸目を刻む
11-17	"	瀬戸 直縁大皿	口縁部片			a.外面に顕著なロクロ目痕 b.赤味のある灰白色 精良土 e.堅緻 d.灰釉 灰緑色半透明 内面～外面中位まで薄手に施釉
11-18	"	常滑 蔀口壺	(7.1)	(8.9)	(9.0)	a.輪積技法 口縁外反して玉縁状 肩部と胴部下端に沈線あり 外底砂目 底 b.灰褐色 砂粒 長石粒 c.灰黒色 e.堅緻
11-19	"	常滑 甕	口縁部片			a.輪積技法 b.茶褐色 長石粒 c.暗茶褐色 e.堅緻
11-20	"	常滑 甕	口縁部片			a.輪積技法 b.暗灰色 白色砂粒 石英粒 c.茶褐色 e.堅緻 f.中野編年7 型式
11-21	"	常滑 甕	胴部片			a.輪積技法 内面指頭痕・横位ナデ 外面縦・横位ナデ b.灰色 白色砂 粒・石英粒やや多い e.硬質 堅緻 c.灰黒色
11-22	"	瓦質 火鉢	口縁部片			a.輪積技法 横位の磨き痕 b.灰色 砂粒 白色砂粒 c.灰黒色 e.良好 f. 外面口縁下に二条凹線に挟まれ菊花文スタンプ、その下に貼付け連珠文 を施文
11-23	"	平瓦(女瓦)	残存長6.6 残存幅6.5 厚2.2			a.凹面黒色微砂粒の離れ砂付着 凸面花菱文の叩き目痕と離れ砂付着 b.灰色 砂粒 白色砂粒 c.灰黒色 e.良好 f.永福寺Ⅲ期瓦(女瓦E類)と同 類
15-1	第2b面 砂利層中	龍泉窯系 青磁 蓮弁文碗	(13.3)	/	/	a.ロクロ b.灰色 黒色微砂 d.灰緑色不透明 厚手施 釉貫入多い e.堅致 f.外面に短弁蓮華文を片切彫り
15-2	"	龍泉窯系 青磁 蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ b.淡灰色 黒色微砂 d.灰緑色不透明 小気泡多い e.堅致 f.外 面に単弁蓮華文を片切彫り
15-3	"	常滑 甕	底部片			a.輪積技法 外底砂目底 外面ヘラ状工具掻き上げ 内面指頭痕・横位ナ デ b.明茶褐色 長石粒・石英粒 c.茶褐色 e.硬質 堅緻
15-4	"	石製品 硯	残存長4.3 残存幅3.6 厚6.8			a.極めて滑らかな仕上げ 断面逆台形に加工 わずかに屈曲した作りを残 し、四葉硯の可能性あり b.石質 頁岩 c.赤灰色
15-5	第2b面 土坑5	常滑 甕	胴部片			a.輪積技法 外面に縦長の格子目叩き 内面指頭痕・横位ナデ b.淡褐色 白色粒 長石粒 石英粒 e.堅緻 c.褐色
15-6	第2b面 土坑6	かわらけ	(7.7)	(5.3)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.海綿骨芯 雲母 赤色粒少なめ粉質気 味 良土 e.良好 c.橙色
15-7	"	かわらけ	(7.7)	(5.5)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 c. 淡橙色
15-8	"	かわらけ	(7.8)	5.0	1.4	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.海綿骨芯・雲母・赤色粒少なめ やや 粉質土 e.良好 c.橙色
15-9	"	白磁 印花文皿	底部片			a.型押し作りの小皿 b.白色 精良堅緻 d.白色半透明 厚手施釉 f.内面 印花文 口元小皿と思われる
15-10	第2b面 P6	常滑 甕	胴部片			a.輪積技法 外面に縦長の格子目叩き b.灰色 礫粒をほとんど含まない c.灰褐色 e.堅緻
15-11	第2b面 P8	かわらけ	(7.6)	(4.9)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 や や砂質土 c.淡橙色 e.良好
15-12	第2b面 P9	かわらけ	(8.3)	(4.9)	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.黒色微砂・海綿骨芯・雲母・赤色粒 を多めの粗土 c.橙色 e.良好
15-13	第2b面 P10	瓦質 火鉢	口縁部片			a.口縁肥厚して外方へ丸味をもって張り出す 棒先端状の横位磨きを施 して表面滑らか再火赤変か b.淡灰色 黒色微砂 赤色粒・白色粒を多く 含む e.やや甘い c.淡赤灰色黒色
15-14	第2b面 遺構外	龍泉窯系 青磁 蓮弁文碗	体部片			a.ロクロ b.灰色 黒色微砂 d.淡黄褐色半透明 やや厚手に施釉 f.外面 に鎬蓮弁文を片切彫り
15-15	"	景德鎮窯系 青白磁 梅瓶	肩部片			a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.水青色不透明 内外面施釉 再火を受け表 面荒れる f.外面唐草文
19-1	第3面 土坑1	常滑 甕	(28.8)	/	/	a.輪積技法 外面口縁～肩部に灰オリブ色の自然釉が多量 外面に縦長 の格子目叩き b.灰色 砂粒・長石粒・石英粒を多い粗土 c.暗赤褐色 e.硬質 f.中野編年6 型式
19-2	第3面 黒色土中	かわらけ	7.6	5.1	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 粗土 e. 良好 c.橙色
19-3	第3面 黒色土中	かわらけ	(7.8)	(4.4)	2.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 やや砂質土 e.不 良 c.黄褐色
19-4	"	龍泉窯系 青磁 蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.緑灰色不透明 厚手の施釉 小気泡多し f.外面に鎬蓮弁文片切彫り
19-5	"	龍泉窯系 青磁 折腰皿	(8.7)	/	/	a.ロクロ 口縁端部やや肥厚 b.灰色 精良堅緻 d.緑灰色半透明 やや厚 手の施釉 f.無文

表6 遺物観察表(3)

I 地点

() は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
19-6	第3面 遺構外	かわらけ	7.5	5.6	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 口径・底径比少ない b. 微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 やや多め粗土 c. 橙色 e. 良好
19-7	"	かわらけ	7.6	5.4	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色 e. 良好
19-8	"	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯・雲母・赤色粒が多くやや粗土 c. 橙色 e. 良好
19-9	"	かわらけ	(7.9)	(5.7)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
19-10	"	かわらけ	(7.8)	(4.5)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 雲母 赤色粒 良土 c. 明黄褐色 e. やや不良
19-11	"	かわらけ	(12.4)	(7.5)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 黒色微砂・海綿骨芯・雲母・赤色粒を多く やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部に煤付着 灯明皿
19-12	"	かわらけ	(12.6)	(8.2)	3.0	a. ロクロ成形 外底糸切痕 板状圧痕 b. 黒色微砂・海綿骨芯・雲母・赤色粒を多めに含む粗土 c. 橙色 e. 良好
19-13	"	かわらけ	(12.7)	(8.3)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 海綿骨芯 雲母 赤色粒 d. 淡橙色 e. 良好
19-14	"	褐釉 壺	胴部片			a. 内外面ロクロ目痕 b. 灰白色 砂粒 石粒 d. 外面暗褐色不透明で薄く施釉 内面露胎 e. 堅緻
19-15	"	常滑 甕	底部片			a. 輪積技法 内面自然降灰 b. 褐灰色 砂粒・長石粒・石英粒多めに含む c. 灰褐色 e. 堅緻
19-16	"	常滑 甕	(27.4)	/	/	a. 輪積技法 内面指頭痕・横位ナデ 外面口縁～肩部にかけ明褐灰色の自然降灰 b. 灰色 砂粒・石粒少なめ c. 褐灰色 e. 堅緻 f. 中野編年6a型式
19-17	第3面下 落込み	かわらけ	8.0	6.5	2.0	a. 手づくね成形 外底指頭圧痕 b. 黒色微砂 海綿骨芯 雲母 良土 c. 黄橙色 e. やや不良

表7 I 地点遺分類別出土数量・比率表

出土地種類		1面	2面	3面	個数	比率(%)
かわらけ	口ケ口	159	372	301	832	77.2
	手捏ね	0	2	1	3	0.3
舶載陶磁器	青磁	5	16	15	36	3.3
	白磁	2	2	0	4	0.4
	青白磁	0	4	0	4	0.4
	緑釉	0	1	0	1	0.1
	褐釉	0	2	2	4	0.4
国産陶磁器	瀬戸	14	19	1	34	3.2
	常滑	20	75	20	115	10.7
	亀山	1	2	1	4	0.4
土製品	瓦	1	3	0	4	0.4
	瓦器	2	0	0	2	0.2
	火鉢	3	11	0	14	1.3
	その他	1	0	0	1	0.1
石製品	硯	0	1	0	1	0.1
	砥石	1	0	0	1	0.1
	その他	1	4	0	5	0.5
金属製品	釘	2	4	1	7	0.6
	鉄滓	4	0	0	4	0.4
	その他	1	0	0	1	0.1
自遺然物	骨	0	1	0	1	0.1
合計		217	519	342	1078	100
比率(%)		20.1	48.1	31.7		

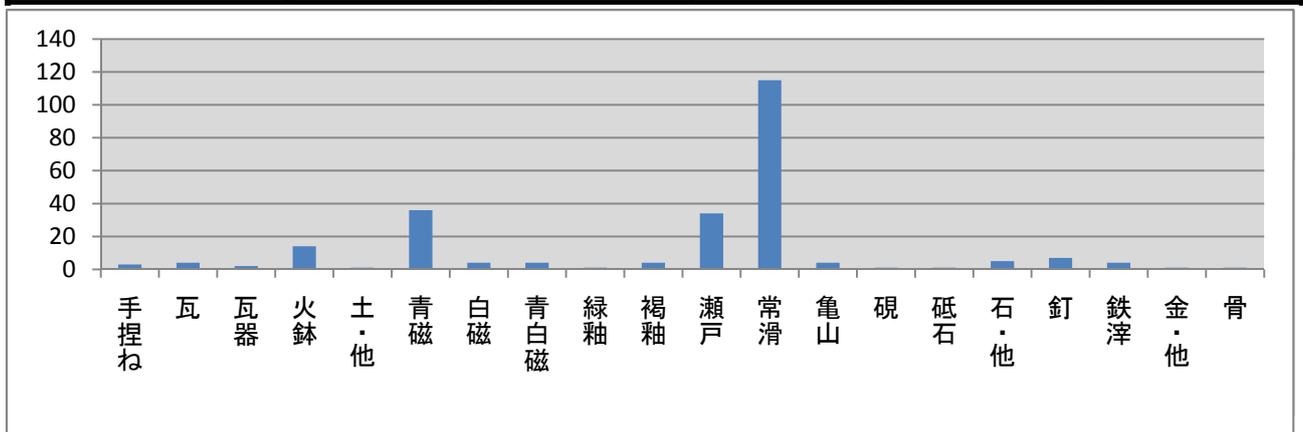


表1 遺物観察表(1) II 地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
5-1	第1面 土坑1	かわらけ	(7.1)	(5.1)	2.1	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
5-2	"	かわらけ	(11.9)	(6.8)	3.0	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
5-3	第1面 土坑2	かわらけ	(7.5)	(4.6)	2.2	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
5-4	"	龜山 甕	底部片			a.輪積技法 内面ナデ b.灰色 白色粒 黒色粒 c.灰黒色 e.甘く軟質気味 f.外面 格子叩き目
5-5	第1面 P-1	かわらけ	(12.0)	(7.2)	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 砂質土 c.黄橙色 e.良好
5-6	"	北部系 山茶碗	口縁部片			a.ロクロ b.灰白色 微砂 精良土 d.口縁～内面に白濁の自然降灰 e.良好硬質
5-7	第1面 P-2	鉄製品 釘	残存長4.5 幅0.6 厚0.4			a.鍛造 断面四角形
5-8	第1面 P-6	白かわらけ	体部片			a.体部小片 b.微砂 雲母 良土 c.淡白色 e.良好
5-9	第1面 P-9	白磁 碗	底部片			a.ロクロ b.白色 精良堅緻 d.淡白色不透明 内面施釉 外面露胎
5-10	第1面 P-11	砥石	残存長2.0 幅4.1 厚2.4			b.粘板岩質 f.上面に削痕 側面磨減痕 f.上野産中砥
5-11	第1面 P-12	かわらけ	(7.3)	(4.2)	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.橙色 e.良好
5-12	"	鉄製品 釘	残存長5.6×幅0.5×厚0.6			a.鍛造 断面四角形
5-13	第1面 P-24	竜泉窯系 青磁 劃花文碗	口縁部片			a.ロクロ b.明灰色 精良堅緻 d.青緑色不透明 内外面施釉 f.口縁内面に沈線 再火で白濁気味
5-14	第1面 P-27	瀬戸 天目茶碗	口縁部片			a.ロクロ b.褐灰色 良土 d.口唇部:赤褐色で禾目状 体部:黒褐色 薄手施釉 e.良好硬質
5-15	"	銅銭	銭径2.4 銭厚0.1			元豊通寶 北宋1078 初鑄
5-16	第1面 P-30	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ b.灰白色 黒色微粒 精良堅緻 d.緑灰色透明 細かな貫入 内・外面薄手施釉
5-17	第1面 P-33	瀬戸 入子	口縁部片			a.ロクロ b.灰色 精良土 d.自然降灰 e.良好
5-18	第1面 P-37	白磁 口元皿	口縁部片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.淡青灰色半透明 薄い施釉 f.外面に鎬蓮弁文が片切彫り 割口に漆付着あり漆継
5-19	第1面 P-44	竜泉窯系 青磁 酒会壺	底部片			a.ロクロ b.灰白色 黒色微粒少量 精良堅緻 d.淡緑灰色不透明 内面やや薄手、外面厚手の施釉 f.外面鎬文
6-1	第1面遺構外	かわらけ	(7.5)	(5.7)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
6-2	"	かわらけ	(7.9)	(5.9)	1.4	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c.黄橙色 e.良好
6-3	"	かわらけ	(8.2)	(5.8)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好 f.斑状に煤付着 灯明皿か
6-4	"	かわらけ	(7.9)	(5.7)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
6-5	"	かわらけ	(12.0)	(6.7)	3.0	a.ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b.雲母 赤色粒 良土 粉質 c.黄橙色 e.良好
6-6	"	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗	体部片			a.ロクロ b.灰色 精良堅緻 d.灰緑色半透明 f.外面に鎬蓮弁文を片切彫り
6-7	"	青磁 折縁皿	口縁片			a.ロクロ 口縁部外方へ折曲げ b.灰白色 黒色微粒少量 精良堅緻 d.灰緑色半透明 再火で表面白濁
6-8	"	青白磁 皿	体部片			a.器壁薄手 b.白色精良堅緻 d.緑味淡灰白色透明 f.内面印花文
6-9	"	白磁 四耳壺	肩部片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.緑味淡灰白色透明 内面が薄く外面が厚い施釉
6-10	"	青白磁 梅瓶	胴部片			a.ロクロ b.灰白色 黒色微粒 堅緻 d.緑味淡灰白色透明 f.二次焼成w@白濁
6-11	"	白磁 口元皿	口縁部片			a.ロクロ 口縁部外反気味 b.灰白色 精良堅緻 d.緑味淡灰白色透明 口唇部釉剥ぎ取りで露胎
6-12	"	白磁 口元皿	口縁部片			a.ロクロ 口縁部外反気味 b.黄味灰白色 精良堅緻 d.緑味淡灰白色透明
6-13	"	瀬戸 天目茶碗	体部片			a.ロクロ b.灰白色 精良堅緻 d.黒褐色鉄釉 薄く施釉
6-14	"	瀬戸 入子	口縁部片			a.ロクロ b.灰色 精良土 d.無し e.良好
6-15	"	常滑 甕	口縁部片			a.輪積技法 b.灰赤色 砂粒 白色粒 小石粒少量 c.褐色 f.中野編年6b型式

表2 遺物観察表(2) II 地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
6-16	第1面遺構外	常滑 甕	口縁部片			a. 輪漕技法 内面指頭痕 横位ナデ b. 灰色 砂粒 長石粒 c. 暗褐色 e. 堅致
6-17	"	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片			a. 輪積技法 b. 灰色 長石粒 小石粒少量 c. 褐色
6-18	"	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片			a. 輪積技法 内面摩耗 b. 灰色 砂粒 長石 鉄分の吹き出し c. 茶褐色
6-19	"	伊勢系 土鍋	口縁部小片			a. 輪積技法 薄手器壁 b. 黄白色 砂粒 e. 良好 f. 外面:横位ナデ 木口状工具掻き成形痕 内面:横位ナデ
6-20	"	瓦質 火鉢	口縁部片			a. 口縁部小片 b. 黄灰色 砂粒 白色粒多く含む c. 黄灰色 e. 良好 f. 外面菊花文スタンプ
6-21	"	瓦質 香炉	体部片			a. 輪積技法 表面横位丁寧なナデ b. 灰黄色 c. 灰黒色 f. 外面菊花文・釣針状唐草文
10-1	第2面 土坑1	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.7	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
10-2	第2面 土坑2	かわらけ	(6.5)	(5.2)	1.6	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
10-3	"	瀬戸 灰釉碗	口縁部片			a. ロクロ b. 黄灰色 砂粒 良土 d. 黄灰色半透明 e. 良好
10-4	第2面 土坑4	かわらけ	(8.2)	(5.4)	2.0	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 土丹粒 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
10-5	"	かわらけ	(12.4)	(7.6)	3.4	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c. 淡橙色 e. 良好
10-6	第2面 土坑5	かわらけ	(12.0)	(7.8)	3.0	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 口縁部に煤付着 灯明皿
10-7	溝 1	かわらけ	7.4	4.9	1.8	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好
10-8	"	かわらけ	(7.8)	(4.8)	1.6	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
10-9	"	かわらけ	7.3	4.5	1.8	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
10-10	"	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.7	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 良土 c. 黄褐色 e. 良好
10-11	"	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗	口縁部片			a. 口縁部小片 b. 灰色 精良堅緻 d. 青緑色半透明 半透明 気泡あり
10-12	"	青白磁 梅瓶	胴部片			a. ロクロ b. 灰色 精良堅緻 d. 水青色 透明 薄く施釉 貫入あり f. 外面に牡丹唐草文を刻む
10-13	"	青白磁 梅瓶	胴部片			a. ロクロ b. 灰白色 黒色微粒 精良堅緻 d. 水青色 透明 薄く施釉 貫入あり f. 外面に牡丹唐草文を刻む
10-14	"	常滑 甕	胴部片			a. 輪積技法 内面指頭跡 横位ナデ b. 灰色 砂粒 石英粒 多量 c. 茶褐色 f. 外面に叩き目痕あり
10-15	第2面 かわらけ敷き	かわらけ	(7.3)	(5.1)	1.7	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
10-16	"	かわらけ	(7.4)	(4.3)	2.0	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 橙色 e. 良好
10-17	"	かわらけ	(7.5)	(5.1)	2.1	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 粗土 c. 黄褐色 e. 良好
10-18	"	かわらけ	(7.7)	(4.5)	2.1	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色 e. やや甘い
10-19	"	かわらけ	(7.1)	(4.7)	1.4	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c. 黄褐色 e. 良好
10-20	"	かわらけ	(7.5)	(5.6)	1.4	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
10-21	"	かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.5	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄褐色 e. 良好
10-22	"	かわらけ	(7.5)	(5.4)	1.5	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 良土 c. 黄灰色 e. やや甘い
10-23	"	かわらけ	(7.6)	(5.7)	1.4	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄灰色 e. やや甘い
10-24	"	かわらけ	7.8	4.2	1.8	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 黄褐色 e. 良好
10-25	"	かわらけ	(7.9)	(5.6)	1.7	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 赤褐色 e. 良好
10-26	"	かわらけ	(7.9)	(5.5)	1.9	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄灰色 e. やや甘い
10-27	第2面 かわらけ敷き	かわらけ	(7.9)	(4.3)	1.8	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 良土 c. 黄褐色 e. 良好 f. 口縁部煤付着 灯明皿
10-28	"	かわらけ	(8.0)	(4.5)	1.6	a. ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b. 微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c. 橙色 e. 良好

表3 遺物観察表(3) II 地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
10-29	第2面 かわらけ敷き	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.7	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
10-30	"	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.8	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色 e.やや甘い
10-31	"	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.4	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.黄灰色 e.やや不良
10-33	"	かわらけ	(8.3)	(5.9)	1.8	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 粉質気味良土 c.黄橙色 e.良好
10-34	"	かわらけ	(8.1)	(6.4)	1.4	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
10-35	"	かわらけ	(11.9)	(7.4)	3.1	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.甘い
10-36	"	かわらけ	(12.0)	(7.3)	3.5	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
10-37	"	かわらけ	12.0	(7.4)	3.3	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
10-38	"	かわらけ	(12.1)	(7.7)	3.4	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 粉質良土 c.黄橙色 e.良好
10-39	"	かわらけ	12.3	7.2	3.1	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
10-40	"	かわらけ	12.3	8.5	3.2	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
10-41	"	かわらけ	12.4	7.7	3.4	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
10-42	"	かわらけ	(12.4)	(7.3)	3.6	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.黄橙色 e.良好
10-43	"	かわらけ	(12.7)	(6.9)	3.5	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 良土 c.黄橙色 e.良好
10-44	"	かわらけ	(12.9)	(7.5)	3.5	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや良土 c.黄灰色 e.良好
10-45	"	かわらけ	(13.0)	(7.0)	3.4	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.甘い e.良好
10-46	"	かわらけ	(13.1)	(7.2)	3.7	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 良土 c.黄灰色 e.甘い
10-47	"	かわらけ	(13.2)	7.5	3.6	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
10-48	"	かわらけ質 ルツボ	口縁部片			a.ロクロ b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.赤橙色 e.良好 f.強い被熱発砲で無数の小穴
10-49	"	東幡系 土器塊	(10.0)			a.手づくね 指頭痕 b.砂質 白色粒 明灰色 良土 c.灰白色 e.良好
12-1	第2面 P-2	青白磁 梅瓶	肩部片			a.ロクロ b.白色 黒色微粒 精良堅緻 d.青緑色半透明 外面薄く施釉 c.橙色 e.良好 f.外面渦巻文を刻む
12-2	第2面 P-4	かわらけ	(7.1)	(4.7)	2.0	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒多し 良土 c.橙色 e.良好
12-3	第2面 P-7	かわらけ	(7.9)	(5.3)	1.4	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-4	"	かわらけ	(7.9)	(3.9)	1.5	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 良土 c.橙色 e.良好
12-5		かわらけ質 ルツボ	口縁部片			a.ロクロ b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.暗灰色 e.良好 f.被熱で発砲し無数の小穴
12-6	第2面 玉石列1	かわらけ	7.3	5.2	1.6	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 e.良好
12-7	"	かわらけ	(8.0)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c.赤橙色 e.良好
12-8	"	かわらけ	(12.4)	(8.0)	3.0	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 小石粒 粗土 c.橙色 e.良好
12-9	"	かわらけ	(12.3)	(7.0)	3.6	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 粗土 c.赤橙色 e.良好 f.二次焼成を受け変色
12-10	"	白かわらけ		(5.8)		a.手づくね 弱い指頭痕 b.微砂 白色粒 良土 c.白黄色 e.良好
12-11	第2面 玉石列2	かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.6	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 粗土 c.黄橙色 e.良好
13-1	第2面 遺構外1	かわらけ	5.2	4.4	2.2	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好
13-2	"	かわらけ	(7.6)	4.5	1.7	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂多し 雲母 海綿骨芯 赤色粒 弱砂質土 c.淡橙色 e.良好
13-3	"	かわらけ	(7.8)	(5.6)	1.5	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 小石粒 粗土 c.橙褐色 e.良好 f.全体に再火赤変

表4 遺物観察表(4) II地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a.成形 b.胎土・素地 c.色調 d.釉薬 e.焼成 f.備考
13-4	第2面 遺構外1	かわらけ	(7.7)	(4.9)	1.5	a.ロクロ 外底系切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.赤褐色 e.極めて良好
13-5	"	かわらけ	(7.6)	(5.0)	1.6	a.ロクロ 外底系切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.良好
13-6	"	かわらけ	7.9	5.3	1.7	a.ロクロ 外底系切痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.不良
13-7	"	かわらけ	(7.9)	(5.1)	1.6	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 弱砂質土 c.橙色 e.良好
13-8	"	かわらけ	7.9	5.0	1.7	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄褐色 e.良好
13-9	"	かわらけ	9.3	6.2	2.4	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-10	"	かわらけ	11.2	7.3	3.5	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
13-11	"	かわらけ	12.3	7.2	3.5	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 小石粒 やや粗土 c.淡橙色 e.良好
13-12	"	かわらけ	(12.7)	8.9	3.0	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 薄手器壁 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.橙色 e.良好
13-13	"	かわらけ	(12.6)	(8.4)	3.4	a.ロクロ 外底系切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色 e.極めて良好
13-14	"	かわらけ	(12.8)	7.5	3.3	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 c.淡橙色 e.良好
13-15	"	かわらけ	(12.8)	(7.5)	3.2	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.淡橙色 e.良好
13-16	"	かわらけ	12.9	7.5	3.5	a.ロクロ 外底系切痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.橙色 e.良好
13-17	"	白かわらけ	底部片			a.手づくね b.微砂 白色粒 c.内面白桃色 外面淡灰白色 e.良好
13-18	"	竜泉窯系 青磁 無文碗	口縁部片			a.ロクロ やや厚手器壁 b.灰色 精良堅緻 d.淡緑灰色半透明 やや厚手施釉
13-19	"	青白磁 梅瓶	胴部片			a.胴部片 ロクロ b.灰白色 堅緻 d.淡緑灰色透明の外面施釉 内面,極薄の鉄分を含む透明釉施釉 f.外面に蓮華唐草文
13-20	"	泉州窯系 黄釉盤	胴部片			a.ロクロ b.鈍い橙色 砂粒白色石粒 d.内面再火で釉薬部分白濁 外面露胎 e.硬質 精良堅緻
13-21	"	龜山窯 甕	胴部片			a.輪積技法 内面に横位指ナデ b.灰色 砂粒 黒色粒砂質 気味 c.灰黒色 e.良好 f.外面に格子目叩き痕
13-22	"	浅鉢型火鉢	口縁部片			a.輪積技法 外面は口縁部横位で体部縦位の刷毛目状ナデ 内面横位ナデ b.灰色 砂粒 黒色粒 やや砂質 c.灰褐色 e.軟質
14-1	第2面 遺構外2	かわらけ	(3.8)	(3.3)	0.8	a.ロクロ 外底系切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-2	"	かわらけ	(6.8)	(5.2)	1.6	a.ロクロ 外底系切痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 やや粗土 c.橙色 e.良好
14-3	"	かわらけ	7.4	(4.9)	2.3	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 赤色粒 砂質気味の良土 c.黄褐色 e.やや不良
14-4	"	かわらけ	7.6	4.3	1.8	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂多し 海綿骨芯 赤色粒 砂質土 c.淡橙色 e.良好
14-5	"	かわらけ	(7.6)	(5.4)	1.8	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 粗土 c.橙色 e.良好
14-6	"	かわらけ	7.7	5.2	1.4	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粉質良土 c.淡橙色 e.良好
14-7	"	かわらけ	7.8	5.6	1.7	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c.明黄褐色 e.やや甘い
14-8	"	かわらけ	(7.4)	4.6	2.2	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c.橙色 e.良好 f.口縁部煤付着 灯明皿
14-9	"	かわらけ	(7.5)	4.7	2.3	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや粉質良土 c.淡橙色 e.良好
14-10	"	かわらけ	(13.1)	(7.8)	3.5	a.ロクロ 外底系切痕 薄手丸深 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 が少ない粉質土 c.橙色 e.良好
14-11	"	かわらけ	(13.2)	(8.6)	3.1	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 b.微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 砂質やや粗土 c.黄褐色 e.やや不良
14-12	"	かわらけ	13.3	(8.5)	3.4	a.ロクロ 外底系切痕 板状圧痕 薄手丸深 b.微砂 海綿骨芯 赤色粒 やや良土 c.橙色 e.良好
14-13	"	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ b.灰白色 微砂 d.緑灰色半透明 厚手施釉 f.外面鑄蓮弁文を片切彫り
14-14	"	竜泉窯系 青磁 蓮弁文碗	口縁部片			a.ロクロ b.灰色 微砂 d.淡緑灰色不透明 小気泡多し やや厚手施釉 f.外面鑄蓮弁文を片切彫り

表5 遺物観察表(5) II 地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
14-15	第2面 遺構外2	同安窯系 櫛搔文皿	(9.5)			a. ロクロ 胴部中位 屈曲した稜をなす 内面櫛搔文 b. 灰色 精良堅緻 d. 淡緑灰色透明 薄い施釉
14-16	"	竜泉窯系 青磁花瓶か	胴部部片			a. ロクロ b. 黒色粒 精良堅緻 d. 明灰緑色半透明 内外面に粗い貫入あり f. 同一個体の小破片20点含む
14-17	"	竜泉窯系 青磁花瓶	高台径 (9.1)			a. ロクロ 高台削り出し b. 灰色 微砂 d. 緑灰色不透明 厚手施釉 畳付と高台脇露胎
14-18	"	竜泉窯系 青磁花瓶	底部部片			a. ロクロ b. 白灰色 精良堅緻 d. 明灰緑色不透明 外面底部厚手施釉 f. 再火を受け全体光沢なく白濁気味
14-19	"	青白磁 小壺		(5.7)		a. 底部片 外型造り 薄い器壁 b. 白色 緻密精良 d. 水青色透明 外底露胎
14-20	"	青白磁 梅瓶	頸部片			a. ロクロ b. 黒色粒 精良堅緻 d. 外面青灰色不透明 内面明青灰色不透明 f. 釉薬全体が再火により釉変色沸騰
14-21	"	青白磁 梅瓶	胴部片			a. ロクロ b. 白色 精良堅緻 d. 水色透明 薄い施釉 内面露胎 f. 外面牡丹唐草文を刻む
14-22	"	青白磁 梅瓶	胴部片			a. ロクロ b. 白灰色 黒色粒 精良堅緻 d. 青灰色透明 薄い施釉 粗い貫入あり 内面透明釉 f. 外面渦巻文を刻む
14-23	"	青白磁 梅瓶	底部片			a. ロクロ b. 白色 黒色粒 精良堅緻 d. 水青色半透明 内面薄い透明釉 f. 外面に牡丹唐草文を刻む
14-24	"	青白磁 梅瓶	胴部片			a. ロクロ b. 白灰色 黒色粒 精良堅緻 d. 外面水青色透明 貫入あり 内面に薄い透明釉 f. 牡丹唐草文を刻む
14-25	"	青白磁 梅瓶	底部片			a. 底部小片 b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 水青色半透明 外面高台部畳付露胎 内面自然釉付着 一部釉ダレあり f. 文様 唐草文
14-26	"	白磁 口元皿	口縁部片			a. ロクロ b. 灰黄色 精良堅緻 d. 明灰白色不透明 外底施釉を拭き取り 口唇部露胎
14-27	"	白磁 水注	注口部片			a. 注口部 b. 灰白色 緻密 d. 淡灰白色透明 薄く施釉 粗い貫入あり
14-28	"	褐釉壺	口縁部片			a. ロクロ b. 灰色 白・黒色粒交えた陶質良土 d. 外面に薄手の黒褐釉 口唇部釉を拭き取り f. 耳付き長胴壺である
14-29	"	褐釉壺	胴部片			a. ロクロ b. 褐灰色 粘性もち緻密 石粒溶け鉄色 d. 外面茶褐色薄い施釉 内面露胎 e. 硬質
14-30	"	瀬戸 鉄釉碗	口縁部片			a. ロクロ 口縁部直線気味 b. 黄白色 砂粒 良土 d. 暗茶褐色 内外面薄く施釉 e. 良好
14-31	"	瀬戸 天目茶碗	体部片			a. ロクロ b. 灰色 良好堅緻 d. 褐味黒色 内面に禾目状 外面釉際に釉溜り
14-32	"	瀬戸 皿	口縁部片			a. ロクロ b. 灰褐色 砂粒 良土 c. 黄灰色 d. 灰緑色半透明 口縁部施釉 e. 良好
14-33	"	瀬戸 皿		(5.3)		a. ロクロ 外底回転糸切痕 b. 灰白色 堅緻 d. 内面淡緑灰色透明な灰釉 外面刷毛塗り 外底露胎
14-34	"	瀬戸 折縁皿	底部片			a. ロクロ b. 黄色味 褐灰色 黒色粒 d. 内外面薄い灰釉を刷毛塗り 灰白色のまだら 外面露胎 e. 堅致
14-35	"	瀬戸 入子	口縁部片			a. ロクロ 口唇外反気味 b. 淡黄色 砂粒 良土 c. 灰色 e. 良好 f. 二次焼成により変色 器肌荒れる
14-36	"	瀬戸 卸皿	口縁部片			a. ロクロ 口唇丸味もつ b. 灰白色 精良土 c. 灰白色 降灰部灰黄色 e. 良好 f. 内面口縁下に卸し目
14-37	"	瀬戸 卸皿	口縁部片			a. ロクロ 口唇部肥厚し端部上面が凹状 b. 淡黄色 砂粒 良土 c. 灰白色 e. 良好
14-38	"	瀬戸 瓶子	(4.5)			a. ロクロ b. 灰色 砂粒 黒色粒 緻密 d. 淡緑灰色 薄く施釉 口唇～外面剥落 e. 良好
14-39	"	瀬戸 仏花瓶	残存幅:4.8 高:2.5 孔径:1.8 穿孔深さ:2.1			b. 淡白色 砂粒 雲母 良土 c. 淡桃色～淡白色 e. 良好 f. 二次焼成により変色 外底中心近くに丸棒状の先端で直径4mm深さ1mmのへこみあり
14-40	"	渥美 壺		10.1		a. 底部片 輪積技法 外底砂目底 b. 灰色 白色粒 堅緻
14-41	"	常滑 甕	口縁部片			a. 輪積技法 b. 灰色 黒色粒・白色粒をやや多く含む 堅緻 c. 表面:暗赤褐色 f. 中野編年6b型式と思われる
14-42	第2面 遺構外2	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁～体部片			a. 輪積技法 b. 褐灰色 黒色・白色石粒多く含む粗胎 c. 暗灰色 f. 内面 緑灰色の自然釉
14-43	"	瓦質 火鉢	底部片			a. 輪積技法 外面に木口状ナデ 外底砂目 b. 灰色 砂粒 小石粒 粗土 c. 暗灰色 e. 良好 f. 外面二次焼成により器壁荒れる
14-44	"	瓦質 火鉢	口縁部片			a. 口縁部肥厚の鉢型 輪積技法 口縁～内面磨き痕 b. 淡橙色 砂粒 小石粒 粗土 c. 茶褐色 e. 良好 f. 外面に16弁菊花文スタンプ
14-45	"	砥石	残存長9.4 幅:3.1～1.9			a. 方柱状 木口面以外の4面を砥面使用 c. 明褐灰色 f. 上野産中砥

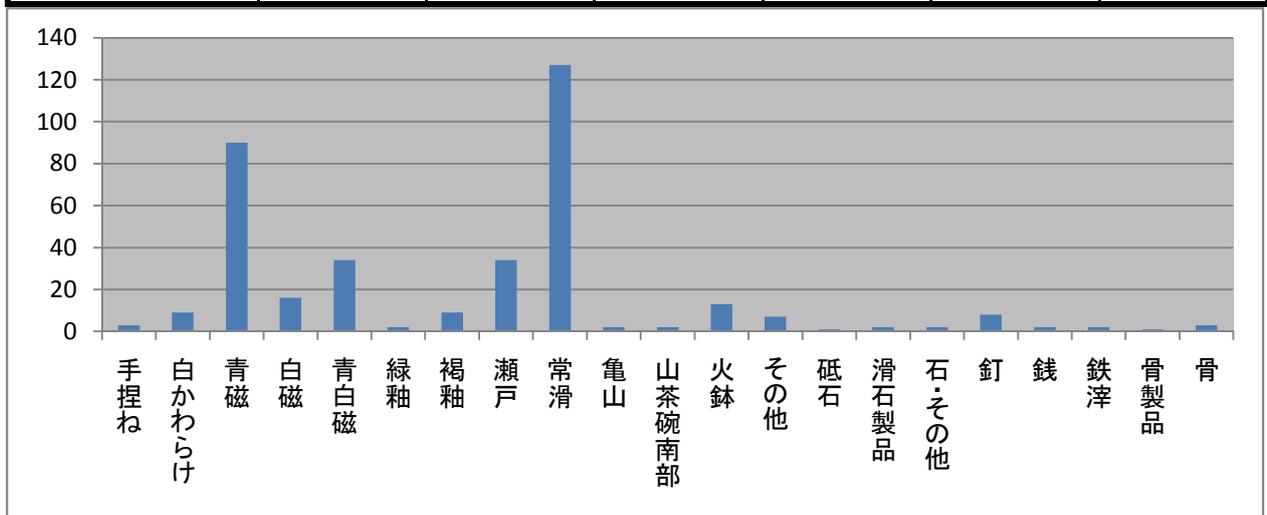
表6 遺物観察表(6) II 地点

()は復元値

図番号	層位・遺構	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形 b. 胎土・素地 c. 色調 d. 釉薬 e. 焼成 f. 備考
14-46	第2面遺構外2	鉄製品 釘	残存長4.6×幅0.7×厚0.3			a. 鍛造 断面四角形
14-47	"	鉄製品 釘	残存長3.7×幅0.5×厚0.4			a. 鍛造 断面四角形
14-48	"	鉄製品 釘	残存長3.1×幅0.4×厚0.4			a. 鍛造 断面四角形
14-49	"	鉄製品 釘	残存長2.7×幅0.3~0.5×厚0.3			a. 鍛造 断面四角形
16-1	第2面構築土中(8~10層)	かわらけ	7.5	5.7	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 赤色粒 海綿骨芯 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
16-2	"	かわらけ	(7.7)	(5.3)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂多め 海綿骨芯 赤色粒 弱砂質土 c. 淡橙色 e. 良好
16-3	"	かわらけ	(7.6)	(5.3)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 粉質気味 c. 淡橙色 e. 良好 f. 指押し片口状
16-4	"	かわらけ	(7.5)	(6.2)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
16-5	"	かわらけ	7.5	4.7	2.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質土 c. 橙色 e. 良好
16-6	"	かわらけ	(7.9)	5.2	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや砂質粗土 c. 淡橙色 e. 良好
16-7	"	かわらけ	(7.8)	(5.0)	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 弱砂質土 c. 淡橙色 e. やや甘い
16-8	"	かわらけ	(7.9)	(5.8)	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 粗土 c. 茶褐色~暗褐色 e. 良好 f. 全体的に火を
16-9	"	かわらけ	(8.8)	(5.6)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 やや粗土 c. 橙色 e. 良好 f. 全体的に焼け煤付着
16-10	"	かわらけ	12.4	7.4	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 やや粗土 c. 橙色 e. 良好
16-11	"	かわらけ	12.7	6.4	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 海綿骨芯 赤色粒 砂質土 c. 橙色 e. 良好
16-12	"	かわらけ	12.6	7.6	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 赤色粒 土丹粒やや砂質粗土 c. 淡橙色 e. 良好
16-13	"	龍泉窯系青磁 蓮弁文碗	(15.4)		(5.5)	a. ロクロ b. 暗灰色 精良堅緻 c. 橙色 d. 暗緑灰色不透明 薄手施釉 小気泡多し f. 外面鑄蓮弁文を片切彫り
16-14	"	龍泉窯系青磁 蓮弁文碗	口縁部片			a. ロクロ b. 明灰白色 精良堅緻 d. 緑灰色半透明 薄い施釉 粗い貫入 f. 外面鑄蓮弁文を片切彫り
16-15	"	龍泉窯系青磁 蓮弁文碗	口縁部片			a. ロクロ b. 灰白色 精良堅緻 d. 暗緑灰色不透明 内外面に厚手施釉 釉表が再火で光沢なくあれ肌 f. 外面鑄蓮弁文を片切彫り
16-16	"	龍泉窯系青磁 劃花文碗	口縁部片			a. ロクロ b. 灰色 黒色粒 精良緻密 d. 緑灰色透明 e. 堅緻 f. 内面劃花文を彫る
16-17	"	青白磁 梅瓶	胴部片			a. ロクロ b. 淡白色 精良堅緻 d. 水青色透明 外面薄手施釉 再火で荒れ肌 内面露胎 f. 外面唐草文を彫る
16-18	"	青白磁 梅瓶	底部片			a. ロクロ b. 灰白色 黒色粒 精良堅緻 d. 水青色透明 底部露胎 内面透明釉 f. 外面唐草文を彫る
16-19	"	白磁 口元皿	(12.8)		(2.7)	a. ロクロ 口縁~体部片 b. 白色 黒色粒 精良堅緻 d. 明白灰色半透明 薄手施釉 口唇部露胎
16-20	"	黒褐釉 壺	口縁部片			a. ロクロ 口縁部外反気味 b. 褐味灰色 砂粒 白色粒 粘性強く緻密 d. 黒褐色 外面に光沢ない薄手の施釉
16-21	"	常滑 甕	口縁部片			a. 輪積技法 b. 灰褐色 砂粒 長石粒 石英粒 c. 暗褐色 降灰部分は灰緑色 e. 堅緻 f. 中野6型式
16-22	"	常滑 甕	肩部片			a. 輪積技法 b. 灰色~黄灰色 砂粒 長石粒 多量 c. 内面褐色 外面赤褐色 f. 外面に車輪文スタンプ
16-23	"	常滑 鉢	口縁部片			a. 輪積技法 b. 灰褐色 砂粒 長石粒多量 c. 褐色 g. 口縁部自然降灰
16-24	第2面構築土中(8~10層)	鉄製品 釘	残存長3.8×0.9×0.6			a. 鍛造 断面四角形
16-25	トレンチ第3面中(11層)	かわらけ	(7.5)	5.3	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色 e. 良好
16-26	"	かわらけ	(8.0)	(5.5)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. やや不良
16-27	"	かわらけ	8.3	5.3	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 板状圧痕 b. 微砂 海綿骨芯 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色 e. 良好

表7 遺物分類別出土数量・比率表 II 地点

出土地種類		第1面	第2面	第2面下	第2面下トレンチ	個数	比率(%)
かわらけ	ロク口	292	6151	215	11	6669	94.76
	手捏ね	2	1	0	0	3	0.04
	白	3	6	0	0	9	0.13
舶載陶磁器	青磁	17	63	6	4	90	1.28
	白磁	6	8	2	0	16	0.23
	青白磁	4	26	2	2	34	0.48
	緑釉	0	2	0	0	2	0.03
	褐釉	0	9	0	0	9	0.13
国産陶磁器	瀬戸	16	7	11	0	34	0.48
	常滑	43	64	19	1	127	1.8
	亀山	0	2	0	0	2	0.03
	山茶碗(南部)	0	2	0	0	2	0.03
土製品	火鉢	8	5	0	0	13	0.18
	その他	3	4	0	0	7	0.1
石製品	砥石	0	1	0	0	1	0.01
	滑石製品	1	0	1	0	2	0.03
	その他	1	1	0	0	2	0.03
金属製品	釘	2	5	1	0	8	0.11
	銭	2	0	0	0	2	0.03
	鉄滓	1	1	0	0	2	0.03
骨製品	加工品	0	0	1	0	1	0.01
自然遺物	骨	1	1	1	0	3	0.04
合計		402	6359	259	18	7038	
比率(%)		5.7	90.3	3.7	0.3	7038	100%





◀ a. 遺跡遠景(西から)

小町大路 ▶

△北条小町邸跡

△宇津宮辻子幕府跡



◀ b. 第1面全景(東から)

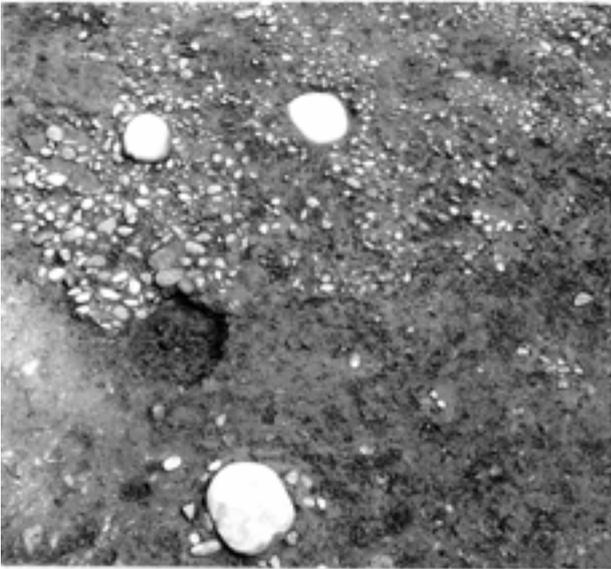
▶ c. 第1面全景(南から)



I 地点(1)



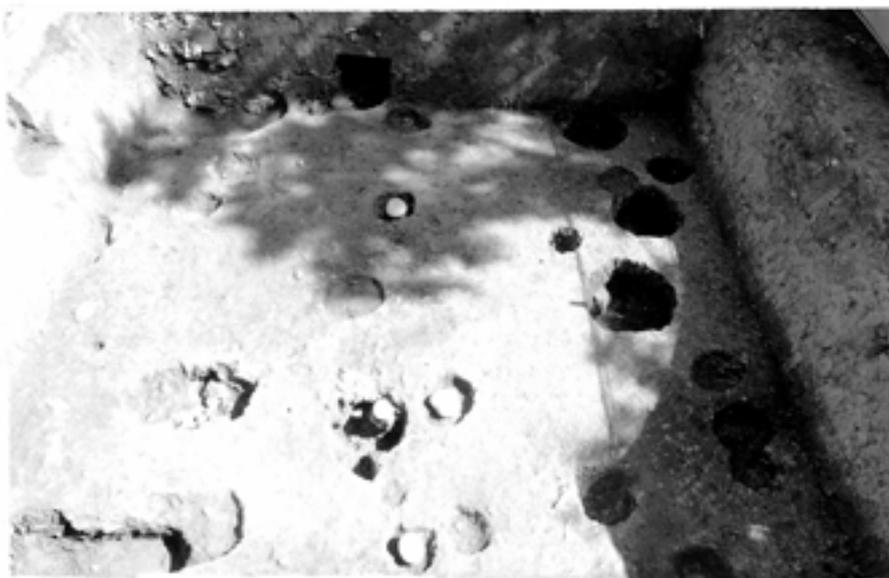
▲ a. 第2a面全景(西から)



▲ b. 建物1の礎石・砂利面



▲ c. 砂利面検出状況



▲ d. 第2b面全景(西から)

I 地点(2)



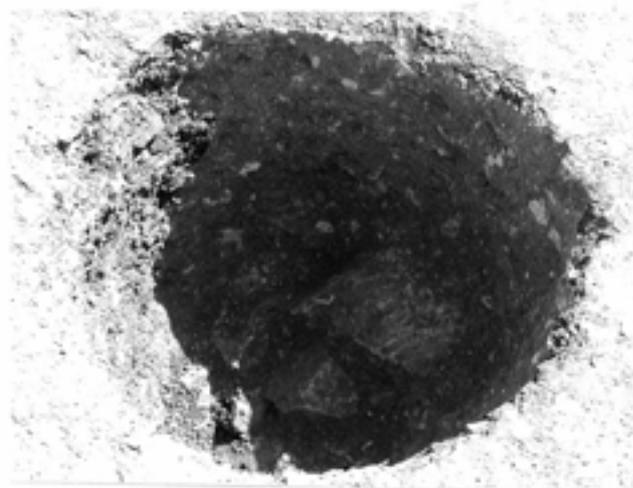
▲a. 第2b面全景(東から)



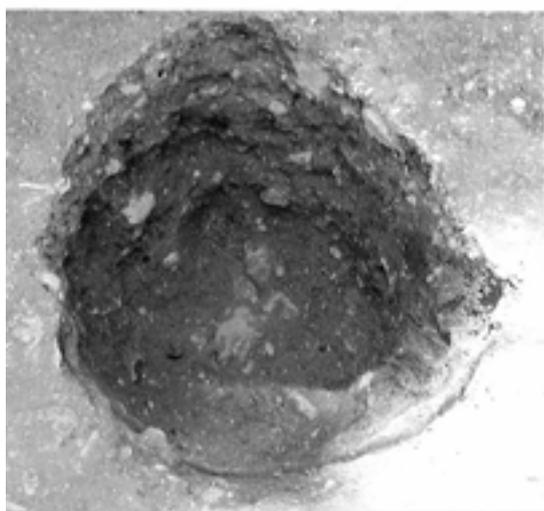
▲b. 建物1 礎石列(西から)



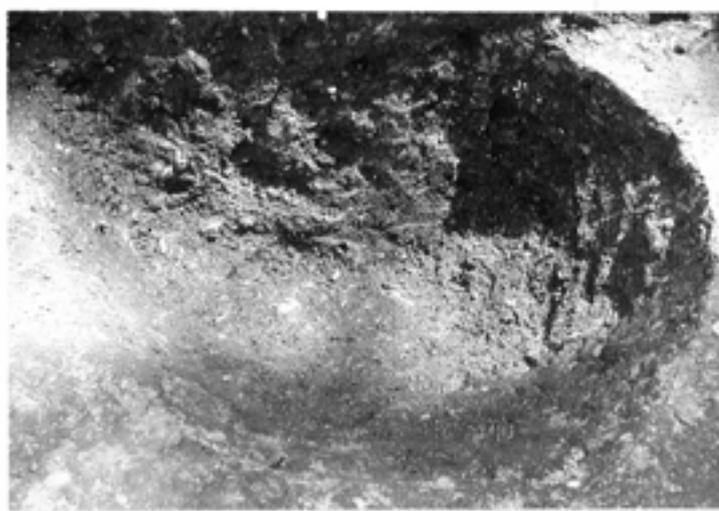
▲c. 建物1の礎石2



▲d. P5



▲e. P6

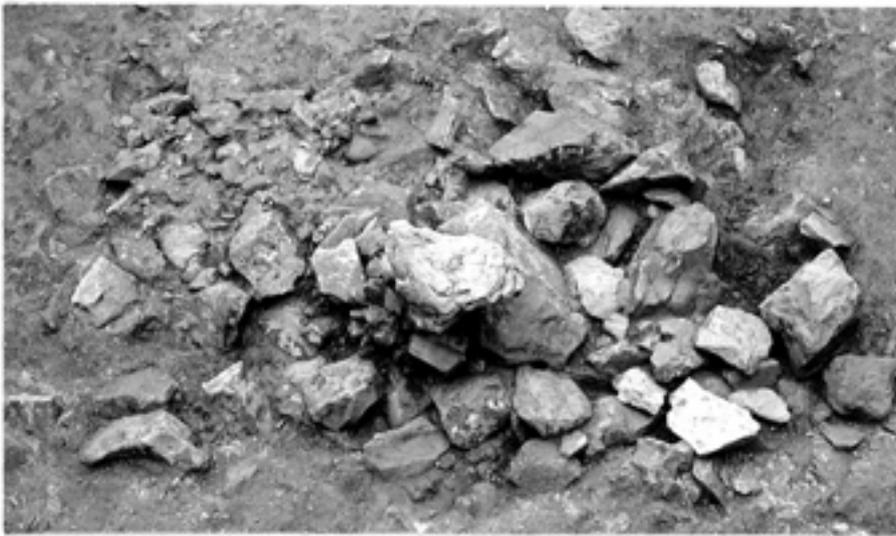


▲f. P8

I 地点(3)



◀ a. 第3面全景(西から)



◀ b. 土坑状遺構



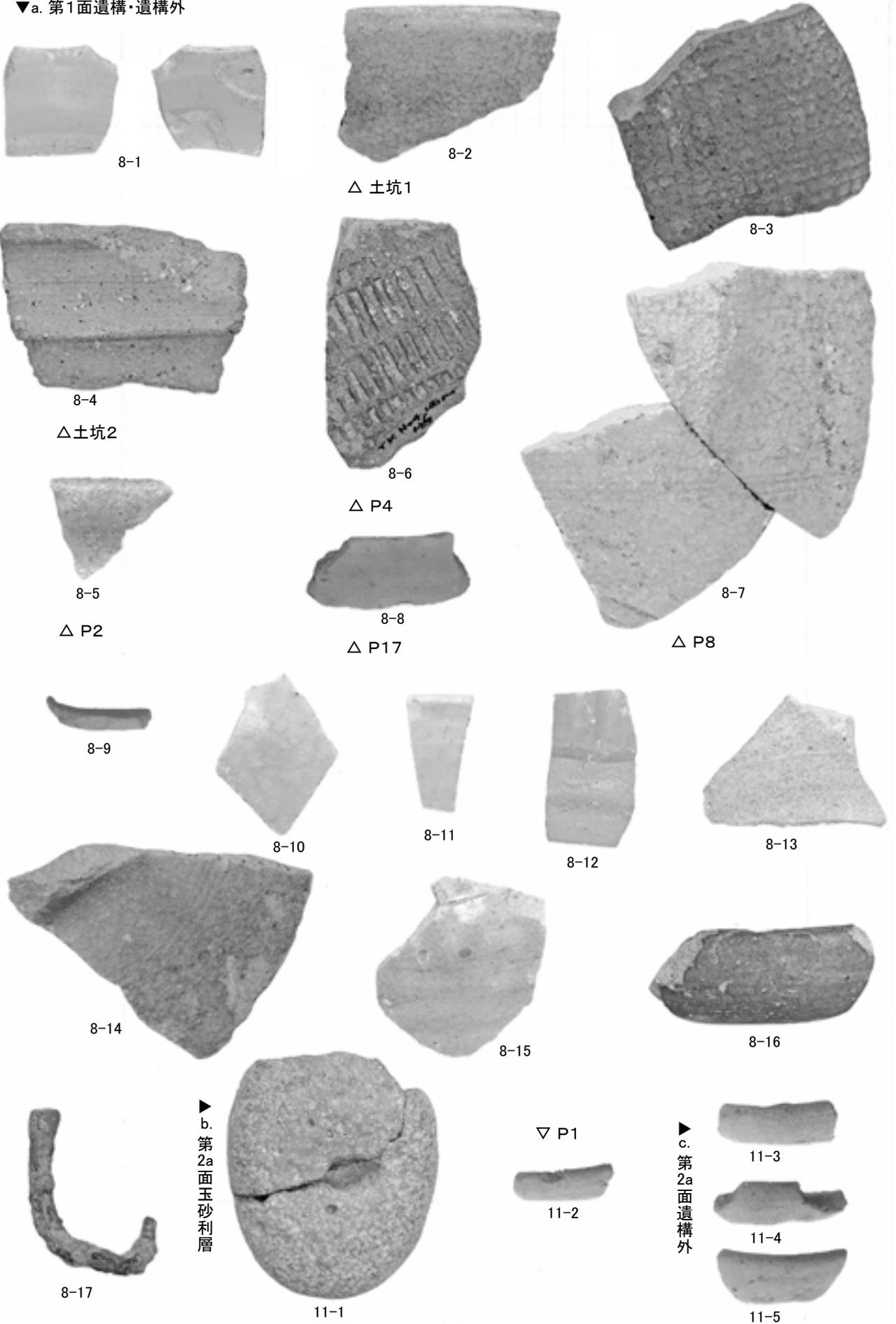
▲ c. 調査区南壁土層

▼ d. 調査区東壁土層



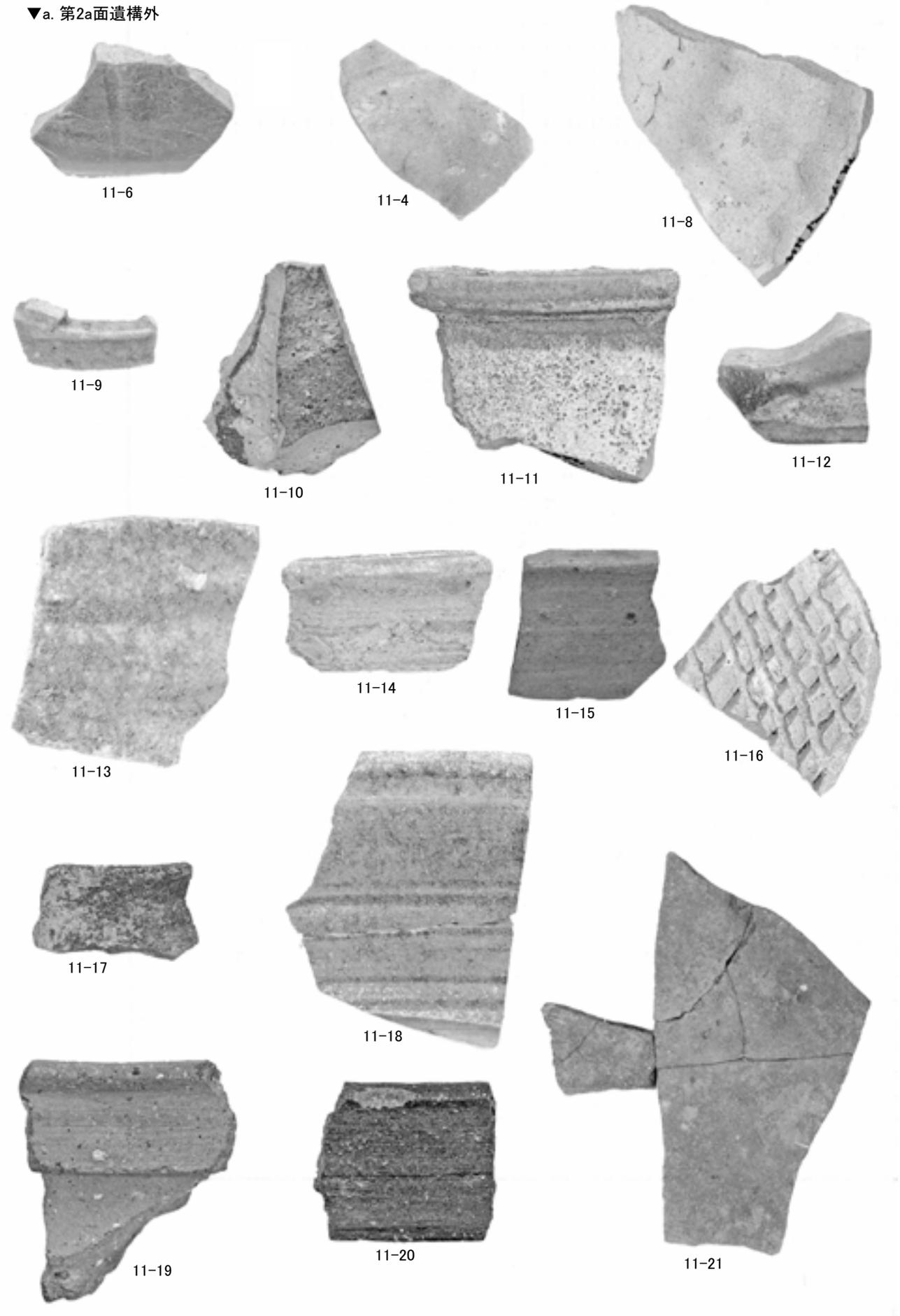
I 地点(4)

▼a. 第1面遺構・遺構外



图版6

▼a. 第2a面遺構外



I 地点(6)

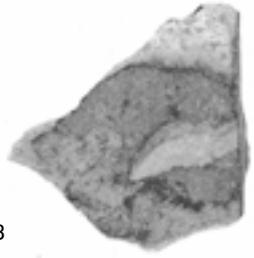
▼a. 第2a面遺構外



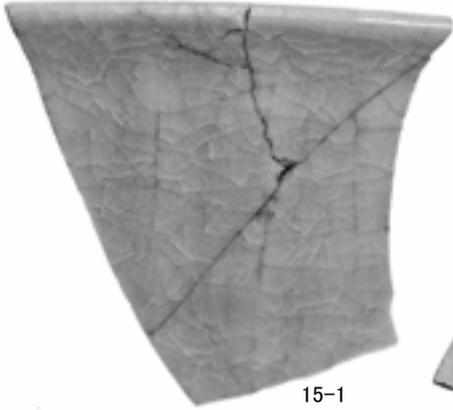
11-22



11-23



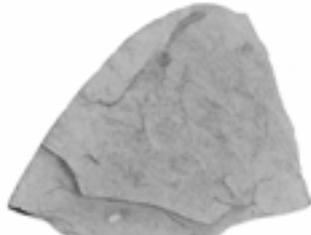
▽
中
圖
砂



15-1



15-2

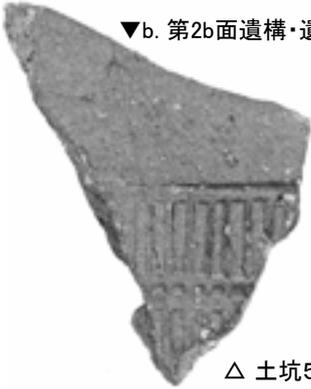


15-4



15-3

▼b. 第2b面遺構・遺構外



△ 土坑5



15-6



15-7



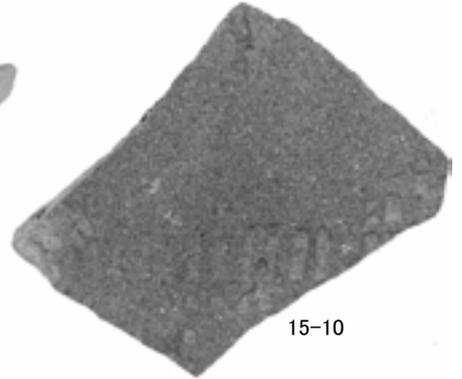
15-8



15-9

▽ P5

▽ P6



15-10

▽ P8



15-11

▽ P9

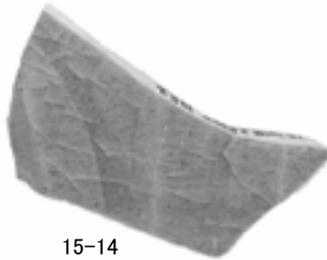


15-12

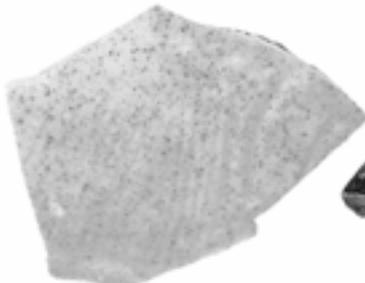
▽ P10



15-13

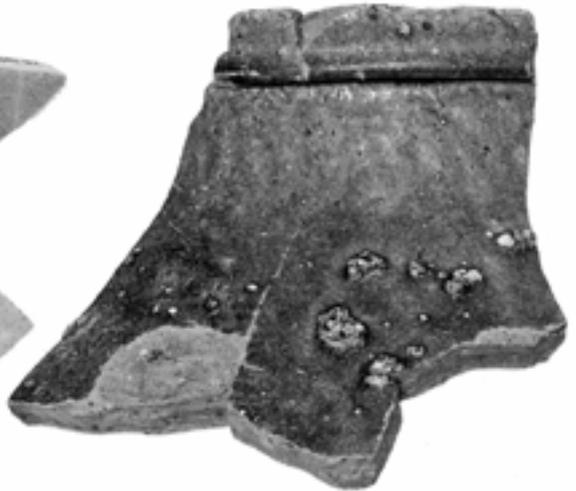


15-14



15-15

▼c. 第3面遺構 土坑1



19-1

I 地点(7)

図版8

▼a. 第3面遺構外



19-2



19-3



19-4



19-5



19-6



19-7



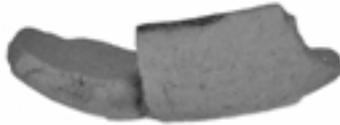
19-8



19-9



19-10



19-11



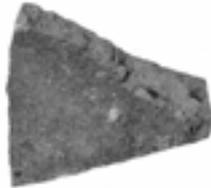
19-12



19-13



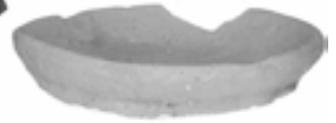
19-14



19-15

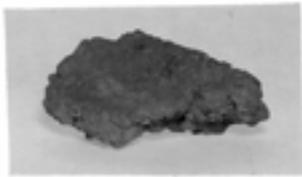


19-16



19-17

▼b. 第3面下トレンチ



▲c. 第1面出土の焼け壁土



▲d. 第2面遺構外出土の焼け壁土

I 地点(8)



▲ a. 遺跡周辺遠景



▲ b. 調査地点遠景

II 地点



◀ a. 調査地点近景

左手の奥がⅠ地点で
手前がⅡ地点である



▶ b. Ⅰ区第1面全景（西から）



◀ c. Ⅱ区第1面全景（南から）

Ⅱ地点



◀ a. I区第2面全景(北から)



▶ b. II区第2面全景(南から)



◀ c. II区第2面全景(北から)

II 地点



▲ a. I区第2面（北から）



▲ c. I区第2面（北から）



▲ b. I区第2面（北から）

▶ e. I区調査区南壁
拡張トレンチ



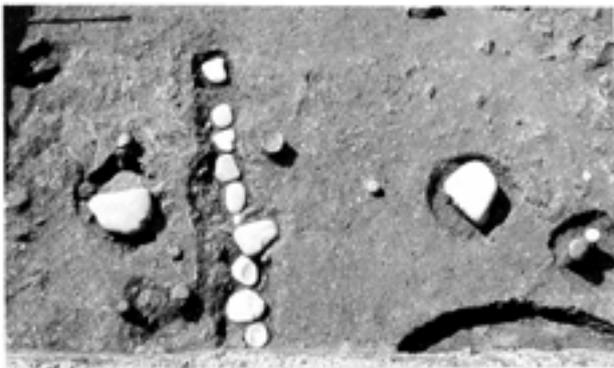
▼ f. I区第2面 土坑1（西から）



▲ d. I区第2面 礎石建物1（南から）



▼ g. II区第2面 礎石建物1・溝1（西から）



▲ h. II区第2面 礎石建物・玉砂利



II 地点



▲ a. I区第3面全景
(西から)



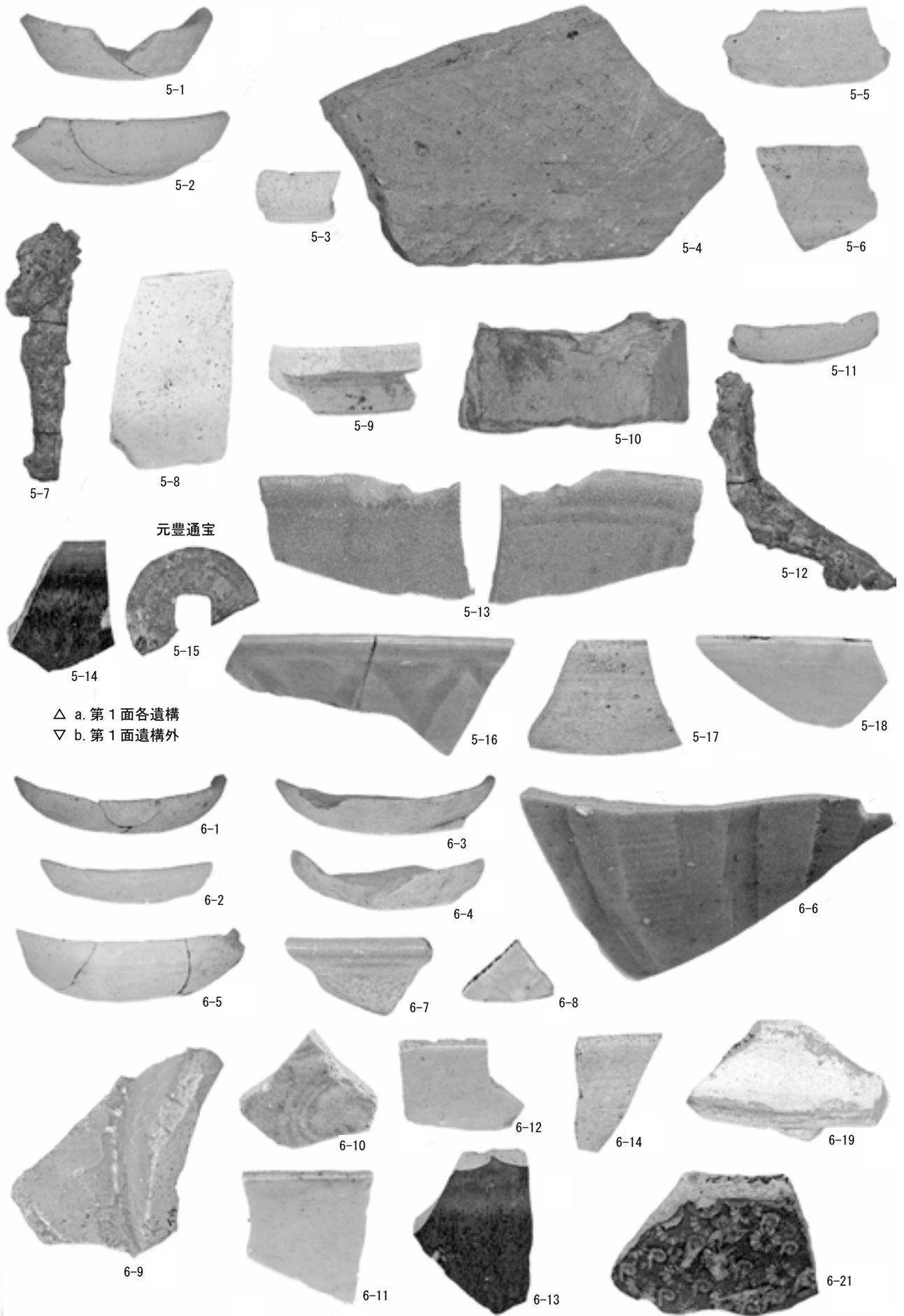
▲ b. I区第3面全景 (北から)

▼ c. I区調査区北壁土層



◀ d. II区調査区西壁土層

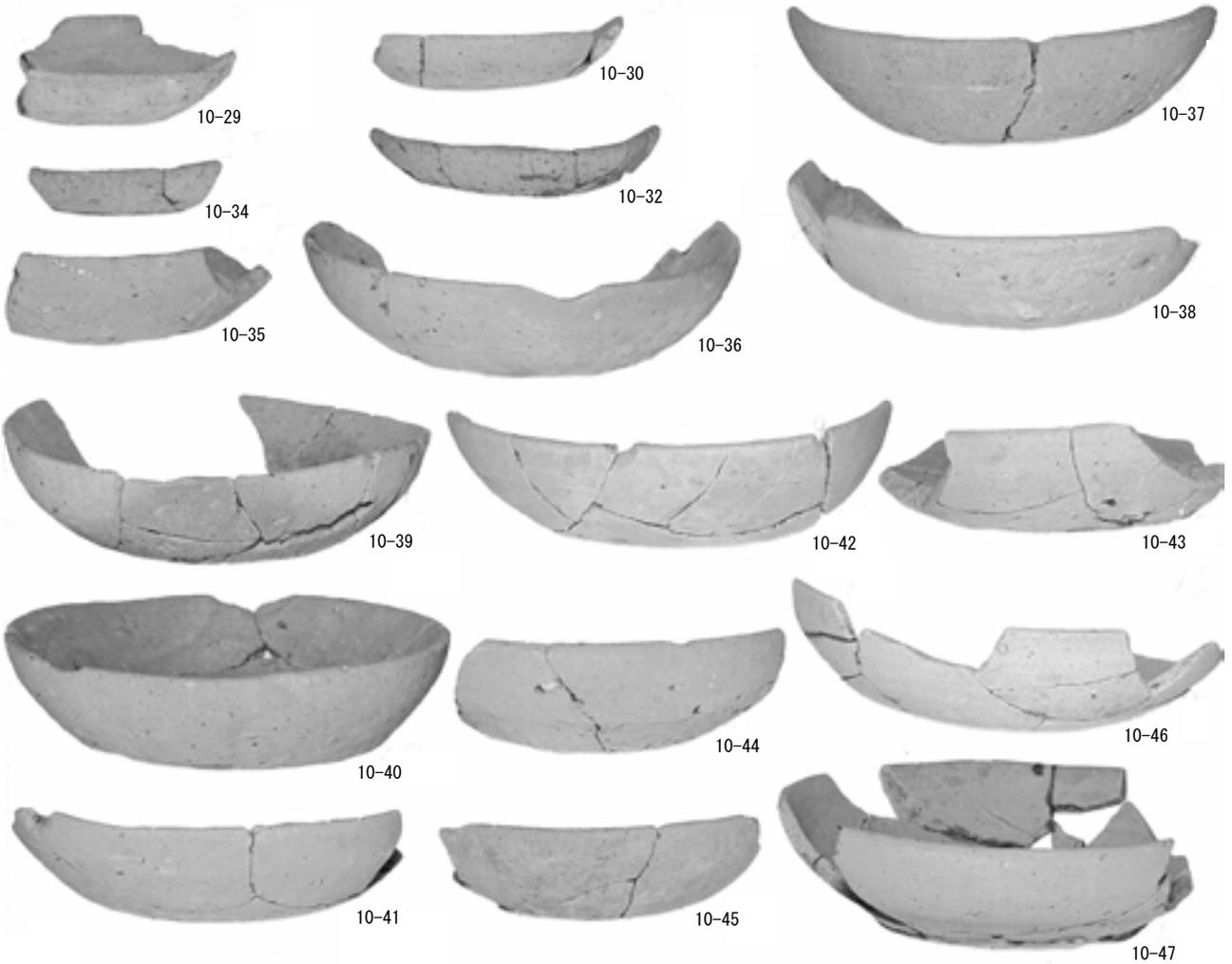
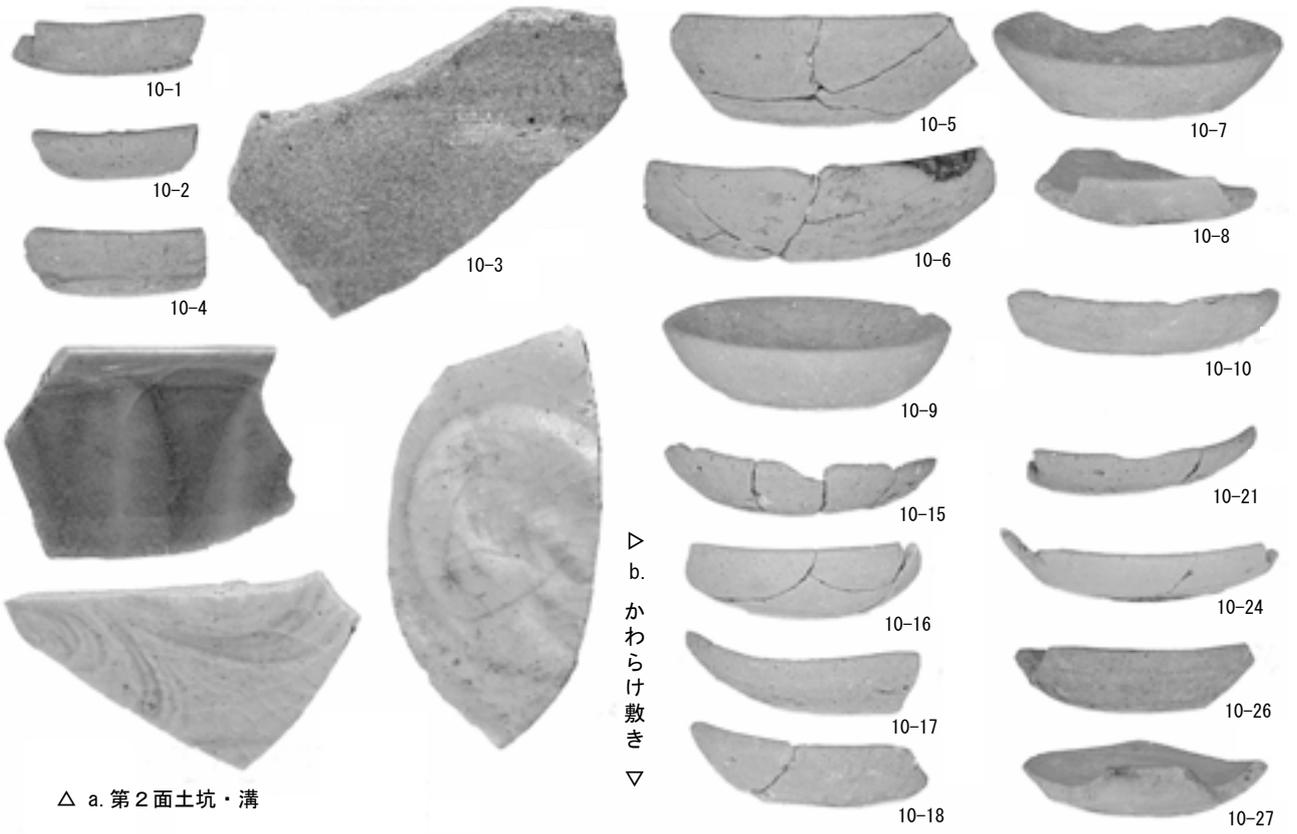
II地点



元豐通寶

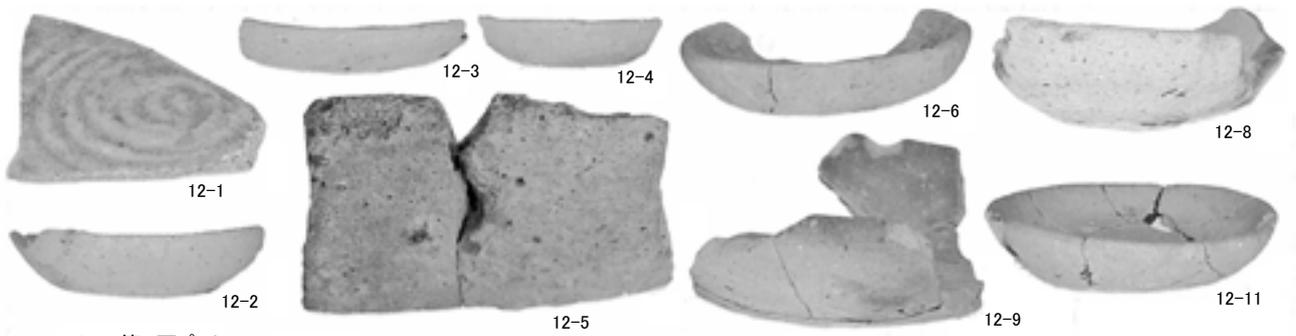
△ a. 第1面各遺構
▽ b. 第1面遺構外

II 地点 第1面



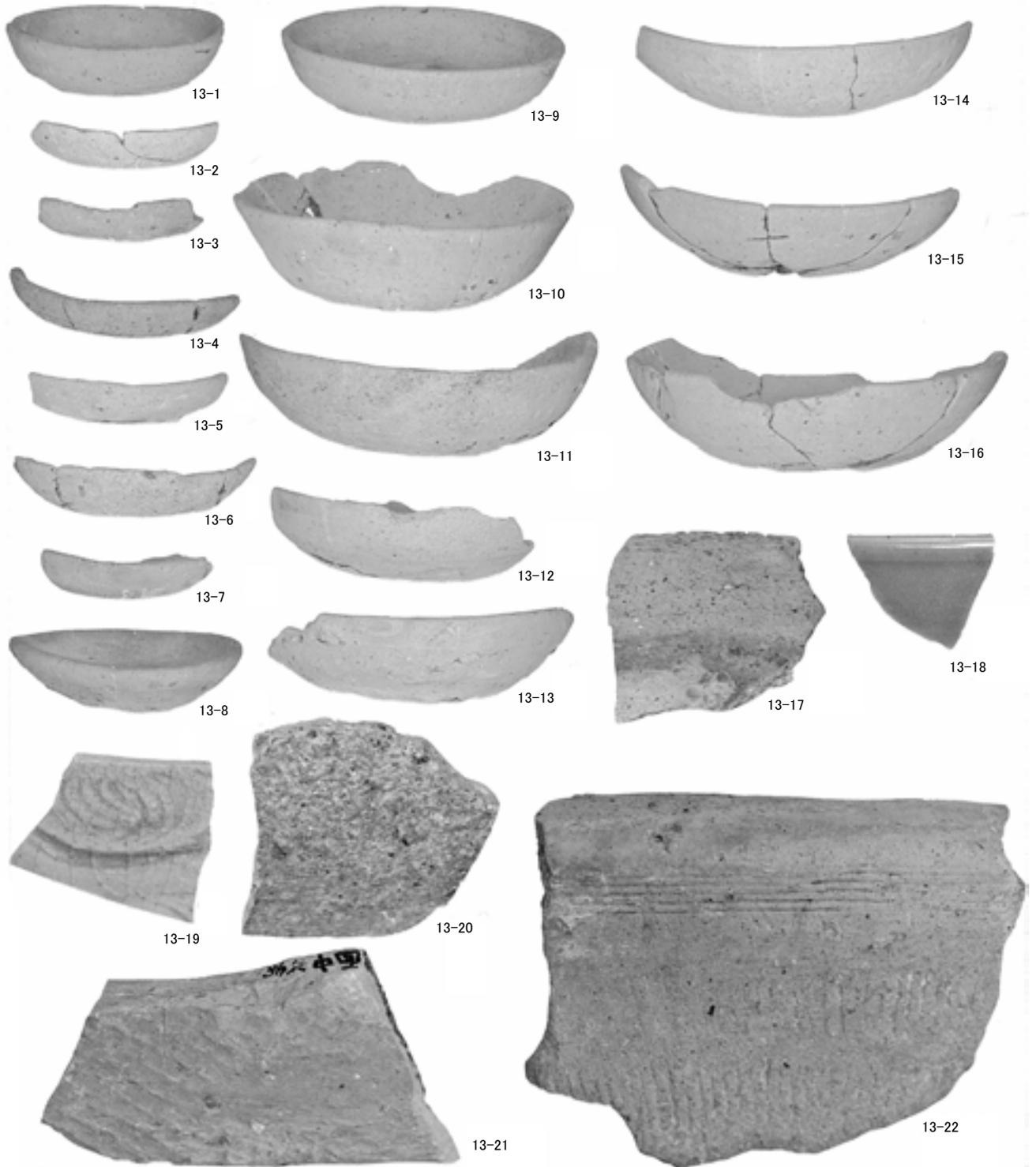
II 地点 第2面(1)

図版8



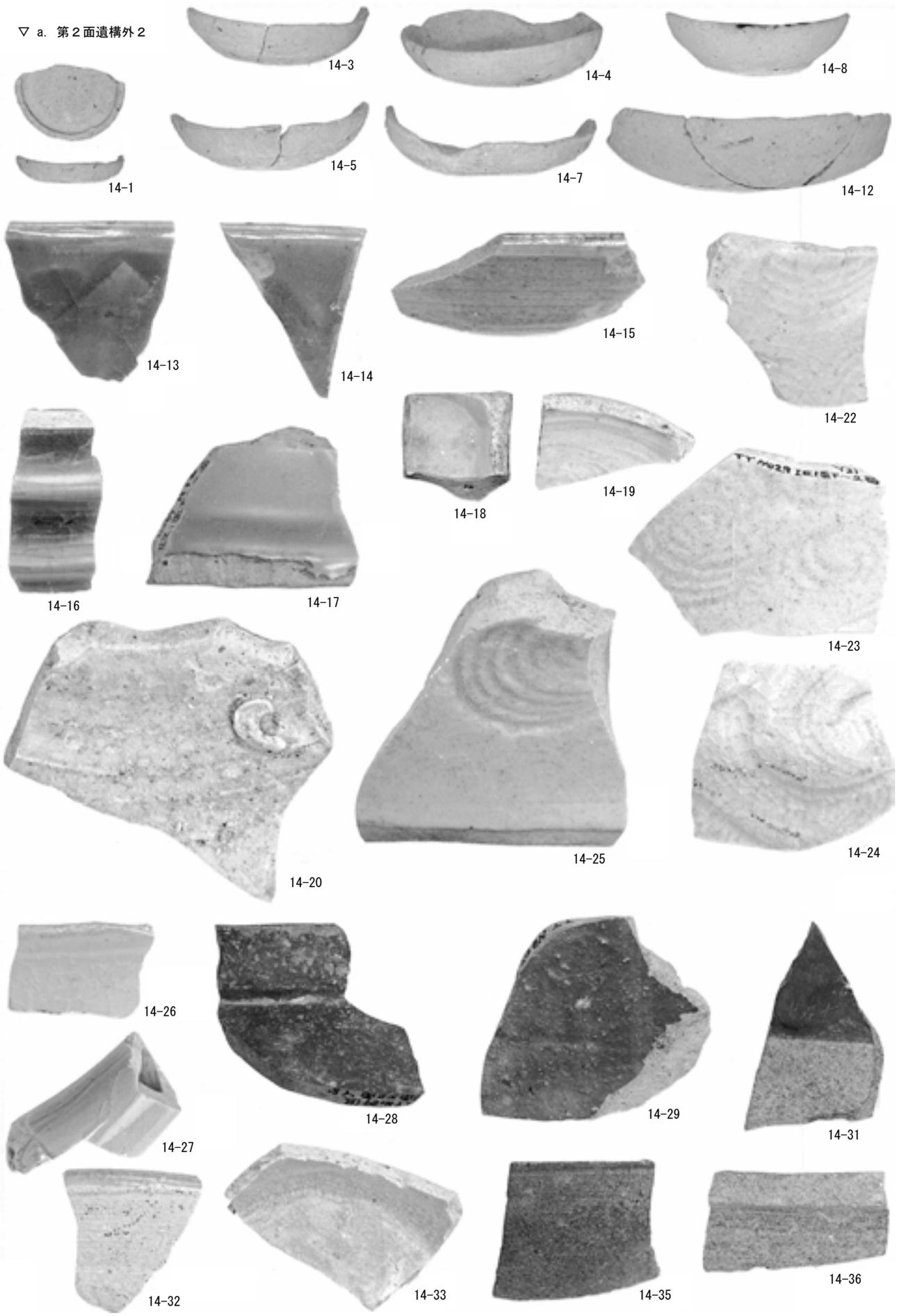
△ a. 第2面ピット
 ▽ c. 第2面遺構外1

△ b. 第2面玉石列

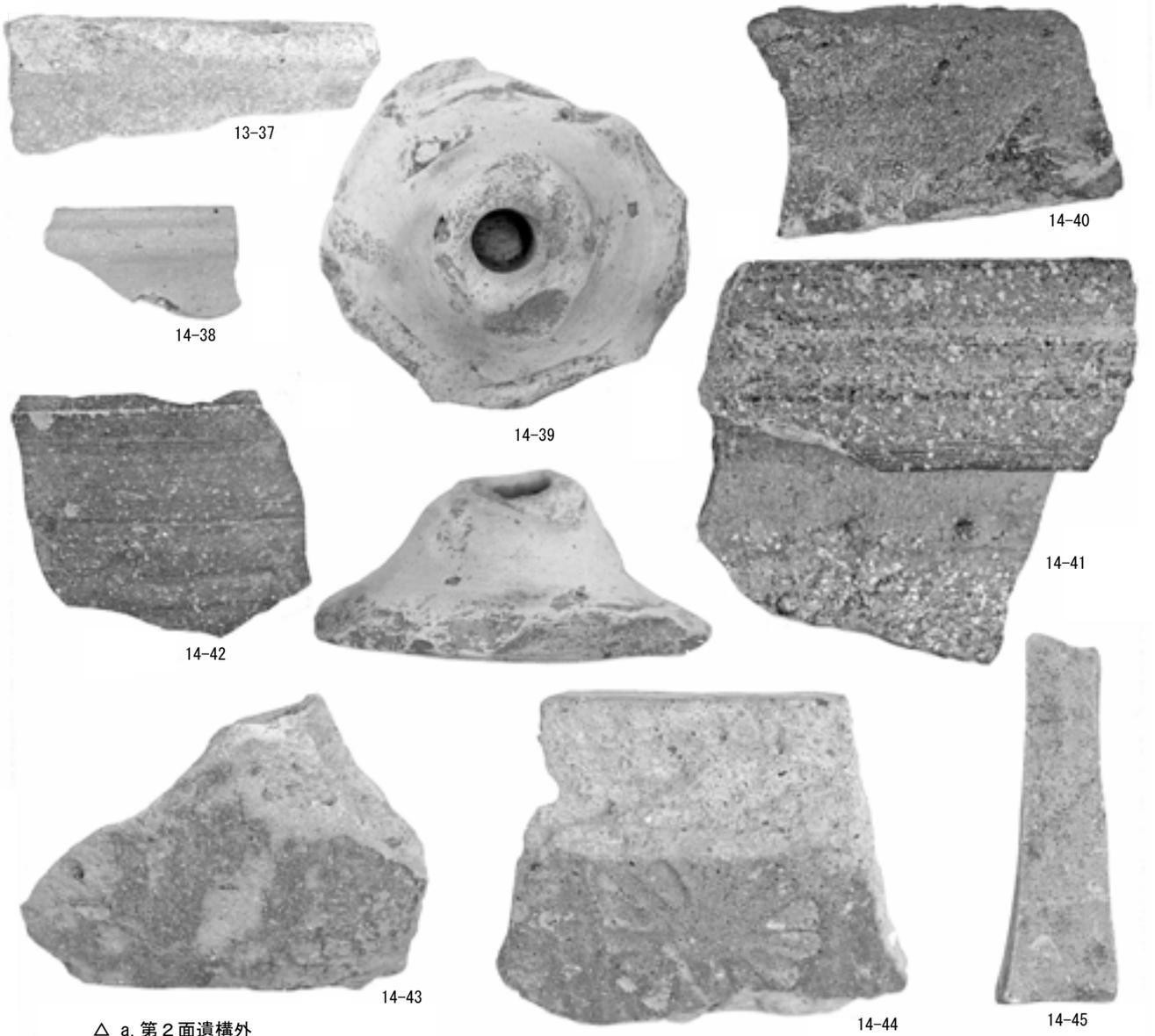


II 地点 第2面(2)

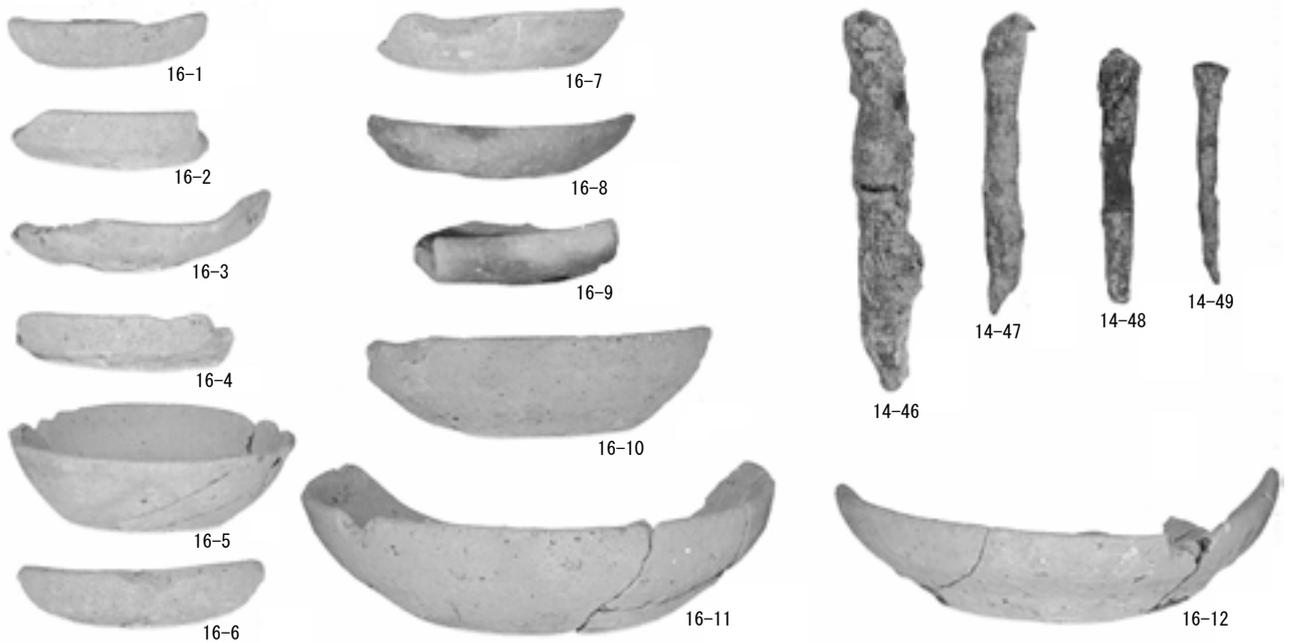
▽ a. 第2面遺構外2



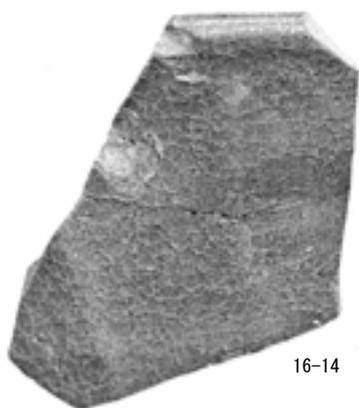
II 地点 第2面(3)



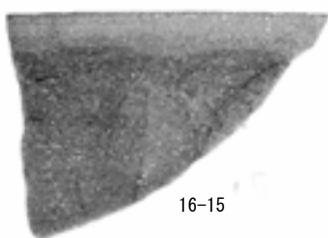
△ a. 第2面遺構外
▽ b. 第2面構築土中



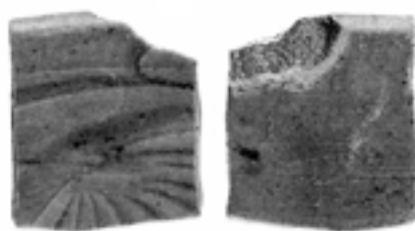
II 地点 第2面遺構外・構築土中



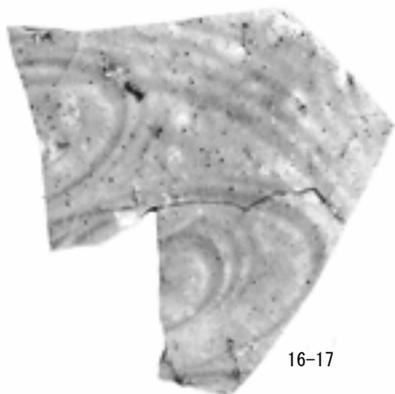
16-14



16-15



16-16



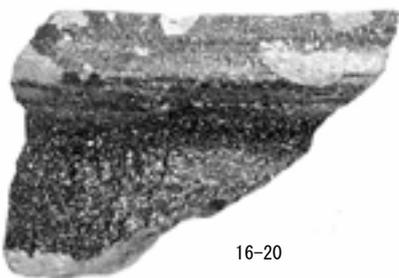
16-17



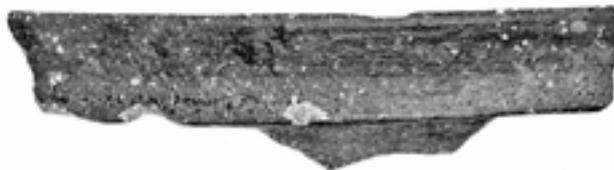
16-18



16-19



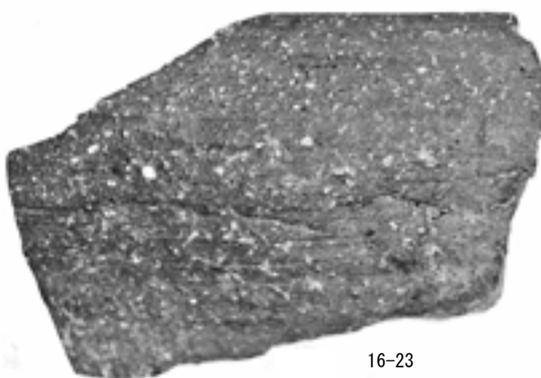
16-20



16-21



16-22



16-23



16-24

△ a. 第2面構築土中
▽ b. 第2面下トレンチ



16-25



16-26



16-27

II 地点 第2面構築土中

